

博士論文

横光利一の欧州体験と

帰国後の日本表象に関する総合的研究

二〇二一年三月

立命館大学大学院文学研究科

人文学専攻博士課程後期課程

中井 祐希

立命館大学審査博士論文

横光利一の欧州体験と  
帰国後の日本表象に関する総合的研究  
(A Comprehensive Study of Yokomitsu Riichi's Experiences in  
Europe and Representation of Japan After His Return)

2021 年 3 月

March 2021

立命館大学大学院文学研究科  
人文学専攻博士課程後期課程  
Doctoral Program: Major in Humanities  
Graduate School of Letters  
Ritsumeikan University

中井 祐希

NAKAI Yuki

研究指導教員：中川 成美 教授

Supervisor : Professor NAKAGAWA Shigemi

凡例	1
----	---

序章 横光利一は欧州でどのような足跡を残していたのか	1
----------------------------	---

一 横光利一の欧州体験の意義	1
二 横光利一の足跡を辿るために	7
三 本論の趣旨と構成	12

第一章 航路 <sup>ルート</sup> を詠む・起源 <sup>ルーツ</sup> を詠む——横光利一と洋上句会——	16
--	----

一 欧州航路を詠む	16
二 揺れる船内・身体・心情	19
三 ずれ始める季節・季語・月	25
四 航路 <sup>ルート</sup> から起源 <sup>ルーツ</sup> への旅	29

第二章 隆起する「欧州紀行」——横光利一のパリ体験——	39
-----------------------------	----

一 「欧州紀行」に描出されたパリの多面性 <sup>ブランク</sup>	39
二 書記化しえない空白と横光のパリ生活	41

三	パリという“山”……………	46
四	横光利一とフランス人民戦線……………	50
第三章 書き変わる日本と東欧——横光利一のブダペスト体験——……………59		
一	書き変わる東欧への旅……………	59
二	ツラニズムという紐帯……………	62
三	「旅愁」へと流れる音……………	67
四	ブダペストという活路……………	70
第四章 横光利一とベルリン・オリンピック——身体感覚・認識・トポス——……………81		
一	横光利一とベルリン・オリンピック……………	81
二	「一個の自然人」から日本の〈代表〉者へ……………	83
三	オリンピックでの横光のまなざし……………	87
四	身体感覚——認識——トポス……………	92

第五章 〈異言語〉への旅と愁い——横光利一「旅愁」論……………105

一 「旅愁」の「断層」を跨いでいくために……………105

二 パリでの〈異言語〉体験……………109

三 「感覚の古層」への旅……………115

四 イマ・ココの言語を脱色した果てに……………123

第六章 それでも最期は微笑を浮かべて——横光利一「微笑」論……………131

一 苦しい表情から零れ落ちる微笑……………131

二 書き変わる栖方……………134

三 戦後は冷笑する……………139

四 微笑を失えば不正となる……………144

終章 横光利一の足跡を辿り終えて……………154

一 飛ぶための羽根を探し求めて……………154

二 一〇〇年目の「旅愁」論のために……………157

補足資料一	「欧州紀行」・「旅愁」書誌情報	160
補足資料二	渡欧年譜	168
初出・原題一覧		187

## 凡例

一、横光利一作品からの引用は、原則として河出書房新社版『定本横光利一全集』に拠った。ただし、本論文の性質上「旅愁」の引用部に関しては、特記しない限り初出本文を採用した。

一、本文の引用にあたって、旧漢字は現行の表記に改めた。ただし固有名詞や作品名に関しては原文のままとしたところもある。そのほか、引用文中の傍点やルビは、特記しない限り原文のままにした。誤字・脱字についても「ママ」と付記の上、そのままとしている。

一、引用文中で中略を行った箇所には（中略）、原文の文脈を明確にするために言葉を補った場合は「論者注…」のように「」で括って示した。斜線「／」は改行を示している。また本論内で、通例とは異なる意味で使用している語彙については「〜」と表記して区別した。

一、引用した本文の出典について、新聞や雑誌に掲載された作品名は「」で表記し、単行本や新聞・雑誌の名称は『』で表記した。また、年次は西暦での表記を原則とし、月刊紙誌については年月まで、日刊紙誌は年月日までの表記とした。引用文献名の副題を示すダッシュ「――」は省略し、題目と副題のあいだに全角スペースを入れて記載した。

横光利一の欧州体験と

帰国後の日本表象に関する総合的研究



## 序章 横光利一は欧州でどのような足跡を残していたのか

### 一 横光利一の欧州体験の意義

一九三六年二月二〇日、横光利一は神戸港から日本郵船箱根丸に乗りヨーロッパへ出発する。渡欧のきっかけは、東京日日・大阪毎日新聞社から、ベルリン・オリンピックの視察を勧められたからであつた<sup>(1)</sup>。横光を乗せた箱根丸は、台湾・シンガポール・アデン等の寄港地に寄りつつ、三月二七日マルセイユに到着。横光はそこで下船し、翌二八日パリに到着する。その後パリを生活の拠点としつつも、その間横光はロンドン・ブダペスト・チロルなどを見て回っている。ベルリンに向かったのは七月二四日であつた。横光は当初の予定通りオリンピックを視察し、観戦記を数回書くことになるのだが、開会を待たず帰国を決意する。そして八月一日、ベルリンを立ち、シベリア経由にて日本へ向かうことになる。東京の自宅に到着したのは八月三日であつた。

この約半年間の欧州体験を横光は、ジャンルやモチーフを変えつつも、長期にわたり作品化し続けていくことになる。例えば、欧州滞在時から執筆してきた海外紀行文や書簡をまとめ構成された「欧州紀行」『欧州紀行』創元社、一九三七年四

月)、作家横光を思わせる主人公梶が登場する〈梶もの〉<sup>(2)</sup>と呼ばれる短篇小説群、そのほか「王宮」(『大陸』創刊号、一九三八年六月)や「シルクハット」(『改造』二〇巻四号、一九三八年四月)などの小説、「スフィンクス」(『改造』二〇巻七号、一九三八年七月)や「北京と巴里」(『改造』二二巻二号、一九三九年二月)などの比較文化論が挙げられる。その中でもやはり欠かせないのは、帰国後の一九三七年から連載開始された長篇小説「旅愁」<sup>(3)</sup>であろう。「旅愁」は、横光が亡くなる直前の一九四六年まで描かれていた未完の大作であり、敗戦後、日本回帰もしくは日本賛美のテキストとして断罪されることになる。このように約半年間の欧州体験は、横光が亡くなるまでの間、絶えず想起され続け、横光の文学活動に影響を与えていくのである。

加えて興味深いのは、横光の欧州体験が当時の文壇や時代状況においても、重要な意味を有していた点にある。

まずは、横光に対する文壇の期待からみていこう。横光は当時「文学の神様」と呼ばれていたことからわかる通り、一九三〇年代の日本文学を牽引していく存在であった。十重田裕一は、渡欧前年の一九三五年に『紋章』(改造社、一九三四年九月)が第一回文芸懇話会賞を受賞、「純粹小説論」(『改造』一七巻四号、一九三五年四月)が文壇で話題を呼び、さらに渡欧直前の一九三六年一月から横光の初めての全集『横光利一全集』(全一〇巻、非凡閣社、一九三六年一一一月)が刊行開始された点に注目し、「横光の外遊が新聞や雑誌などのメディアで大々的に取上げられることになった」(「メディアに映し出される〈文学の神様〉の歐洲紀行 一九三六年、横光利一の外遊とその報道をめぐって」『横光利一 歐洲との出会い 歐洲紀行』から『旅愁』へ』井上謙・掛野剛史・井上明芳編、おうふう、二〇〇九年七月、一五七頁)と説明する。たしかに、文学者達の期待ぶりは、『文芸通信』(四巻三号、一九三六年三月)内で、「渡欧に際し横光利一氏へ」[論者注：目次での題名は「渡欧する横光利一へ」]という小特集が組まれる程であり、実際横光の出発と帰国の際には、多くの人が東京駅に

押しかけていた様子が各メディアにおいて報道<sup>(4)</sup>されていく。

その中でも注目すべきは、横光が同人として加わっていた『文学界』（三巻四号、一九三六年四月）での座談会「横光利一渡欧歓送会」であろう。同座談会は横光が出席し、なおかつ親交の深かった人達が集まったこともあり、各人が横光に対しざくばらんに期待をかけていく。各人の発言を抜き出してみる。

・僕はやっぱり会って話してもらいたいね、ジイドとかね……。 (林房雄)

・眼と耳の訓練をしてきたいよ。それから得てきた感覚でもつて、また帰ってきて文学が見られるのが楽しみなんだよ。

(小林秀雄)

・俺が横光さんに所望するのは向ふの社会情勢を見てきてそれを日本と比較してよく伝えてほしいといふことだな。(舟

橋聖一)

・横光氏はイタリアへ行くのですか、行ったら文芸復興のことを考へて欲しいな。(阿部知二)

同座談会の冒頭付近で、横光自身は「僕なんか行つて帰つてきて、話しをする。すると、横光利一だからああ思つたとか、あれや横光の見方だと、かう言はれるのが厭だよ。(中略)たとへばもしまぐれあたりに本当のものを見てきたつて、横光利一だからああ思つたんだ、とさういつて引摺られちやふんだ、それが厭だよ」と繰り返し吐露していたが、各人お構いなしといった形で横光を日本文学の代表者として送り出そうとしていく。いささか注文が過ぎる嫌いもあるが、逆にこうした過度な期待こそ、横光の渡欧の意義を物語っている。中川成美はこうした文壇の横光への反応を踏まえ、「横光利一という

一枚看板を背負うことを余儀なくされる心理状態に追いこまれていった」（『欧州紀行』論への試み 横光利一の巴里）『立教女学院短期大学紀要』一四号、一九八三年一月）と指摘し、古矢篤史は同時代のジャーナリズムの観点から、「横光は「特派」された立場として国際情勢に関する報道を「代表」する責務もまた負っていた」（『見聞記』が「寂しい旅行記」に至るまで 横光利一と一九三六年前後の国際情勢ジャーナリズムをめぐって）『横光利一研究』一四号、二〇一六年三月）と述べている。両者の指摘通り、横光は個人的な遊学ではなく、ジャーナリズムや日本文学を背負う使命が与えられていくのである。

もう一点、横光の欧州体験の意義を挙げるとすれば、日本の近代史という次元においてである。

かつて福沢諭吉が「西洋ノ文明ハ我国体ヲ固クシテ兼テ我皇統ニ光ヲ増ス可キ無二ノ一物ナレバ之ヲ取ルニ於テ何ゾ躊躇スルコトヲセンヤ断シテ西洋ノ文明ヲ取ル可キナリ」（『西洋ノ文明ヲ目的トスル事』『文明論之概略』一卷、一八七五年四月、五〇頁）と提言したように、日本の近代化は総じて西洋化の道でもあった。大日本帝国憲法はドイツのプロイセン憲法、民法はフランス民法典、海軍はイギリス海軍というように、明治維新以降日本政府は、様々な西洋のシステムを参照しつつ近代化を促進してきた。司馬遼太郎は『坂の上の雲』において、「のぼってゆく坂の上の青い点にもし一朵の白い雲がかがやいていとすれば、そののみをみつめて坂をのぼってゆくであろう」（『あとがき 一』『坂の上の雲』八巻、一九九九年二月、三一二頁）と明治の時代精神を表している。近代化のために坂を登っていく途上、それが明治時代であったのである。

では、日本が近代化の坂を登り終えたのは何時頃だったのだろうか。それについて、渡邊一民が興味深い仮説を立てている。渡邊は、島崎藤村『夜明け前』（第二部、新潮社、一九三五年二月）、和辻哲郎『風土』（岩波書店、一九三五年九

月)、西田幾多郎『哲学論文集』(一卷、岩波書店、一九三五年一月)が完成された一九三五年に着目し、「今世紀はじめの三〇年間に西洋と日本をめぐって繰りかえしさまざまなかたちで提起された問題に、いちおうの決着をつけた年、そこにいわば近代日本のひとつの到達点を見ることができる」(一九三五年前後『林達夫とその時代』岩波書店、一九八八年七月、八二頁)と定義し、次のように続ける。「日本がアジアの大国となることにより、日本人一人一人が維新以来の祖国の近代の歴史そのものを担うことを余儀なくされ、しかもそうしたものを背負ってヨーロッパという新しい現実と対決すること——こうした新しい西洋と日本という問題こそ『旅愁』の提起するものにほかならなかった」(『日本への回帰 横光利一『旅愁』をめぐって』『フランスの誘惑 近代日本精神史試論』岩波書店、一九九五年一〇月、一五五頁)。日本の近代史の中に横光の欧州体験や「旅愁」を位置付けようとする渡邊の仕事は、次の吉田健一・梶木剛の指摘とも通じている。

現実とは我々と外界の交渉によつて成立するものであり、その現実を知るには、眼は外にはなくて、絶えず我々自身に向けられていなければならない。それ故にそれは自意識の問題であり、近代の特徴をなしているものが自意識であるのと同じく現実の観念は近代に属している。横光利一はヨーロッパに現れた日本の最初の近代人だった。(中略)彼は外国に旅行した興奮を抑えるので緊張した意識にパリの現実を映し、それと日本の現実の差までを意識するという仕事をしたのであつて、このことが彼の外遊を一つの歴史的な事件にしている。(吉田健一「横光利一とヨーロッパ」『東西文学論』新潮社、一九六〇年五月、一二六頁)

「(一)『論者注…横光の欧州体験』には、おそらくかつて明治のエリート洋行者たちがそこで感じたであろうようなみじ

めさもなく、大正の坊ちゃん遊学者どもがそこでそうしたであろうような没入もなく、いいものは良く、駄目なものは駄目だと明瞭にいうきつちりした自意識があるばかりである。こういう自意識を〈近代〉の所産だというならば、横光利一はいま紛れもなく〈近代〉をもつてパリのなかにいる、といわなければならない。（梶木剛『旅愁』へ）『横光利一の軌跡』国文社、一九七九年八月、二二四頁）

渡邊・吉田・梶木の三者とも、明治・大正期の文学者の洋行とは異なる点、つまり近代化をある程度達成したという国内の時代状況や、そこで生じる自意識の観点から、「近代人」横光利一の欧州体験の意義を読み取っていく。

加えて、ヨーロッパに視点を移してみれば、一九三四年、アドルフ・ヒトラーが総統に就任。一九三五年、イタリアによる第二次エチオピア戦争。そして一九三六年にはレオン・ブルムを中心としたフランス人民戦線内閣の誕生とスペイン内乱が勃発していく。大久保喬樹は、当時の時代を「現代史の転換期」とみなし、「横光は、この転換の世界史的意味とは何なのか、日本はこの転換にどう対応すべきか、どういう方向にむかって進むべきなのかをひたすら考えつづけていた」（『現代史転換の証言者』『欧州紀行』講談社文芸文庫、二〇〇六年二月、二七七頁）と述べている。一九三五年前後、日本が近代化を達成したのに対し、ヨーロッパは混迷を極めた時代だった。そのような状況下で、横光はヨーロッパに足を踏み入れていくのである。だとすれば、横光の欧州体験や帰国後書かれることになる「旅愁」には、西洋のシステムや思想を輸入・参照してきた明治・大正期とは異なるヨーロッパの姿と、近代という坂を登り終えた後の日本が表出されているといえよう。

以上のように、横光の一九三六年の欧州体験は、横光自身の文学活動はもちろんのこと、日本文学史、そして日本の近代史においても、重要な意義を有しているのである。

## 二 横光利一の足跡を辿るために

本論文は、横光利一の欧州体験と帰国後の作品に描かれた日本表象に注目し、横光がどのようにして日本回帰と呼ばれる思想的境地に辿り着いたのかという問題を論究していく。重視するのは、「空間的視座」と「時間的視座」という二つの観点である。空間と時間という両軸から分析を試みることで、従来の研究成果よりもさらに解像度を上げ、横光の欧州体験やそこでの作品を検討することが可能になるだろう。この二つの観点についての具体的な説明を左記に行っている。

### I フランスだけに留まらない横光の欧州各国での体験への注目（空間的視座）

横光利一の欧州体験に関する先行研究は毎年のように発表され続けている。論文データベースで検索してみても、その数は二〇〇近くにも及ぶ（本論と関連する論文については、各章にてその都度言及していく）。しかし、こうした数多くの先行論を概観してみると、「旅愁」を頂点としたテキストのヒエラルキー構造があることに気付かされる。言い換えれば、横光の欧州体験は「旅愁」に結実していったとみなされ、欧州体験を素材とした「厨房日記」（『改造』一九卷一号、一九三七年一月）や「罌粟の中」（『改造』二六卷二号、一九四四年二月）などの〈梶もの〉、海外紀行文の「欧州紀行」がサブテキストとして位置付けられていくという傾向である。

横光利一研究の基本文献である『横光利一事典』（井上謙・神谷忠孝・羽鳥徹哉編、おうふう、二〇〇二年一〇月）の作品項目をみていけば、「罌粟の中」については研究も批評も少ない」（小田桐弘子「罌粟の中」九七頁）、「戦後唯一の本格的な小説であり、最後の作品でありながら、言及されることが少ない」（半田美永「微笑」一七六頁）、『欧州紀行』自体のままとまった研究は少ないのが現状であろう」（戸塚隆子「欧州紀行」二五七頁）といった文言が並ぶ。また「横光の見すえている人間精神の混沌、錯綜した心理の闇についても、より詳細な検討を加えつつ、「旅愁」の内包する主題と「梶もの」の両面から、いつそうの検証を進めるべきだろう」（森本穫「恢復期」七七頁）、「東北の農村とそこで生活する農民の姿が、作家横光の生き方に与えた影響を、「旅愁」や『夜の靴』とともに検討したい課題である」（鈴木吉維「終点の上で」一一三頁）などのように、欧州体験に関する作品は絶えず「旅愁」と並行して読まれていくことが推奨されていく。「旅愁」と銘打たれた論文は数多く存在する一方、前述した作品群への注目がそれほどなされてこなかったのは、長篇小説が上位で、短編小説や海外紀行文が下位という研究上のジャンル意識も影響を与えていることだろう。

これと関連する先行論の問題点として、横光の欧州体験がもつぱらパリに比重が置かれてきたことが挙げられる。もちろん横光がパリに長期間滞在していたことがその要因の一つだが、やはり「旅愁」前半部の舞台がパリだったこともそうした傾向に拍車をかけているだろう。たしかに「旅愁」は帰国後、約一〇年にわたって書き続けられてきた大作である。そのため横光の欧州体験を考えるには、パリを舞台とした「旅愁」の再検討が必要不可欠である。しかし横光が滞在していた一九三六年は、フランスの人民戦線運動の隆盛のほか、ドイツのベルリン・オリンピック、ソビエト連邦の影響力の大きさなど、政治的・文化的にも多種多様な国々が覇を競い合っていた。しかも、横光はシンガポール体験を「王宮」に、ブダペスト体験を「罌粟の中」などのように後年作品化していく。横光の欧州体験Ⅱパリ体験とみなしてしまうと、横光の一九三六



年の多様な国々や道中での体験を黙殺してしまうことになりかねない。

したがって本論文では、欧州体験を基にした多様な作品群を「旅愁」のサブテキストではなく、並列的かつ独立した作品としてみなしていく。パリや「旅愁」だけに収斂させず、様々な国での体験や作品を分析していくことで、横光のヨーロッパ認識がどのように変容し、また後年の日本回帰の思想に影響を与えていったのかをより大きな射程で考察することが可能となる。そしてこうしたアプローチは、「旅愁」での新たな一面を照射することにも繋がるだろう。

## Ⅱ 戦前・戦中・戦後という各時代の特異性と連続面への着目（時間的視座）

先述したように、「旅愁」は戦後、日本賛美・戦争肯定の書として断罪されることになる。「旅愁」論で必ずと言っていい程に引用される杉浦明平「横光利一論」「旅愁」をめぐる（『文学』一五卷二一号、一九四七年一月）を例に取ろう。杉浦は同文章にて「旅愁」を「痴呆の書」、登場人物の矢代を「早発性痴呆」とみなし、次のように激烈な批判を展開していく。

しかるにこういう狂人が瘋癲院に押込められず白昼の街路を横行するに委せたということは決して意味のないことではなく、何か誰かに役に立ったからだと推測しても誤りではない。誰の何の役に立ったか？（中略）矢代も横光も日本帝国主義に尽すことが出来たのだ、「旅愁」其他幾巻の書物の障子を立てることによって日本人民から科学的に思惟し良識を以て歴史を見透すことを妨げ、狂乱の戦争へ戦争へと狩り立てるのに役立ったのである。つまり自分の文学を一切悪魔に

売り渡して進軍ラッパを吹きならしたのである。(中略) 横光の全作品は精神病理学研究者に博士論文の好資料を提供する役にしか立たなくなつたのである。

横光に向けられたこうした批判は何も杉浦だけではない。前年の一九四六年、戦争責任者として横光を名指した小田切秀雄「文学における戦争責任の追求」(『新日本文学』一卷三号、一九四六年三月)や、戦時下での横光の文学活動を点検し、戦後においてその無意味さを説いた加藤周一「文学検察」(『文学時標』六号、一九四六年四月一日)などからもうかがえる。

しかし、杉浦らの「批判が戦後版の本文を読んだもののなか、それとも戦前の本文を読んだときの印象に基づくものなのかによって、その意味は大きく異なってくる」という十重田裕一の指摘(第二次世界大戦後版「旅愁」第一篇の検閲と表現『表現と文体』明治書院、二〇〇五年三月、二四七頁)は重要である。周知の通り、「旅愁」は戦後、GHQ/SCAP (General Headquarters/Supreme Commander for the Allied Powers)の検閲によって、本文の書き換えを余儀なくされた。加えて、初出から初版時、いわゆる戦前版テキストの構成の際にも多数の改稿がみられ、「旅愁」各篇の区切りについても、その執筆時期において揺れ動いている<sup>(5)</sup>。それゆえ、河出書房新社版『定本横光利一全集』の編集を手掛けた保昌正夫は、『旅愁』は、その成りたちからして無理を通した体裁のものであると結論されよう。定本「旅愁」は厳密にはありえないとも言えるであろう。この意味からも、この〈畢生の大作〉は宙ぶらりんな、未完成な運命を負っていることになる<sup>(6)</sup>。「旅愁」抄『横光利一』明治書院、一九六六年五月、一四四―一四五頁)と述べるのである。つまり「旅愁」は、戦前・戦中・戦後という社会や政治体制、人々の価値観が激動する時代の中で書き継がれてきた作品であり、なおかつその本文自体も絶

えず揺れ動いているのである。

だとすれば、そのような揺れ動く「旅愁」をイマ・ココの地点から分析し、断罪していくことには注意すべきであろう。必要なのは、戦後の地点から「旅愁」の問題性を糾弾するのではなく、戦前なら戦前、戦中なら戦中といった同時代状況を重ね合わせていく作業である。例えるならば、横光の足跡を定点観測的に捉えるのではなく、同時代コンテキストを再現し、論者自身もその足跡を一步一步辿っていくようなアプローチである。例えば、初出・戦前版・戦後版などのバージョン毎の改稿過程の検討が有効な手段になり得るだろう。本論文でも、こうした異同箇所の検討は適宜行っていく。しかしそれだけに留まらず、本論文では、戦前・戦中・戦後といった同時代コンテキストの再現や、先でみてきたパリ以外の国々での体験、「旅愁」と並行して書かれた作品群も参照していく。そうすることで、「旅愁」だけに収斂されない、横光の欧州体験の実態をより総合的に捉えることが可能となるのである。本論題に付された「総合的研究」には、このような意味が込められている。

横光利一の作品を「好資料」とみなし、遠く離れた地点から観察していくのではなく、論者自らも横光の足跡を一步一步辿り、その時々での感覚や思索に思いをはせ、そこで生み出された言葉に耳を傾けていく。そうした知的営為を行うことで、初めて横光文学の可能性と問題性をアクトチュアルなものとして考えることができるだろう。

### 三 本論の趣旨と構成

「空間的視座」と「時間的視座」という二つの観点から分析を行う本論文は、全六章で構成されている。

第一章「航路を詠む・起源を詠む——横光利一と洋上句会——」<sup>ルット</sup>では、横光がヨーロッパに着くまでの欧州航路での体験を取り上げる。航海中に開催された計五回の洋上句会での俳句と、高浜虚子の熱帯季題論を参照することで、横光の俳句観と海外認識がどのように変容していったのかについて詳述していく。

第二章「隆起する「欧州紀行」——横光利一のパリ体験——」では、滞在中に書かれた海外紀行文「欧州紀行」を取り上げ、横光のパリ体験について考察を行う。帰国後の地点から遡及的に物語化された「旅愁」とは異なり、人民戦線運動がピークを迎えつつあったパリにて書かれた「欧州紀行」は、まさにわからないものをわからないなりに書き記そうとした作品だといえる。「欧州紀行」での横光の視線やその特異性を浮かび上がらせていくことで、「旅愁」とは異なるパリが表出していることを突き止めていく。

第三章「書き変わる日本と東欧——横光利一のブダペスト体験——」では、フランスやドイツといった列強国とは異なる〈周縁〉国ハンガリーに着目した。ブダペストでの出来事を素材とした小説「罌粟の中」の分析と、ハンガリー国内におけるツラニズムの思潮を踏まえることで、横光のブダペスト体験がどのように変容していったのかについて考察する。加えて、「罌粟の中」での作品モチーフと、同時期に書かれた「旅愁」第五篇との関係性についても考えていきたい。

第四章「横光利一とベルリン・オリンピック——身体感覚・認識・トポス——」では、タイトルの通り横光のベルリン・

オリンピックでの体験を取り上げる。横光の渡欧の目的であったのに加え、ナチス・ドイツの思惑が強く反映されたオリンピックやベルリンの様子をリアルタイムで体感している点は注目に値する。本章では、「欧州紀行」でのベルリン滞在時の記述とオリンピックの観戦記を分析することで、横光がどのように選手を評価し、思惟を巡らせていったのかについて確認していく。また、オリンピックで得た横光の身体観がどのように、「旅愁」に受け継がれていったのかについても考えていきたい。

第五章「〈異言語〉への旅と愁い——横光利一「旅愁」論——」では、矢代の〈異言語〉体験に注目し、「旅愁」前半部と第三篇以降の連続性について考察を行う。「旅愁」を読み進めていけば、日本対西洋といった抽象的・思想的な問題が提出されているだけではなく、登場人物達を取り巻く多種多様な〈異言語〉が全篇を通して散りばめられていることに気付かされる。パリ生活での〈異言語〉体験や、帰国後の標準語と異なる言語との出会いが、どのように矢代の思想に影響を与えていったのかについて考察を進めていく。

第六章「それでも最期は微笑を浮かべて——横光利一「微笑」論——」では、横光が戦後戦争責任者とまで断罪された中で発表した小説「微笑」を取り上げる。「微笑」に登場する栖方や作品内の固有名に注目し、どのように横光が戦中戦後という時代を捉え直し、また戦後というイマを歩き出そうとしていたのかについて考察していく。

終章では、全六章で抽出した論点から、一貫したテーマや発展性を確認していく。そして、欧州体験を経た横光文学の可能性と問題性を提示していく。

注

(1) 横光の渡欧については、前年一九三五年の頃から話があがっていた。白野ペン十郎によると「家族会議」「論者注…

一九三五年八月九日から十二月三十一日まで『東京日日新聞』・『大阪毎日新聞』にて連載された長篇小説」を執筆する前から、横光の洋行は決定してゐたけれど、これの連載が完了すると間もなく、正式に日日新聞社に入社した。従つて、洋行は日日からの特派といふことになる。勿論洋行費の大半は、日日新聞社が負担し、縁故の深い文芸春秋社からも多少援助する」(『洋行する二作家 武者小路と横光』『文芸』四卷三号、一九三六年三月)と指摘している。たしかに、同年発表された座談会「横光利一文学談」(『行動』三卷九号、一九三五年九月)や、横光の「藤澤桓夫宛書簡」(一九三五年一月一九日消印)内にも、渡欧の話題が出ている。井上謙はそれに加え、『東京日日新聞』がこの二月で丁度創刊六十五周年を迎えるため、その記念事業の一つであつた(「欧州紀行」『横光利一 評伝と研究』おうふう、一九九四年一月、二九七―二九八頁)ことも遠因だったとみている。

(2) 神谷忠孝は「厨房日記」(『改造』一九卷一号、一九三七年一月)、「終點の上で」(『中央公論』五六年一号、一九四一年一月)、「恢復期」(『改造』二三卷七号、一九四一年四月)、「罌粟の中」(『改造』二六卷二号、一九四四年二月)、そして「微笑」(『人間』三卷一号、一九四八年一月)の主人公すべてが梶であることを踏まえつつ、「読みようによつては異常心理を扱っていることで共通点」(「科学と狂気 「微笑」二『横光利一論』双文社出版、一九七八年一〇月、一二九頁)があると概括する。黒田大河はそれを受け、「二項対立的な状況、そしてそれを無化して行く」特徴を挙げ、「二項対立をずらし続けるのが「梶もの」であり、『旅愁』を補完するものでもある」(「横光利一の回帰 欧州体験から『旅愁』へ」『横光利一とその時代 モダニズム・メディア・戦争』和泉書院、二〇一七年三月、一七六―一七八頁)

と付言する。

(3) 「旅愁」の詳しい書誌情報は本論文の「補足資料」・「欧州紀行」・「旅愁」書誌情報を参照されたい。

(4) 当時の状況は「『文学の神様』帰る」(『文芸通信』一九三六年一〇月)などの記事からうかがい知れる。当時の東京駅の様子について、中山義秀は「駅へきてみると、大変な見送り人である。ホームに出る際、地下道で武田麟太郎や林芙美子等の姿を見かけた。ホームにのぼってみると、横光の車窓の前は、二重にも三重にも列をつくって、人波がうずまいている」(『台上の月』新潮社、一九六三年四月、一五七頁)と回想している。

(5) 初出から初版(戦前版テキスト)における本文異同や各篇の構成意識については、古矢篤史「洋上のモダニストの肖像 横光利一「矢代の巻」『旅愁』の往路をめぐる考察」(『繡』一九号、二〇〇七年三月)が端的にまとめられており参考になる。古矢は、一九四〇年六月に改造社から単行本『旅愁』が刊行される際、その第一篇の構成が、「矢代の巻」として位置付けられていた『東京日日新聞』連載六五回分と、一年半以上のインターバルがあった『文芸春秋』(一九三九年五月―一九四〇年四月)全一二回の内の最初の三回分が組み合わせられている点に注目する。そして、こうした初出から初版にかけての構成意識の「再分節化がいか」に『旅愁』の執筆された時代性を見えなくさせてしまっているか」を指摘する。

第一章 航路を詠む・ルーツを詠む

——横光利一と洋上句会——

一 欧州航路を詠む

一八九六年三月、日本で欧州航路が開通する。洋行と呼ばれる時代の始まりである。日本の名立たる知識人達（政治家・官吏・学者・実業家）は、日本郵船の船に乗り込みヨーロッパへ向かう。彼らは西洋の思想や技術を取得し、帰国後その経験をもとに日本の近代化を推進していくことになる。

しかし、航路という体験そのものに着目してみると、そこには単なる目的地への途上とだけでは片付けられない多様な問題を含み込んでいることに気づかされる。和田博文は、当時イギリスを中心とする列強の植民地化の趨勢や、異文化接触による他者との出会い（これは同時に日本人という意識の問い直しにも繋がる）といった点を踏まえつつ、次のように述べている。



欧州航路紀行史の他者と自己をめぐる声は一樣ではない、しかし様々な声が反響するなかで、主調音のように束ねられてくる声がある。それはアジアを植民地化してきたヨーロッパの列強に対する憤りであり、植民地を統轄するイギリスへの感嘆であり、極東の帝国を目指す願望である。それらの主調音が交錯する先に、やがて「大東亜戦争」に突き進んでいく、「大東亜共栄圏」のイメージと構想が姿を現すのである。（『欧州航路の海図 地中海東部とシンガポール海峡』『海の上の世界地図 欧州航路紀行史』岩波書店、二〇一六年一月、二六頁）

和田が指摘するように、欧州航路での体験は、日本人の西洋列強に対する憧憬と反発、植民地化されていたアジア諸国をどのように日本人がみてきたのか、そして、これらの視点がやがて戦争へ突き進んでいく日本の時代状況とどのように結びついていくのかといった問題が内在しているのである。

近年こうした問題意識があつてか、欧州航路での体験を取り上げた研究書が数多く出版されている。例えば、先で挙げた和田博文『海の上の世界地図 欧州航路紀行史』は、膨大な資料を用いつつ、航路開通前史から戦後までの約一〇〇年にわたる欧州航路史を編んでいる。橋本順光・鈴木禎宏編『欧州航路の文化誌 寄港地を読み解く』（青弓社、二〇一七年一月）は、和辻哲郎の『風土』（岩波書店、一九三五年九月）を分析の中心に添えつつも、寄港地という視点から渡航者の体験やそこでの特色を描き出している点で興味深い。木畑洋一『エンパイア航路を往く イギリス植民地と近代日本』（岩波書店、二〇一八年一二月）では副題に示されている通り、ヨーロッパの植民地体制下のアジア地域を日本人はどのように経験し、思索を深めていったのかについて詳述されている。取り上げた三冊とも、それぞれに独自の観点を打ち出しつつも、日本の近代化や寄港地先での体験への注目が共通しており、今後欧州航路の問題を考える上での必読文献となっていくことだろう。

ただ、これらの著書を足掛かりに日本人渡航者の紀行文をいくつか読んでいくと、気になる点が一つ浮かび上がってくる。それは、渡航者の多くが船上ないし寄港先に頻繁に俳句（もしくは短歌）を詠んでいる点である。もちろん、俳句が小説などとは異なり、文学にあまり縁のない人々でも気軽に詠むことができるということもその要因にあるだろう。しかし、それだけでは、なぜこれほど多くの渡航者が俳句を詠もうとするのかという欲望そのものにまで接近することができない。ここで参考となるのは、後に本章でも登場することになる高浜虚子の文章である。虚子は、一九三六年の欧州航路での体験の際に打電・発表した「花鳥諷詠を説く」（『渡仏日記』改造社、一九三六年八月）の中で次のように述べている。

船は領土の延長であつて、マルセーユに着きロンドンに着くのは其処まで日本の領土が延長することになるのであつて、日本の本土と音信するのにも日本の料金で自由に無線電信をもつて通信することが出来るのである。花鳥諷詠の詩をかれ等に説くことは、花鳥諷詠国の領土の延長といふことが出来る。（四六五頁）

船での渡航や、俳句の国際的な広がりが「領土の延長」に繋がるという虚子の指摘は興味深い。橋本順光はこの文章や、虚子の「熱帯季題」論（これも本章にて後述していく）を取り上げ、「虚子の旅は極言すれば欧州航路の領土化と要約することさえ可能だろう。（中略）虚子以前にも、俳句や歌、漢詩は洋行の途上でよく詠まれてたが、無聊を慰める手遊びの域を出ることがなかった。虚子は、それをはっきり「花鳥諷詠国の領土」の拡大と明言し、熱帯を含めて世界の名所を自国語化したのである」（『欧州航路の文学 船の自国化と紀行の自国語化』『欧州航路の文化誌 寄港地を読み解く』青弓社、二〇一七年一月、三四―三五頁）と評価付けている。もちろん、虚子の俳句による「領土の延長」化の志向が、植民地化の欲望とも

捉え直すことは十分可能であろう。しかし、外国の風物を俳句によって詠む、言い換えれば「自国語化」していくという行為は、先の渡航者の俳句を詠む欲望と通底しているのではないだろうか。つまり、欧州航路で俳句を詠むということは、日本的な表象行為に軸足を置きつつ、日本の外にある未知なる風物を分節化し、把握していくことに他ならないのである<sup>(1)</sup>。そしてこれは同時に、俳句が国境を越えていくことで生じる問題も浮かび上がらせてくるだろう。

以上のような観点も踏まえつつ、本章では横光利一の欧州航路で詠まれた俳句に注目する。横光は一九三六年に日本郵船箱根丸に乗船し、ヨーロッパへ向かう。この箱根丸に先ほど言及した高浜虚子が同船していたのは既に知られているところだが、そこで洋上句会が計五回催されている。句会での横光の詠んだ句を検討することで、どのように横光が外国の風物を日本語化していったのか、その変遷と問題点を抽出することができるだろう。本章のもうひとつの目的として、帰国後の横光の日本回帰の問題が挙げられる。先行論で指摘された欧州航路における西洋への憧憬や反発といった視点を考慮に入れれば、横光の帰国後の創作活動にも欧州航路での体験が何かしら影響を及ぼしていることは想像に難くないからである。欧州航路―俳句―日本回帰といった関係性を視野にいれつつ、横光の洋上句会での俳句を吟味していこう<sup>(2)</sup>。

## 二 揺れる船内・身体・心情

横光利一は一九三六年二月二〇日、神戸港から日本郵船箱根丸に乗船しヨーロッパへ向かう。横光を乗せた箱根丸は上海・香港・ペナン・コロンボ・アデン・カイロなどの寄港地を経由しながら、三月二七日マルセイユに到着。横光はそこで

下船し、翌日パリへ向かっていくという約四〇日間の船旅であった。

横光の欧州航路での体験を考える上で、箱根丸の機関長である上ノ畑純一なんそうの存在は欠かすことができない。上ノ畑は機関長であると同時に虚子の弟子であり、「楠窓」という俳号があった。横光・虚子・上ノ畑の三人は、それぞれ今回の航海の日程や出来事を紀行文に書き残している。横光は「欧州紀行」『欧州紀行』創元社、一九三七年四月）、虚子は『渡仏日記』（改造社、一九三六年八月）、そして上ノ畑は彼の追悼の際に編纂・刊行された『楠窓を偲ぶ』（日比和一編、故上ノ畑純一氏遺稿追憶記編纂所、一九四〇年三月）の中の諸編である。三者の紀行文をそれぞれ対置していくことで、横光の欧州航路での体験の内実をより具体的に浮かび上がらせることができるだろう<sup>(3)</sup>。

横光の四〇日間の船上生活において、虚子と上ノ畑との出会いは、大きな意味をもたらすものだった。その際たる例が航海中、上ノ畑の発案により船上にて句会が催されたことである。『楠窓を偲ぶ』収録の上ノ畑の文章「二日一信 虚子先生に随伴して」<sup>(4)</sup>という航海日誌によると、出発から一〇日過ぎくらいから、船客の中に虚子から俳句を学びたいという人が出てきたので、洋上句会を催すことになった経緯が記されている（二〇〇頁）。この句会の参加者の中には、東洋史学研究者の宮崎市定や、齒車研究で著名な成瀬政男、陸軍所属の長谷部照伍などがいた。例えば宮崎市定は、当時船内では一等から三等に分かれており上甲板はすべて一等船室にあてられていたが、上ノ畑から洋上句会に誘われたため一等ラウンジなどに入りできたと回想している<sup>(5)</sup>。洋上句会が、日本人同士の階級差を超え、交流し始めるきっかけとなったのである。横光も三月一日「私は船客や船員達と殆ど友達になつてしまった」、三月二日「欧州航路の船客といふものは、どこかの学校へ入学したやうなものだ」と述べ、洋上句会以後船客との交流が徐々に増え始めていく。

句会は航海中計五回開催され、場所も香港・ペナン・コロンボ・アデンといった各寄港地間での洋上であった。また、句

会のテーマである兼題も、その寄港先や地域の海上にまつわるものであった。横光自身はどのような姿勢で句会に臨んでいたのだろうか。上ノ畑は『楠窓を偲ぶ』所収の「横光利一の『俳句』」渡欧船中のをりくにて、「最も熱心で、そして最も真面目な句作者であつて、少し身体の具合が悪いと云ふ時でも、決して句会を休まれた事はなかつた」(七五頁)と記している。加えて、上ノ畑が記した次の横光の発言も興味深い。「小説を作る者には俳句の表現法を知つて置くと大変役に立つ。殊に今の小説家を志望する若い者の心理は混乱して居る。それを統一づける為にも役に立つ。／小説の骨子は多く人事の葛藤であるが、之を助ける描写には俳句で唱へる写生が必要と思ふ」(七三頁)。これは一見すると小説家志望の若者へ向けた創作指南の考えなのだが、横光自身の句会での姿勢とも通じているだろう。横光は句会当日の二月二十九日、妻への手紙の中に「船中の心理の移動、及び自然を地図と引きくらべて見てゐて貰ひたい」(「シンガポールより横光千代子宛書簡」と書き記していた<sup>(6)</sup>)。船旅という外の風景と比例し変化していく自身の心理、それを俳句という自己と風物との関係の中で捉えていく表象行為によつて、把握もしくは統一化していこうとする横光の狙いが読み取れる。計五回の洋上句会で詠まれた横光の俳句に注目することで、横光がどのように外国の風物を知覚・表象し、その心理が変化していったのかについて明らかにすることができよう。

その際参考となるのは、先で紹介した上ノ畑の「一日一信」である。この航海日誌には、全五回の句会についての詳細な情報、例えば句会参加者や会場、そして参加者一人につき一句が紹介されている。欧州航路という同じ空間で比較的共通の景色を見てきた句会参加者が、どのような場面を切り取り、そこに自己の感傷を乗せていったのか。他の参加者が詠んだ俳句も適宜参照することで、横光の俳句の特徴が浮かび上がってくるだろう。加えて、「一日一信」の中で兼題が記されている点も重要である。句会当日に出される席題とは異なり、兼題は事前に句会の題が決められているため、参加者はその題を頭

に入れつつ、寄港先や船内の情景を切り取っていきこうと心掛けていく。つまり、俳句を詠むように外国の風物を知覚していくのである。横光も例外ではなかった。帰国後、水原秋櫻子との対談の中で、「俳句の題が出てから一日位そのことを考へて居られることがありますか」と質問されたのに対し、横光は「考へますね。しかし、題が出て考へるやうぢやまだだしがない」（『対談記』『俳句研究』三卷一二号、一九三六年二月）と答えている。横光は兼題によって、外国の風物をいかにして俳句のように知覚し、詠みとっていけばよいのかという意識に苛まれていったのである。位田将司の、『欧州紀行』のパラグラフは短く切られており「写生―俳句」がはらむ「短」さの集積として成り立っている。しかも、その各パラグラフの末尾は「俳句」で結ばれる（『欧州紀行』という「純文学」「純粹小説論」と自意識をめぐる「穴」「感覚」と「存在」）。横光利一をめぐる「根拠」への問い（明治書院、二〇一四年四月、二三九頁）という指摘も、上記のような意識に起因しているだろう。周知の通り、横光は「話すように書く」ではなく、「書くように書く」ことを実践してきた作家である。しかし、こと欧州航路での体験を書記化する際に至っては、「書くように書く」ではなく、むしろ「詠むように書く」といった方が正確だといえる。

このような背景を踏まえつつ、第一回洋上句会での俳句から吟味していきたい。第一回目は二月二十九日、香港―シンガポール間の船上で開催された。兼題は、「桃」と「香港瞩目」であった。瞩目とは、目に触れたものの詠むということである。そこで横光は、「天井に潮ざゐ映る昼寝かな」という句を提出している。他の参加者の句を確認していくと「香港の春暁の船皆動く」（高浜虚子）、「はなむけの桃吹きほこるサルンかな」（奥田彩坡<sup>(7)</sup>）、「両替て春の波止場に立ちにけり」（成瀬政男）など、旅立つ際の別れや航海していくことへの期待、船のダイナミックな動きなどが詠まれている。他の参加者の中で比較的横光と同じようなシーンを詠んだ句としては、上ノ畑の「窓の外は厦門沖とや桃の花」が挙げられる。上ノ畑は部屋の中

から、兼題である「桃」や「香港」を上手く取り入れつつ句を詠んでいるが、横光はそうした窓の外の風景ではなく、部屋の天井を見て、そこに反射した潮騒の光景を描出している点が特徴的である。

「欧州紀行」をみていくと、当時横光が多く筆を割いていたのは、船上生活を経ることによって生じた身体への意識と、変化のない海の様子についてである。句会の前日、二月二十八日には、船が揺れ動くことで頭が朦朧となつていき、「外は眼に触れるもの海ばかりだ。二尺の高さの窓の中央にある水平線が、窓いつぱいに上つたり下つたりしてゐるだけ」とある。句会で提出した句は、このような航海直後の経験を詠んだものだろうが、さらに興味深いのは上ノ畑が記した横光と虚子との会話である。そこでは、横光が虚子に「海外の風物を句にするに字余りになつて困ります。ベッドの上に横たはつて、白いペンキで塗つた天井に青い湖がキラ／＼映るのを句にしようとしても、どうしても字が余つて困りました」（「横光利一の『俳句』」

渡欧船中をりく」前掲、七四―七五頁）と漏らしている。海外の風物や船内での自身の心境を一七文字という俳句の定型に沿って表現することの困難さを横光は吐露している<sup>(8)</sup>。船が揺れ動くため頭が朦朧している状態に陥り、そのため外の風景を見ず室内にて昼寝を試みようとするが、天井にも海が映し出されていく。本来足許にあるはずの海が天井にも映し出される光景に、揺れる船内と睡眠による半覚醒的な身体感覚が相まって、海が四方八方を取り囲んでいるといった横光の内面的な心情が象徴的に詠み込まれているのである。

続いて、第二回目の洋上句会である。第二回目は、三月三日、香港―シンガポール間で開催され、兼題は「雛」と「更衣」であった。そこで横光は、「カムランの島浅黄なる更衣<sup>(9)</sup>」を提出している。他の参加者の中で「更衣」を取り入れた句をみると、「更衣カムラン沖でありにけり」（寺井俊坊）、「トランクをかき乱しつつ更衣」（成瀬政男）、「食堂のボーイ美し更衣」（奥田彩坡）、「まのあたり高趾支那とよ更衣」（長谷部照伍）などが並ぶ。横光と似たような情景を詠んだ句とし

ては、『渡仏日記』内で紹介された虚子自身の句「衣更て甲板に出ぬ島見ゆる」(四二頁)がそれに該当するだろうか。しかし、虚子を含めた他の参加者の句と比較してみても、横光は自分自身や船内の人々が衣更した情景ではなく、ベトナムのカムラン湾にある島(おそらくビンバー島だと思われる)が、夕日もしくは朝日によって色が徐々に変化していく様を詠んでいる。

句会の開催日時が三月三日の雛祭である点も注目に値する。虚子の『渡仏日記』内には、当日季節感を出すため、朝食の際に雛祭りの絵葉書が配られ、昼過ぎには桜餅が出されていたことが記されている(四二頁)。加えて上ノ畑の「一日一信」によれば、「部屋の湿度八十八度、朝から海水着を着てプールに通ふ男女船客の姿を見るなど、聊か雛気分にはそぐはない」と考え、句会の会場内に雛人形が用意されていたという(二〇四—二〇五頁)。赤道が近づくにつれ、温度や湿度が高くなり、徐々に夏服に着替え始める船内<sup>(9)</sup>の中で、雛祭りという日本的時間を演出しようとしているのである。兼題が「雛」(春)と「更衣」(初夏)という異なった季語なのも象徴的であろう。先の参加者の何人かの句には、そのような船内での身体的な体感と日本的時間との落差を詠んだものもみられる。

横光の句に戻れば、横光は「欧州紀行」の中に先の句以外にも「古里の便りは無事と衣更」と「衣更はるかに椰子の傾ける」が虚子の入選に入ったことを記している。「古里の…」においては、日本に残して来た家族との距離の遠さはもちろんのこと、便りに記されていたであろう国内の状況とは異なり、イマ・ココの自分は「衣更」をしているのだという季節観の違いも看取できよう。また、「衣更…」と先ほどの「カムランの…」の両句に共通しているモチーフとしては、「カムランの島」や「椰子」といった現地の風物を遠く船上から眺めている点にある<sup>(10)</sup>。日本から遠く離れてしまったが、まだ外国の寄港先に対しても積極的に感情を向けようとしない、いわば船内で漂っている横光の心境が読み取れる。第一回目の句では、



船から外の風物を見ようとしなかった。第二回では一見外界の風景を捉えようとしているが、それでもまだ横光の対象との物理的・心理的な距離の遠さが継続しているのである。

### 三 ずれ始める季節・季語・月

次に第三回と第四回の句会での俳句を連続してみていきたい。第三回は、三月九日ペナンーコロombo間にて開催され、兼題は寄港地である「シンガポール」もしくは「ペナン」、そして「洋上」に関する囑目であった。そこで横光は「京に似し彼南は月の真下にて」を提出している。第四回は、三月一三日コロomboアデン間なのだが、上ノ畑の文章には兼題の記載はない。ただ、礪波美和子が既に指摘（「高濱虚子・横光利一らの洋上句会 宮崎市定のサイン帳と『楠窓を偲ぶ』を中心に」前掲）しているように、句会の際「印度洋」という言葉は「熱帯季題」であると虚子から説明を受けたと上ノ畑が記述していることから、兼題は「熱帯季題」だと推測できる。そこで横光は「十五夜の月はシネマの上にあり」を提出している。

ここで押さえておかななくてはいけないのは、先の「熱帯季題」という問題である。第二回目の句会の状況からわかるように、外国の風物を俳句という日本的な表象方法で詠んでいくと、四季が異なる外国でどのように季語を用いればよいのかという問題が浮上してくる。そこで、虚子は熱帯地域でも通用する「熱帯季題」を新たに創出しこれを提唱していく。虚子は三月一〇日、上ノ畑に口述筆記をさせ発表した「熱帯季題小論」において、次のように提言している。「季題はどこまでも動かすべからざるものとして置いて、新たに夏の部に、熱帯といふ一部を設けてその熱帯の天文、地文、地名、動物、植物、

著名な行事等は、そのものが暑い熱帯の季感を現はすものとして季題となり得るといふことにしたらよからうと思ふ」(『渡仏日記』前掲、四〇四頁)。そして虚子は、海外にいる俳人たちが熱帯季題を用い、その土地特有の風物を写生し「花鳥諷詠」を實踐していくことへ期待を抱いていく<sup>12</sup>。虚子のこのような考えは帰国後も継続していたようで、虚子が手掛けていた『新歳時記』(三省堂出版)の一九四〇年四月の改訂版の際、夏の部に「熱帯季題」の項目が追加されていくことになる<sup>13</sup>。

横光も出航当初から俳句における季節や季語について関心を持っていたようで、虚子に次のように疑問をぶつけていた。「歳時記には、例へば春暁なんと云ふ、実に簡潔な文字で多くの内容をコンデンスした言葉が沢山出て来るので関心して居ます。然し初心者か歳時記を読むと、直ぐ無難作にそれを使ひ過ぎて、却つて害がありはしないでせうか」(上ノ畑楠窓「横光利一の『俳句』」渡欧船中のをりく「前掲、七四頁」。従来の季語に頼り切らない横光の姿勢が確認できる。そのような中で、横光は虚子の「熱帯季題」論の説明を受けることになるのである。しかし、それに対する横光の反応は、虚子のように積極的なものではなかった。例えば、「欧州紀行」三月二二日において「私は俳句には、季感季語がなければ、俳句ではないと思ふ。しかし、熱帯へ来て実感を歪めてまで強ひて季語季感を盛る必要は今のところあるまい。(中略)理論を実相に従へるべき期間を知ることが何事も肝要だ」と記す。これらの横光の季感・季語に対する考え方を総合してみると次のようになる。つまり、季語には先人達が積み重ねて来たイメージや意味内容が幾重にも含み込まれており、俳句の初心者がそれを無批判に、また公式的に使用してしまうことへの反発である。「熱帯季題」の問題もこれと同様であり、いわば日本人、しかもわずかな期間に立ち寄っただけの旅行者が演繹的に季語を創出しそれを公式化していくのではなく、まずは自分自身の身体や情動を抛り所にして、未知の外国の風物やその実相を捉えていかななくてはならないといった横光の句作の姿勢が読み取

れる<sup>14</sup>。

このような熱帯季題の話題を踏まえ、先の第三回と第四回の句を吟味していきたい。まずは、第三回での句「京に似し彼南は月の真下にて」である。周知の通り、ペナン島はイギリスの貿易商フランシス・ライトの提案により、一八世紀にイギリスの海峡植民地となり、その後、交易の拠点として発展を遂げていく。横光たちが訪れた当時においては、イギリス人だけではなく、中国人・インド人ら多様な民族が集まりコミュニティーを形成していった、いわばコスモポリタンな海洋都市であった。当日のペナンでの横光の行程は「欧州紀行」に詳しく記されていないが、虚子の『渡仏日記』によると三月六日、虚子と上ノ畑は現地の日本人が経営する朝日ホテルの人達にガイドを頼み、ペナンのジョージタウンから車に乗り、蛇寺や極楽寺といったペナンの観光名所を回っている。そして、その途中での稲田の田園風景を虚子は「日本の田舎と酷似して居った」（六二頁）と書き残し、句会にて「稲田あり笈あり日本に似たるかな」という句を提出するに至る。多国籍な交易都市だと思っていたのにも関わらず、日本的な風景が眼前に広がっていたことへの驚きがあったのだろう<sup>15</sup>。だとすれば、横光も同様の光景を目にしていたと思われる。

他の句会参加者の句をみると、「椰子の森昼くれば稲田開けたり」（成瀬政男）、「家鴨追ひて稲田のそばにマラヤかな」（落合麟一郎）、「北緯二度日月星辰新なり」（長谷部照倍）、「甲板で寝る印度人月の下」（高浜章子）といった句が並ぶ。このような第三回句会での句をみていけば、次の二つに大別できる。一つ目は、虚子などに代表されるペナンでの田園風景を詠んだ句。二つ目は、緯度が日本と異なるため、月や星の見え方が異なることへの驚きを詠んだ句である。横光の先の句「京に似し彼南は月の真下にて」は、こうした二つの要素を一つの句の中に取り入れたものだといえる。しかし、この句で重要なのは、ペナンが京都と似ていたということよりも、その時の月が真上に位置しているといった気づきにある。つま

り、外国の風物が京都に似ていたという発見、しかし月の位置や満ち欠けなどから、やはりそこは日本ではないのだという二段階の認識の変化が詠み込まれているのである<sup>16</sup>。

第四回での句「十五夜の月はシネマの上にある」という構図を取っている点で同様である。「欧州紀行」をみると、三月一三日に船上のデッキにて映画が上映されていたことが書かれているので、この句もその時の様子を詠んだものと思われる。他の参加者の句をみると、「支那客の涼み将棋や印度洋」（宮崎市定）、「セイロンは芭蕉の垣に虹立てり」（柴虚風<sup>17</sup>）、「満点の雲みな動く印度洋」（久山舷楼）、「僧は皆黄の衣着てはだしかな」（上ノ畑楠窓）、「アカシヤの落花を踏んでインデヤン」（高浜虚子）などが並ぶ。「印度洋」という語句は熱帯季題に入ると虚子が述べたためか、参加者はインドでの様々な情景や人々の姿を各々の視点から切り取っている。しかし、横光は印度洋にある月を、日本的な月の認識や時間意識を含意した「十五夜」に言い換えることで、そのような月が真上にあるという意外性を強調している。第三回句会において、月を詠んだ参加者は大勢いたが、「一日一信」の第四回句会で記された句の中で月そのものを詠んだのは横光ただ一人である<sup>18</sup>。三月一二日、「熱帯へ来て実想を歪めてまで強ひて季語季感を盛る必要は今のところあるまい」と述べた横光の問題意識がこの句からも読み取れる。横光は虚子の熱帯季題の提唱という公式化に抗いつつ、自分自身のこれまでの知覚・感性を基軸にしつつ、句作に取り組んでいく。しかし、外国で見た月を日本的な語句に重ねつつ詠もうと試みるが、月が日本と異なる高度・光景であるため落差を感じさせられる。安易に外国の風物を俳句によって捉えることが出来ないといった困難さが横光の第三回・第四回の句にて提示されているのである。

#### 四 ルート ルーツ 航路から起源への旅

最後に第五回目の句会である。第五回は三月二〇日、場所はアデーンスエズ運河間で開催され、兼題は「アデン囑目」と「洋上」に関するものであった。フランス人作家ポール・ニザンが「アデン、アラビヤ」において、航路が交差するアデンを「数多くの縄をしつかりと束ねる結び目」（『世界文学全集Ⅰ―10』小野正嗣訳、池澤夏樹編、河出書房新社、二〇〇八年十一月（原著…一九三一年）、六九頁）と称したように、当時からアデンは、インド洋の交易圈における中継貿易の拠点として栄えてきた。横光はそのような場所において、「石に残るアラビヤ文字の懐しき」と詠んでいる。他の参加者の句をみると、「空高く砂漠の中の茂みかな」（市川恒雄）、「峨々として一草もなきアデンかな」（成瀬政男）、「緑蔭に痩せし駱駝の姿かな」（寺井俊坊）、「風車アデンの浜に潮汲むと」（落合麟一郎）、「銭乞ふもしうねからざるアラブあはれ」（高濱虚子）等があり、砂漠や駱駝といったその土地特有の風土や情景が詠まれている。「欧州紀行」三月一七日に、横光はアデンにある小さな博物館にて、紀元前の発掘物や化石を鑑賞し、「この地はアフリカとの交通の要路であり、印度へ廻るアラビヤの先端であるから、昔から争奪が激しかつたにちがひない」と書いている。「欧州紀行」単行本化の際に、先の句がこの文章の後に挿入されていることから、この時の感想を詠んだものと思われる。横光のようにアデンの歴史に思いを馳せている参加者の句としては、東洋史学研究者である宮崎市定「英人が砂漠に築きしアデンかな」が挙げられる。しかし、カイロの博物館を見学した三月二一日の横光の記述をみると、「豊富な遺物がどれもこれも五六千年前の物ばかりだ。こんな風になれば、われわれの知覚は通じなく、却つて興ざめてしまふものだ」という境地に至っている。先ほどのアデンにおける俳句では、そ

うした古代の遺跡などに書かれた文字、しかも日本語ではないアラビア語が懐かしいと横光は詠んでいたのではなかったのか。もちろんアデンとカイロとの差や、俳句と散文といった違いは考慮に入れるべきだろう。しかし、それらを差し引いてもこのような矛盾は気になるところである。近代に生きるわれわれの知覚では古代の事物は捉えきれないということ、しかしそこに書かれた文字が懐かしいという感覚、両者のこの一見相反する問題を考えていくためには、これまでみてきた横光の熱帯季題や言語に関わる考え方が参考になってくる。

航海当初、横光は虚子に対し、「季語には多くの内容がコンデンスされている」(上ノ畑楠窓「横光利一の『俳句』」 渡欧船中のをりく「前掲、七四頁」と尋ねていた。加えて、第三回・第四回の横光の句会での境地を踏まれば次のように解読できるかもしれない。つまり、横光は既存の文字や言葉の内実に分け入り、また想像力を駆使することによって、近代に生きる我々でもその文字に内包されている内容(ここではアデンの歴史やその土地での人々の感覚)を、たとえそれが外国や外国語であろうとも知覚し得ることができないかと夢想していったと考えられないだろうか。俳句が外国の風物を捉えることの難しさもここに起因している。俳句やそこでの季語には、日本もしくは日本語の伝統や意味内容が幾重にも組み込まれており、そのためそれを使用して未知なる外国の風物を詠んでいくと、齟齬をきたしていくのである。洋上句会の計五回の句作を通して、横光は言語にビルトインされた歴史性を発見したのである。航路を詠むから起源を詠むへ、これが横光の洋上句会の体験の内実だったのである。

本章の最後にパリ到着後、そして「旅愁」執筆に至る横光の文学活動において、俳句や起源への関心がどのように発展していったのかについて素描していきたい。

欧州航路で培った横光の俳句観は、パリ到着後も継続していくことになる。例えば、パリ到着後の五月二二日、横光はヨ

ヨーロッパで俳句を詠むことについて思惟を巡らせた後、欧州航路での虚子の俳句を想起する。「印度洋で、高浜虚子氏は、／印度洋月は東に日は西に<sup>20</sup>／といふ句をつくられたが、この句ほど下手な句はないにも拘らず、この幼稚な平凡さに落ち込んだ所に、名手でなければ落ち込み難い、外国といふ超ゆべからざる穴がある」。外国の風物を俳句によって表象することの困難さを抱き続けていることが確認できる。実際、横光はヨーロッパ滞在中においても俳句を詠んではいるが、「欧州紀行」にそれらの句を収録することはなかった。位田将司はその理由について、「横光が心理的、気分的に俳句を詠まなくなったわけではなく、意識的／無意識的にも俳句を詠めなくさせるテキスト形式が、そこで作用していた」（『欧州紀行』という「純文学」 「純粹小説論」と自意識をめぐる「穴」前掲、一三二 七頁）と指摘している。まさに「詠むように書く」ことを実践してきた横光によつて、ヨーロッパの風物を俳句によつて表象していくことは無理からぬことであつた<sup>19</sup>。

帰国後、横光のこのような俳句観は、より射程の広い言語観へと発展していくことになる。水原秋櫻子との対談（「対談 記」『俳句研究』前掲）を例にとろう。横光は、虚子が提唱した熱帯季題について「私は兎に角船の中で、こちらの言葉とか地名とか、それを出せば季になつてゐると高濱さんが仰しやるけれど、それも納得出来ぬところがある」と発言し、また「ベルリンで月を見てびつくりしましたね。ドイツ語では月は男性になつてゐるのは尤もだと思つたんです」〔論者注…ドイツ語での「月」は「*Monat*」<sup>21</sup>。カツと非常に強い感じがするんです。男といふ感じですよ〕と言う。加えて、概念化されてしまった季節や季語のイメージに対し「それは日本の国で今まで何億何十億の人間の頭を通つて来たか分らないものが歳時記になつて」おり、「歳時記を編纂する時に截然と分けて了ふといふことには随分困難がありますね」と述べるに至る。季語を含めた言葉の意味内容にはそれぞれの国による歴史や感性が蓄積されており、自国語で外国の風物を捉えることでギャップが生じてしまうと指摘しているのである。横光の言語に内在された歴史性への注目、その後も継続・発展していく。例

えば、次の二つの文章をみてみよう。

今から十七年ほど前、初めて京城まで行つたことがある。そのとき、なるほど、大陸といふものはかういふものかと、空の青さの内地とどこことなく違ふ透明な、応援力の少しもない、はかなく美しい、底気味悪い空を仰いで思つた。それまでは空といふ言葉を見ても、私の頭の中には、日本の空の色より感ずることが出来なかつた。山といつても、樹の茂つた日本の山より眼に浮んで来なかつた。／これが、山とか空とかといふ具体的な物であるから、違ふのは尤もだが、一度び抽象名詞となつて民族とか、法律とか、習慣とか、宗教あるいは知性、感性、直観、などといふ言葉になれば、大陸でも島国でも、等価値をもつたイメージとなつて、人々の頭の中を通過するかとなると、極度に厳密に調査すれば、数字以外はやはりこれも疑はしい。具体物が違へば、抽象名詞の内容も自然とどこかで違はざるを得ないからだ。けれども、これだけは同じものだと思ふ錯覚は、人の頭脳に深く侵入して、現代に及んでゐるのではあるまいかと、よく私は考へる。

（「島国的と大陸的」『東京日日新聞』夕刊、一九三八年五月二〇日）

どのやうな言葉も、言葉であれば、その国の感覚から起つて来てゐることは、論を俟たない。外国語といへども、その国に入つて来た以上は、その国民の感覚が、これを自分のものとして使ふ。そして、そのとき、その言葉の持つ本来の意味と同様に、私らが感覚するといふことは、最も現実に考へるなら、不可能なことである。これは恐らく誰にも分明的なことだつたに拘らず、これを同一のものと思ふ錯覚が、どんなに過去の人々を苦しめ、批判を誤らしめ、頭を無為に陥れたかは、知る人は知つてゐるに相違ない。（小説中の批評『東京日日新聞』朝刊、一九四一年四月九日）



言葉は「その国の感覚から起つて来てゐる」こと、そのためたとえ意味としては同じ言葉を指しても自国語と外国語は異なつたイメージを有しているはずだと横光は推測する。つまり、そうした言葉を使用して外国の風物を表象化していくことは少なからず齟齬が生じてくるのである。横光が俳句を詠むことで直面した問題がここにも影を落としている。

そして、このような横光の言語観は、帰国後執筆された「旅愁」にも影響を与えていく。例えば、東野と久慈の論争において、東野は「僕は外国から来た抽象名詞といふやつは、分析用には使ふけれども、人間の生活心理を測る場合には、極力使はない用心をしてるんだよ」（「旅愁（続篇）」『文芸春秋』一九三九年六月）と論じる。「旅愁」の主要なテーマである東洋と西洋の対決とそれに伴う論争の中に、言語の持つ歴史性や他言語との差異が重要な要素として機能している。問題視されている「旅愁」後半部の日本回帰の場面も同様である。矢代が塩野の見舞いから帰ろうとする場面にて、「今はむかし」という言葉に注目し、「今がつまりむかしで、今かうしてゐることが、むかしもかうしてゐたといふことですがね。きつと僕らの大むかしにもあなたと僕とのやうに、こんなにして帰つて来た先祖たちがゐたのです」（「旅愁（第三篇）」『文芸春秋』二〇卷八号、一九四二年八月）と千鶴子に説明する。言葉を抛り所にして、過去の人々に思いを馳せるといったプロセス<sup>①</sup>は、洋上句会第五回で横光が詠んだ句とも通底している。こうして考えていくと、矢代が古神道の失われた文字である「イウエ」を発声することで生の実感を抱くといった場面も地続きであるといえる。横光の欧州への航路は四〇日ほどだった。しかし、起源<sup>ルーツ</sup>への旅は日本帰国後も続いていくのである。

注

(1) このような渡航者の欲望は、丸山圭三郎の〈言分け構造〉としても理解することができる。丸山は「動物一般がも

つ生の機能による種、独自の外界のカテゴリー化」を〈身分け構造〉と指定するのに対し、言語による「シンボル化能力とその活動」によって、世界を分節化していく機能を〈言分け構造〉と定義づけている（「病める動物Ⅱ人間ホモ・パティエンス」『文化のフェティシズム』勁草書房、一九八四年一〇月、七一一―七四頁）。

(2) 横光と俳句に関する代表的な論考として中田雅敏『横光利一 文学と俳句』（勉誠社、一九九七年一〇月）が挙げ

られる。同書では、同時代の俳壇の潮流や横光が血縁者と自称していた松尾芭蕉の影響を踏まえることで、新感覚派時代から「旅愁」に至るまでの横光の文学活動の新たな側面を照射している。本章は同書から多くの知見を得ているが、ただその後発表された先行研究も含め、全五回の句会での横光の句を実際の欧州航路の体験に即して分析しているものは管見の限りみられない。本章は、そうした研究状況の更新も目的としている。

(3) 先行論において、三者の紀行文を比較検討する試みは既に行われている。例えば、児島由理は、横光の「欧州紀行」と虚子の『渡仏日記』での航路時やマルセイユ到着後の体験の比較検討を行い、両者の認識の差異とその特徴を丁寧に抽出している（「高浜虚子と横光利一の船旅 『渡仏日記』と『欧州紀行』」『実践女子短期大学紀要』三〇巻、二〇〇九年三月）。礪波美和子は、横光と虚子の紀行文に加え、上ノ畑の『楠窓を偲ぶ』や同船者であった宮崎市定所有のサイン帳と乗客名簿を参照することで、本章でも取り上げる計五回の洋上句会の実態について明らかにしている（「高浜虚子・横光利一の洋上句会 宮崎市定のサイン帳と『楠窓を偲ぶ』を中心に」『叙説』三八巻、二〇一一年三月）。本章では、このような先行論の成果を踏まえつつも、横光の洋上句会での俳句とそこでの体験に

注視することで、横光の認識の変化や気づき、ならびに帰国後の創作活動への展開について考察していくものである。

- (4) 初出は『ホトトギス』(三九巻七―九号、一九三六年四―六月)。なお、同時期に虚子の「渡仏日記」も『ホトトギス』誌上に連載されている。そのためか、上ノ畑の「一日一信」内にて「私も先生の渡仏日記と併用させ、先生の分と重複しない様にして、毎日「一日一信」を書くことに先生と御打合せして執筆して居る」(九七頁)という記述がある。

- (5) 宮崎市定「東と西との交錯 横光利一と歴史」(『展望』二二四号、一九七六年一〇月)・「箱根丸同船記」(『定本横光利一全集 月報』八号、河出書房新社、一九八二年二月)。

- (6) この書簡は、「欧州紀行」の単行本化に際に渡航直後の二二日の記述として修正・配置されることになる。黒田大河は、その際に「自然の変化と自分の気持ちを後で引きくらべてみたい」と加筆・修正されている点に着目し、「自己の認識の対象化という動因を持つことを示している」(「作品としての『欧州紀行』 『旅愁』への助走」『横光利一とその時代 モダニズム・メディア・戦争』和泉書院、二〇一七年三月、一四三頁)と指摘する。

- (7) 熱帯産業重役の奥田直常のこと。「彩坡」という俳号は虚子が名付けたことが上ノ畑の「一日一信」の中で書かれている(一〇一頁)。

- (8) 中川成美が航路中「横光は虚子を頂点に置く日本人社会に自己を定着させた」(「『欧州紀行』論への試み 横光利一の巴里」『立教女学院短期大学紀要』一四号、一九八三年一月)と指摘したように、参加者の俳句を選評していた虚子が俳句の定型を重んじていたことも、一七文字にこだわった要因だといえる。

(9) この句は、帰国後「無季有季（その一）」という題で『帝国大学新聞』（一九三六年一月二三日）に掲載された。しかし、その際には「カムランの島緑なる衣更」とあり、「浅黄」が「緑」に改稿されている。また、「欧州紀行」内では、本句を含めた同日の横光の句は「更衣」ではなく「衣更」と表記されている。

(10) 「欧州紀行」内にもこの時期から夏服に着替え始める描写が目立ってくる。例えば、三月一日「昨日まではオーバーを着てゐるものがあつたが今日は幾らか暑くなつた。入梅ごろだ。印度支那の沖合である」、三月二日「初めて夏服を着る。私は夏服に着替へた最後の船客である」。

(11) 松岡ひでたかは「衣更…」の句について、「傾ける」が、平凡を脱している。一句に一種のアクセントを付けたのである。それだけではない、「傾ける」がなかったら、この句は、陸上での句としてもおかしくはない。すなわち、船の揺らぎの表現なのである」(『横光利一の俳句』交友プランニングセンター、二〇一〇年二月、一〇〇頁)と評価づけている。

(12) 虚子の季題へのこだわりは、当時俳壇で広がりを見せていた無季俳句の問題とも通底している。中田雅敏は、同時期の無季俳句の潮流や新興俳句の状況を参照することで、「高浜虚子はひたすら「季語」を死守して、「俳句は文学ではない」「俳句は詩ではない」の道を進めて、俳句が文壇や詩壇からの影響を免がれる道を求めていたのであつた。それ故、横光利一と渡欧したにもかかわらずその後親しい交わりを持とうとしなかったであろう」(『横光利一 文学と俳句』前掲、一一五頁)と結論付ける。日本と季節が異なる外国であっても、なんとか季題を組み入れようとする虚子の試みは、まさに俳壇の潮流に対する抵抗とその実践だったと理解することができる。

(13) 虚子のこのような姿勢は、バリ到着後も同様であつた。虚子は五月六日、ポール・ルイ・クーシューやジュリアン・

ヴォカンスらフランス・ハイカイ詩人との会合の際に、俳句を三行詩に置き換え、また季語にも特段こだわっていない。なかつた彼らに対し、「それは詩であつて俳句ではない」、「季を外にして俳句はない」(『渡仏日記』前掲、二八四頁)と、繰り返し俳句における季節の大切さを力説していく。このような虚子の俳句を通じた日仏交流や、フランス俳人達の反応については、「座談会「両大戦期の日仏文化交流」」(『両大戦期の日仏文化交流』松崎碩子・和田桂子・和田博文編、ゆまに書房、二〇一五年三月)、柴田依子「フランス・ハイカイ詩人の「日本」」(『ポール・ルイ・クーシューをめぐる』『満鉄と日仏文化交流誌』フランス・ジャポン』(和田桂子・松崎碩子・和田博文編、ゆまに書房、二〇一二年九月)などに詳しいので参照されたい。

- (14) 日置俊次は、「欧州紀行」内を含めた横光の俳句の特徴として、「現代俳句における季語の斡旋をめぐる約束ごとに囚われぬ自由さが見られる」、「自身の素人くささ、いわば稚氣を自分で愛そうとしていた」(『横光利一試論「旅愁」における俳句』『東京医科歯科大学教養部研究紀要』三一巻、二〇〇一年三月)と指摘している。こうした要因も横光の先の季語に対する考えがあつてのことだろう。

- (15) 一九三八年に同地を訪れた野上弥生子も同様の感想を抱いており、「後に残して来た故郷に結びつけて考へやうとするのも旅の心」(『欧米の旅(上)』岩波書店、一九四二年五月、六二頁)だと述べている。

- (16) 既に横光は「欧州紀行」三月二日の時点で、オリオン座が真上にあり、それが赤道にかかった標であると書いている。三月一六日においても夜に船のデッキに上り、南十字星などの日本からでは見ることのできない星を探している。

- (17) 通信省事務官であつた柴官六のこと。「虚風」という俳号は、奥田彩坡同様、虚子が名付けたことが上ノ畑の「二

日一信」の中で書かれている（二〇一頁）。

（18） 横光の発言によると句会では最大七句まで提出することになっていたため（上ノ畑楠窓「横光利一の『俳句』」 渡

欧船中のをりく」（前掲、七四頁）、「二日一信」に記されていないだけで、「月」について詠んだ参加者は横光以外にもいたであろう。しかし、それを考慮に入れても、他の参加者の多数が「月」よりも「印度洋」やインドを、それに対し横光は第三回から継続して「月」を詠んでいる点は注目に値する。

（19） 中川成美は、虚子の欧州航路での俳句を検討し、「虚子に言わせればその人自身の主観が底からにじみ出るような境地はどこにも表現されていない」とし、その理由について「この退歩こそが日本語を支えるリアリテイの問題」

（「紀行文というリアリズム 虚子と日本語表現のリアリテイ」『国文学 解釈と鑑賞』七四巻一一号、二〇〇九年 一一月）であると指摘している。

（20） しかし、「旅愁」第一・二篇では、登場人物達がヨーロッパの風物を俳句で詠もうとする場面が度々出てくる。こうした横光の試みは、欧州航路から続く、俳句で外国を詠むという課題を克服するためだったといえる。

（21） 田口律男は、「今はむかし」という言葉にある「半ば強引なコードの捻じまげは、必然的に、時制の混乱を惹き起こす」とし、「時間性・歴史性の無化がここでは問題なのだ。（中略）過去の出来事が現在の時空に、暴力的に接合され、無媒介的に暗合一致するのである」（「横光利一『旅愁』序論 記号の帝国」『国文学 解釈と鑑賞』五九巻四号、一九九四年四月）と指摘する。田口が指摘するような現在と過去を接続していくような矢代の志向は、横光の洋上句会での体験で得た境地とも通じていくのである。

## 第二章 隆起する「欧州紀行」

### ——横光利一のパリ体験——

#### 一 「欧州紀行」に描出されたパリの多面性

横光利一の欧州体験を記した作品といえば、「旅愁」を想起することだろう。しかし忘れてはならないのは、横光が欧州滞在中に執筆・発表されていた海外紀行文「欧州紀行」『欧州紀行』創元社、一九三七年四月）の存在である。

「欧州紀行」は絶えず「旅愁」との関係性において論じられてきた。先行研究を端的にまとめれば、「欧州紀行」を論じることで「旅愁」や横光の日本回帰に至る端緒を開くか、「旅愁」の影響関係から離れ「欧州紀行」そのものの価値を見出していくかに分類できる。近年においては後者に比重を置いた論考が多い。例えば、黒田大河は「欧州紀行」の改稿・初出発表時期に着目する。そして「横光利一個人の体験の上に、それを作家として言語化した初出のレベル、帰国後の認識の深まりを言語化したレベル、最終的にそれらが一つの作品の中に織り込まれた単行本のレベル」（『作品としての『欧州紀行』

『旅愁』への助走』『横光利一とその時代 モダニズム・メディア・戦争』和泉書院、二〇一七年三月、一四二頁）があるこ

とを読み取る。中村三春は、日本主義や古神道の思想が一義的に描かれている「旅愁」に対し、「欧州紀行」は「発表・成立事情における複数性とともに、テキストとしても複数的である」ことを抑え、「理念的にも文芸的にも、横光の進みえた最終的境地が可能性として望見される」（『幻像のポストモダン』『旅愁』とメタテキストとしての『欧州紀行』『花のフラクタール』20世紀日本前衛小説研究』翰林書房、二〇一二年一月、一三四―一四二頁）と評価付ける。

本章も両論と同じく「欧州紀行」そのものの可能性について考察を試みるものである。重視するのは、先で触れたように「欧州紀行」の初出時の文章の多くが、滞在中に書かれているという点である。横光はパリ到着直後、「私の頭の中では、渦が幾つも巻きつづけ、衝突し、崩れ、巻き込み合ひ、不斷に変化をつづけていく」（四月六日）、「パリーから受ける私の印象は、廻るカツトグラスの面を見てゐるやうに日日変化してやまぬ。その日の結論は、前日の結論とは反対になり、次の日はまた前日とは趣きを異にしてしまふ」（四月七日）と「欧州紀行」に記していく。ここでの心理の揺れ動きや混乱は、横光自身の性質だけではなく、旅の途中で執筆されていた「欧州紀行」という作品の特徴にも起因するだろう。つまり、「欧州紀行」は現在進行中の旅について書かれていく紀行文なのである。加えて、当時のフランスは人民戦線運動の渦中にあつた。そのような日々変化していくパリの情景を、横光はわからないなりに書記化してこうと試みていくのである。日々変動していく情景と横光の心情が織り込まれた「欧州紀行」は、帰国後、自身の体験を想起・追憶し、作品化していく「旅愁」とは、その性質を異にしているのである。

以上のような問題意識から、本章では「欧州紀行」を「旅愁」のサブテキストではなく一個の文学テキストとしてみなすことで、そこで描出された横光の意識の機微とパリの情景を掬い取っていく。そして、適宜「旅愁」を並置させ「欧州紀行」でのパリと、「旅愁」でのパリとの相違点を明らかにしていく。



## 二 書記化しえない空白と横光のパリ生活

ブランク

中川成美は「旅先という異空間の非日常性のなかで触発する外界との違和という感覚は、何故か「書記化」するという欲望が喚起」(『在欧左翼知識人の軌跡』『立命館言語文化研究』一九卷三号、二〇〇八年二月)すると述べる。たしかに、「欧州紀行」での横光はパリに向かうまでの間、船内や寄港地での出来事とそれによる内面の変化を日記に書き綴っていった。しかし三月二八日夕方、横光はパリに到着するのだが、その後一週間何も書いていない。これまでほぼ毎日のように日記を記していた横光にとって、この空白部は気になるところである。そして一週間後の四月四日、「見るべき所は皆見てしまった。しかし、私はこの事は書く気が起らぬ」とパリでの日々を書き出していくのである。同日付の妻宛ての手紙にも「僕はもう見るべきものは、この一週間全部みてしまったので、どこも見たいとは思はない」(「手紙1」)とある。

ではこの空白の一週間、横光は何を見ていたのだろうか。横光と箱根丸で同船していた高濱虚子の『渡仏日記』(改造社、一九三六年八月)を見ていけば、虚子達一行はパリ到着翌日の三月二九日にツアーガイドを伴いパリ市内を観光している。横光もそこに同行していた(高濱虚子「巴里に同行して」『改造文芸』創刊号、一九四八年三月)。

トーマス・クツク会社といふのはかねて友次郎の俳句でおなじみであつたマデレーヌといふ寺院の前にあつた。／コン  
コールドの広場、シヤンゼリゼーの街、凱旋門、それからナポレオンの墓のあるところに行き、諸官衙を見、ルイ十六世

の居つたといふあと、其周囲の古い建物、中にはヴィクトル・ユーゴーの住んでゐたといふ家等を見、ノートルダム寺院にも這入つて見た。(高濱虚子『渡仏日記』前掲、一四九頁)

マドレーヌ寺院からスタートしてコンコルド広場へ、そこからサンゼリゼ通りを西へ進み凱旋門に到着。その後セーヌ河を渡り左岸へ、ナポレオンの墓があるアンヴァリッド、ノートルダム寺院へ向かうというコースである。瀧本二郎『欧米漫遊留学案内 欧州篇 昭和一〇年版』(欧米旅行案内社、一九三四年一〇月)の「巴里一週間見物」の項には、第一日目のルートにコンコルド広場からサンゼリゼ通り、凱旋門、ナポレオンの墓といったルートが紹介されている(三二七―三二六頁)。虚子達の行程はパリ観光の定番コースだったのである。横光はパリ到着まで、寄港地での観光名所を事細かく記していたが、パリにおいては「書く気が起らぬ」と述べ書かなかった。つまり、「欧州紀行」で描かれていくパリは「見るべき所は皆見てしまった」後のパリだと言い換えることができる。

興味深いことは、単行本『欧州紀行』の出版と同じ月に連載が開始された「旅愁」第一回目と第二回目(『東京日日新聞』夕刊、一九三七年四月一四―一五日)の文章に前述した観光名所がふんだんに描かれている点にある。

二人は河岸に添つてエツフェル塔の方へ歩いていく。(中略)矢代と久慈はセーヌ河に添つて、ナポレオンの墓場のあつたアンバリイドの傍まで来た。(中略)アンバリイドから、ギヤルドルセイにかかつて来ると、河岸の欄壁に添つて、古本屋がつづいて来た。(中略)矢代は前方の島の中から霞んで来たノートルダム尖塔を望みながら云つた。

矢代と久慈は、セーヌ右岸から左岸のエッフェル塔まで歩き、そこからナポレオンの墓があるアンヴァリッド、ノートルダム寺院へと歩いていく。虚子達の左岸以降のルートと一部重なっていることがわかる。水野尚はこの「旅愁」冒頭部に着目し、「パリの観光スポットに言及することで、読者を旅の気分招き入れる役割を果たしている」（「対立と同一性 横光利一『旅愁』におけるパリの地理学」『人文論究』六一巻二号、二〇一一年九月）と結論付ける。しかしこの指摘を踏まえ、「旅愁」を読者に向けられた作品、「欧州紀行」をパリとの摩擦・格闘<sup>①</sup>の結果生み出された個人的な作品と位置づけるのは早計である。「旅愁」を読み進めていけば、連載第三回目からは矢代達がパリに到着するまでの物語が回想形式で挿入される。そして第二〇回目（『東京日日新聞』夕刊、一九三七年五月一日）から物語現在に戻り、第一・二回目内容の続きが描かれていく。ノートルダム寺院まで来た矢代と久慈は「左のノートルダムを背にしてパンテオンの方へ上つてい」き、サン・ミッシェル付近のイタリア料理店で食事をする。そしてこの場面から「旅愁」の主要なテーマである矢代と久慈の論争が開始されていく。

帰国直後、横光は自身の欧州体験と今後の創作活動について次のように吐露していた。

自分の生れた国土にじつと動かずに生活してみると、世界の見方が、誰かから教へられた見方を応用させて、あれこれと考へてゐるものだが、さて一度国土を離れ、自分の眼で直接実況を眺めて観察すると、ひどく今迄の考へとかけ離れた実物となつて世界が現れて来る。しかし、これを人に伝へる方法はない。（中略）日日異国で眼にした事を、そのまま書き連ねやうものなら、およそ私が退屈したそのままの退屈を、人々の頭に植ゑつけるやうなものである。（「無題」『横光利一全集月報』九号、非凡閣社、一九三六年一〇月）

「今迄の考へとかけ離れた実物となつ」たヨーロッパの光景を読者に対し、どのように伝えていけばよいのか横光は苦悩する。この言説を下敷きに考えれば、「旅愁」の序盤の構造は次のように言い換えられる。第一・二回目の矢代と久慈のセーヌ兩岸での歩みは「誰かから教へられた見方」、つまり言説で構築されたパリの観光的なイメージを読者へ定着させ、そこから徐々に「今迄の考へとかけ離れた実物となつ」たパリを開示させていくという手法を採用したのである。セーヌ河の表象のされ方もこれを物語っている。「旅愁」第一九回目（『東京日日新聞』夕刊、一九三七年五月九日）では、パリ到着直後「隅田川を小さくしたやうな河」がセーヌ河だと知り矢代達は驚く。しかし第一・二回目、物語現在のセーヌ河は「見るべき所」である観光名所を数多く記したせい、そのような印象は感じられない。「誰かから教へられた」パリから「今迄の考へとかけ離れた実物となつ」たパリへと読者を誘導させる工夫が確認できる。

さて「欧州紀行」に戻れば、横光がパリでの生活をしていく際に直面したのは金銭の問題である。横光のヨーロッパ生活をサポートしていた大阪毎日新聞社パリ特派員城戸又一は、横光が東京日日新聞社から月二百円の手当を受けていたことを証言している（中川成美「『欧州紀行』論への試み 横光利一の巴里」『立教女学院短期大学紀要』一四号、一九八三年一月）。当時の公務員の初任給が約七五円だったことを考えてみれば、月二百円は決して少くない金額である。しかし、同年パリを訪れた伊藤正雄が、「円の為替換算率が悪いから日本の金を持って来て費ふと高くなるのである。仏蘭西人で月給を貰つて居る人は決して高いとは思つて居らぬらしい」（『欧米空の旅』帝国社臓器薬研究所、一九三七年六月、三二頁）と述べたように、当時の為替レートは急激な円安フラン高だった<sup>②</sup>（フラン高はレオン・ブルム政権誕生まで続く）。横光と同時期にフランス政府給費留学生だった桶谷繁雄がフランス政府から一三五〇フラン（日本円にして約三二〇円）を支給され

「大いに楽な生活をした」『新しいパリ新しいフランス』文芸春秋新社、一九五二年一〇月、一六〇頁）のとは対照的に、横光のパリ生活は終始金銭の問題が大きくのしかかっていった。

さつきは正金へ行つて、現金二百円をフランに替へてみた。八百五十フランだ。これで幾日あるか。夫婦で自炊すれば、一人の半分で、二人が完全にいける。金を特によけいに使つてゐるわけではないが、何となしに入るのだ。買ひ物なんかここへ来て、まだ煙草ぐらゐだのに。見物代がゐるのだ。／エツヘル塔でさへ、昇るのに十フランだ。チップ代といふのは月に百五十円はゐるさうだ。全く何でもチップだ（「四月一五日　パリより横光千代子宛書簡」）

生活者として自炊していけばなんとか暮らせなくもないが、観光者として過ごせば見物代・チップが莫大にかかつてしまう。横光の「見るべき所」を書記化しなかった理由の一つは、観光者として観光すればするほど生活者として暮らしていく金銭が急激に減っていくという背景があつたと考えられる<sup>(3)</sup>。四月七日、横光はパリの街並みについて「何とかとか、旅人を喜ばす工夫に熱中して、うつとりする物ばかりふん段に並べてはくれるのだが、そんな物にはびつくりも出来ず、向うの下心ばかりがいやに眼につく」と記している。本来観光者であるはずの横光が「旅人」を相対化しているのも、先の姿勢と通じているだろう。

帰国後、横光は「巴里なんて金がなければ少しも面白くないところだね」（藤澤桓夫「大阪日記　横光さんを迎へる」『文芸』四卷一〇号、一九三六年一〇月）、「外国に居る日本人程不幸なものはない、月給を沢山やらなければ可哀相でしやうがないやうに感じたね」（「欧羅巴漫遊問答」前掲）と周囲に漏らしている。帰国後も金銭の問題が尾を引いていたことがわか

る。しかし、「旅愁」での矢代達のパリ生活には、横光のような金銭を心配する姿は見られない。「一番物価の安い日本から、一番高い物価のパリへ来た」(『東京日日新聞』夕刊、一九三七年五月三〇日)と言及はありつつも、矢代達は論争の際に夕食代(百フラン)を賭け合い、モンマルトルの高級キャバレーで二千フランも散財する。金銭や生活という点において「欧州紀行」と「旅愁」、両テキストの差異を確認することができる。これは同時に「旅愁」で描かれなかったパリが「欧州紀行」に描かれていることを示唆してもいる。

### 三 パリという“山”

横光は「今迄の考へとかけ離れた」パリをどのように知覚・分節化していったのだろうか。横光は五月一日、パリの気に入ったスポットとしてリュウ・ラ・ボエッシーからサントノレ間の通り、オーグスト・コント通り、ロンパン・ゼ・サンゼリゼー、コンコルド広場の四つを挙げている。順次みていき、横光のパリに対するまなざしとその評価軸を確認していく。まずはリュウ・ラ・ボエッシーからサントノレ間の通りである。

今日もマチスの展覧会のある前まで来る。いつたい、この街まで二里はあるのだが毎日来たくなるのには理由がある。このリュウ・ラ・ボエッシーからサントノレの長さ十町足らずの通りは、パリーの伝統の一番濃厚に出てゐる町であるからだ。(中略)パリー全市でこの細長いさびれた通りばかりが、パリーを私に最もよく物語るのだ。東京で云へば薬研堀

から人形町の裏町へかけた所である。私は東京市中で純粹の東京の品物を売つてゐるのは恐らくここだけだと思ふが、これがパリ―全市では、サントノレからボエツシイにかけた十町足らずのこの平凡な通りだけだ。その他は外国人や大衆の愛する町である。

横光はサンゼリゼ通りの裏手にあるこの「細長いさびれた通り」に対し、「パリ―を私に最もよく物語る」と記す。また「その他は外国人や大衆の愛する町」とあり、ここでも「外国人」であるはずの自身の相対化を試みている。左岸のモンパルナスに滞在していた横光がアンリ・マティスの展覧会を見に行くには、パリ随一の観光名所でもあるサンゼリゼ通り<sup>(4)</sup>を通る必要があつた。つまり、横光は観光者向けの大通りの裏手の通りを評価しているのである。

次はリュクサンブール公園の外郭にあるオーグスト・コント通りである。

古い瓦斯燈が青く輝き、片側の建物は尽く窓を閉ざしてゐる中を自分も黙黙として歩く寂寥は物凄く身慄ひのするほど美しい。(中略) 人は死ぬ前には恐らくこの通りの寂寞たる光景と似てゐることだらう。私はここを通る度にパリ―もこんな所のある限りは早やお終ひだと思ふ。他の町は見ずしても想像の出来る所が多いがここだけは末期の世界だ。市中の峡谷。(中略) 私はオーグスト・コント通りの峡谷の中を通る度に、二人「論者注…自殺した佐分真と牧野信一」の冥福を祈らうと思ふ。

中川成美は「光溢れるサン・ミッシェルの雑踏から三〇年代モンパルナスの繁華な中心地であるこれもまたカフェの電飾

で輝くヴァヴァンを結ぶほの暗い道。三〇年代当時もガス燈から切りかえられた電燈が並んでいたが、片側の真つ暗な公園の闇が道に影を投げかけて横光の孤独を一層に誘い出したのである」（『オーギュスト・コント通りの横光利一』『横光利一文学会 会報』二三号、二〇一三年七月）と推測する。大通りや繁華な通りの裏手にある通りに美しさを見出す横光の視線は先のリュウ・ラ・ボエッシーからサントノレ間の通りに対する評価とも通じている。しかしこのコント通りを「人は死ぬ前には恐らくこの通りの寂莫たる光景と似てゐる」や、自殺した佐分真と牧野信一の冥福を祈る通りと位置づけている点は気にかかる。そこで、この死のイメージと結び付き、二度も用いられている「市中の峡谷」という言葉に注目してみたい。

横光はパリの都市空間を山に例え分節化していた。四月二日「パリーの建物は高さと同じで六階だがどの建物も煤けて黒い。道路を歩いてゐると峡谷の底にゐるやうだ」。ベルリン到着後の七月二四日には「パリーの町の建物の中を歩いてゐる時には、山の頂きを仰ぐやうな感じであつた」と述べる。パリの都市に直面し、自身を「峡谷の底」にゐるやうだと横光は感じる。このような認識は実在の都市空間だけに留まらない。四月六日、パリを「文化の頂上」と称し、七月一日、パリ到着間もない時期の様子を記した「失望の巴里（第二信）」（『文芸春秋』一四卷六号、一九三六年六月）を読み返した際、「あのころのひどく興奮して、あへいである様が、いろいろに思ひ出され、自分も高い峠を越したものだ」と述懐する。パリの文化や自身のパリ生活についても山という表現で捉えようとしていることがわかる。

つまり、パリ文化の高さを示す繁華な通りが、サン・ミッシェルやヴァヴァンだとすれば、コント通りはその高い通りに挟まれたまさに「市中の峡谷」なのである。パリ文化の高さに圧倒された後、目にするコント通り、そこに横光は自身の境遇と重ね合わせていく。パリの都市や文化に適合することができず、「峡谷」へ転落していくことはパリでの生活が困難となり生存の危機に瀕していく。だからこそ、「神気寒儉たる」コント通りと死のイメージが結びついたのであろう。



しかし、横光はパリの文化に屈服していたわけではなかった。コント通りと対照的ともいえるロンパン・ゼ・サンゼリゼーとコンコルド広場を挙げ評価しているからである。パリ到着翌日の観光ルートに含まれている両スポットに対し、横光は「文化の最高に位置する」、「人工の美の極を尽したもの」と評価している。特にコンコルド広場は「旅愁（矢代の巻）」において、「矢代はさう云ひながらも、東にチュイレリーの宮殿を置き、西はサンゼリゼエの大公園に接し、北にはマデレエヌの大寺院、南に河を対してナポレオンの墓場を置いた、このコンコルドの広場の美しさには、流石云ふべき言葉も出なかった」（『東京日日新聞』夕刊、一九三七年六月三〇日）とある。だが横光は「欧州紀行」にて、ロンパン・ゼ・サンゼリゼーを「私は好みを殺してここを最高と認める」、コンコルド広場は「深夜に森林の中を一人歩く凄さより、コンコルドの広広とした人工の極みの中を歩く物凄さは、はるかに人人を興奮させることだらう」と記している点に注意したい。前述した二つの通りが主観的な視点からの評価に対し、この二つのスポットは個人の好みに関係なく文化の高さや人工の美しさを認めざるを得ないといった態度が読み取れる。

このようなパリの都市空間に対する視線はチロルやブダペスト、ベニスなどを巡る小旅行を経てさらに深化していく。

廻つて来た五ヶ国の大小の都会が、例外なくパリーの真似を尽してゐたのは、あれは真似ではないのだと気がついた。ものは本格に近づけば近づくほど、軌道が一つになり、個性が無くなつていくのである。／デカルトに始つた都市国家の智的設計は、ヨーロッパから個性を奪つたのだ。この幾何学の勝利は、人心の中に於てでも、暴威を逞しくして近代に及んだ。人心もコンパスの両足に挟まれては動けないのだ。（七月三日）

横光は西洋の都市設計<sup>(5)</sup>の画一性を見出し、「個性を奪つたのだ」と考察する。加えてこの「幾何学」が「人心」までも影響を及ぼしていると述べる。そしてストライキが頻発していたパリの状況を踏まえ次のように続ける。「私はかういふ街へ戻つて来る度に心が静まりなほ一層計り知れぬ深さを感じていく。この不思議さ。つまり、私はだんだん、個性といふ鈍重なものを失つて来つつあるからだ」(七月三日)。「個性」という言葉が再度登場する。「人工の美の極を尽した」コンコルド広場のようなスポットは「幾何学」的に計算されており、それを美しく感じてしまうことは、自身の「人心」「個性」も画一化されていくことを意味している。このように横光は「今迄の考へとかけ離れた実物となつ」たパリを、高低差のある山と例え分節化していることがわかる<sup>(6)</sup>。

#### 四 横光利一とフランス人民戦線

横光は六月以降、パリの政局、特に反ファシズム運動を契機とした人民戦線運動に関心を向けていく。人民戦線とは、ナチス・ドイツを初めとしたファシズムの隆盛により共産党コミンテルンが協調路線に転換し、これまで対立していたフランスの共産党・社会党・急進党などが反ファシズム派として結束、社会党内閣レオン・ブルム政権誕生に至ったという一連の運動を指す。現在において人民戦線運動は反ファシズム派の歴史的勝利として語り継がれているが、当時のフランス国内の状況をみていけば人民戦線派とファシズム派が拮抗していたことがわかる。横光も「今日は総選挙〔論者注…第一次投票〕の日だ。結果は夕方になるとほぼ分るさうだが、左翼が絶対多数で勝つことは決定的だと云はれてゐ」(四月二十六日)だが、

翌日には「まだ明瞭ではないが極右と極左が競り合つてゐるとの事だ」（四月二七日）とある。三六年の一連の選挙結果を分析した渡辺和行は、議席数の上では人民戦線派の選挙協力が功を奏し圧勝であったが、投票数をみれば大きな票の変動はなかったことを指摘している（『フランス人民戦線 反ファシズム・反恐慌・文化革命』人文書院、二〇一三年一〇月、一三三―一三四頁）。ここまで接戦になった要因は、人民戦線運動が共産化運動へ発展していくことを民衆が危惧していたからである。フランス共産党書記長であったモリス・トレーズは一九三六年一月二二日の共産党大会にて「われわれは、ファシズムと反動に抗して、人民の自由を擁護し、平和のためにたたかい、世界平和のとりでソ連邦を守るためにたたかわなければならない」（『フランス人民戦線』坂井信義訳、国民文庫、一九七六年六月（原著…一九四五年）、一六三頁）と宣言している。知識人達の時代認識はどうだったのだろうか。非政治的な作家と言われているジュリアン・グリーンの日記には、ソ連に旅立つ前のアンドレ・ジッドとの会話が記されている。

（彼はこの国をおそらく近く分裂させるだろう重大な政治闘争のことを考えている。）「左右の衝突はほとんど避けられない。そうなれば、きみはもう文学のなかに閉じこもっていることはできなくなる。きみは選択を強いられるよ。」「選択ですって？」とぼくは言う。「共産主義とファシズムとのどちらかを選ぶ？　しかし、ぼくがそのどちらにも心を惹かれな  
いなら、ぼくにどうしろというのです？」ジッドは頭を振る。「選ばなければならないだろう、」と彼はかたくなにくり返す。（一九三五年七月一〇日『日記 ジュリアン・グリーン全集7』小佐井伸二訳、人文書院、一九八〇年五月（原著…一九七〇年）、三〇〇頁）

人民戦線かファシズムかという二分法の中で知識人達も選択を迫られていったことが伺える。

さて、レオン・ブルム政権が誕生した際に、大規模ストライキが頻発していたことは周知の通りである。このストライキの原因についてシモーヌ・ヴェーユは「数日間、自分を人間と感ずること。要求から離れても、このストライキはそれ自身一つのよきことなのだ」(『女子製錬工の生活とストライキ(職場占拠)』『シモーヌ・ヴェーユ著作集Ⅰ』根本長兵衛訳、春秋社、一九六八年四月(原著…一九三六年)、二八五頁)と述べている。ストライキの原因は、レオン・ブルム政権誕生による労働者の期待の表出であり喜びであった。しかし、横光はストライキが頻発した六月一日、そのような光景と異なる場面に遭遇している。

今日は食事に宿を出ると、モンパルナス一帯のレストランは、椅子の足を上向けてどの店も森閑としてゐる。私同様食事に出て来た外人たちは、うろうろしながら笑つてゐるだけだ。近所に白系露人ばかりで経営してゐる食事場が、一つあるのを思ひ出し、そこも罷業するものかどうかと行つてみる。行くと果してここだけが店を開けてゐる。しかし、窓には組合に加入してゐる証明書を、今日に限つて張り付けてある。しばらくして一団の罷業実行委員会が検べに来たが、窓の紙を見て何も云はずに通過した。ところが、店のカウンターの前には、良く見ると白系露人運動の寄附金箱が、軽さうにぶら下つて傾いてゐる。(六月一日)

生活をするため、したたかに働いている白系ロシア人達の姿が描かれている<sup>(7)</sup>。加えて「白系露人運動の寄附金箱が、軽さうにぶら下つて傾いてゐる」光景を横光は記す。人民戦線運動が高まりを見せる中、白系ロシア人や彼らの運動が忘却さ

れていく状況を横光は見出している。ここには六月六日「フランスの労働者は皆金を持つてゐるからストライキが続いても困らない」という横光の過去の指摘は当てはまらないだろう。労働者主導のストライキであるのにも関わらず、ストライキが続くと生活が立ち行かなくなる労働者達を横光は発見したのである。前述した生活や金銭に悩む横光自身の境遇が、彼らにまなざしを向けることになった要因だと考えられる。

このような状況下で七月一四日のパリ独立祭、通称「巴里祭」が行われる。レオン・ブルム政権が誕生し間もない時期であつたため、市民の期待が高まり百万もの人達がパリの街を行進していった。ジャック・ダノスとマルセル・ジブランは当時の様子を次のように回想している。

七月十四日、ナシオン広場に百万人のパリ市民が集まる。(中略) ボーマルシェ通りでは、CGTの諸労連がそれぞれの仕事を象徴する車に乗っていたが、その中に地方の代表団、坑夫、エプロンをつけた肉屋の若者、手に箒を持った家政婦などの姿が目につく。そしてパリの全住民とプーブルジョワジーが参加している。彼らは幸福で喜びにみちている。(中略) ナシオン広場に人々がはいった時、歌と叫びが止んだのは、演説を聞くためというより、彼らの感動のきわまつたあまりである。みんなはこうした全部あげての集まりを目のあたりに見て、信頼感と幸福で胸がいっぱいになってしまったのだ。『フランス人民戦線 一九三六年民衆蜂起』吉田八重子訳、柘植書房、一九七五年九月(原著…一九七二年)、一三〇—一三二頁)

アンドレ・マルローも日記にて「七月一四日／ナシオン広場周辺のすべての大通りに沿って行進し、スピーチを放送する

スピーカーの下に集まる百万の人々。(中略) 行列の通路上にはボンネットを被った人や看護師、赤い布であしらった首輪をつけた犬や子供たち。／(歩きたくないであろう) たくさんの妊婦の人達」(CARNET DU FRONT POPULAIRE 1935-1936, Gallimard, 2006 [論者訳])と記してある。どちらも多種多様な人達に焦点を当て、彼らが連帯していく様子を描いている。横光も巴里祭の様子を記している。しかし、ここでも横光は奇妙な視線を有している。

ナシオンの広場へ群衆の祭りを見に行く。広場は赤旗と三色旗だ。その中へ、全国から集合して来た種種の団体が、それぞれの旗をさしかざし、陸続と行進して来る。この行進の中には、多くの女子や子供も混つてゐる。(中略) 何の諷刺か、むかしの女王の真似をした山車も、幾台も続いたが、侍女に扮した醜い女は、しよんぼりつまらなさうに悄げてゐる中で、女王ひとりにこにこ群衆に向つて笑つてゐる。(七月一四日)

群衆の行進の中、「侍女に扮した醜い女は、しよんぼりつまらなさうに悄げてゐる」光景に横光はまなざしを向ける。ダノス、ジブラン、マルロー達は巴里祭に参加している人々の横の連帯を強調しているが、横光はそれに加え縦の関係を見出している。前節で確認してきた、高低差を持つてパリの都市を認識していく姿勢が、そこで生活を営む人々にも拡張していったのだと考えられる。もちろん、巴里祭のシーンは「旅愁」においても登場する。しかし、「旅愁」での巴里祭は、右翼(ファシズム派)と左翼(人民戦線派)の衝突に焦点化がなされており、縦の関係性は読み取れない。「旅愁」での主要なテーマである思想的な二分法を強調するため、「欧州紀行」で描かれていたはずの光景が埋没してしまったと推測できる。

本章では、「欧州紀行」を「旅愁」のサブテキストとしてみなさず、文学テキストとして読解してきた。西尾幹二は「旅

愁」にフランス人がほとんど登場しない点に触れ、「もう少しフランスに住む人間に関心を持ってくればよいのだが」

（『旅愁』再考 ひとつの読み方『文学界』三七卷一〇号、一九八三年一〇月）と不満を漏らす。しかし「欧州紀行」の横光は、人民戦線かファシズムかという二分法の状況の中、「フランスに住む人間」を注意深く観察していた。しかも、現地の知識人達でさえも見過ごしてしまった人達の姿を横光は書き記しているのである。森かをるは、「旅愁」でのストライキや巴里祭の描写に、人民戦線運動の背景をなす反ファシズムの思潮が欠けていると看破する（『旅愁』における《支那》・人民戦線 昭和十三年の横光利一『国語国文学』七九号、一九九六年二月）。なるほど、確かに「欧州紀行」においても、人民戦線運動におけるファシズムへの言及はさほど描かれていない。横光の「国際情勢から疎外されてしまった無力さ」（古矢篤史「見聞記」が「寂しい旅行記」に至るまで 横光利一と一九三六年前後の国際情勢ジャーナリズムをめぐって）『横光利一研究』一四号、二〇一六年三月）が反ファシズムというバックグラウンドを書記化できなかった遠因なのかもしれない。しかし、だからこそ横光は思想的な二分法が迫られた一九三六年のパリにおいて、見落とされてきた民衆や亡命者達を発見することができたのである。「抽象好き、観念好き」（磯貝英夫「所謂観念性について 横光利一をめぐって」『日本文学研究』二九号、一九五二年一月）といわれてきた従来の横光のイメージと異なる一面が「欧州紀行」には描かれている。

注

- （１）横光のパリ生活をサポートした岡本太郎は「芸術家でも狡猾に既成の己を守り、世界の都の課題を見て見ぬふりをし旅行者気分を通りすぎる者だけが、本質的に何ものも掴み得ない代りに傷つきもしない。（中略）幸か不幸か、まともにぶつかつて絶望した横光さんは純粹であり、繊細だった」（『旅愁の人』『文芸』臨時増刊号、一九五五年五

月」と回想している。

(2) 当時の円とフランの為替レートは次の表の通りである。

	フラン (仏) (1 円 : フラン)		
	最高	最低	平均
1930 年	12.55	12.40	12.50
1931 年	12.55	8.65	12.34
1932 年	9.20	5.025	7.039
1933 年	5.35	4.62	5.068
1934 年	4.95	4.30	4.489
1935 年	4.41	4.15	4.328
1936 年	6.14	4.33	4.831
1937 年	8.50	6.11	7.145
1938 年	10.45	8.45	9.876
1939 年	10.72	10.15	10.31
1940 年	13.07	9.50	10.46

※東洋経済新報社編『完結 昭和国勢総覧』(二巻、東洋経済新報社、一九九一年二月)を参照し論者が作成。

(3) しかし、家族に対しては観光者の姿も見せていた。横光は妻千代子のために手袋を三つ購入し(四月二八日付書簡)、ハンドバックや服を購入し、息子象三のためにピアノまで購入しようとする(五月一七日付書簡)。特に五月一七日付書簡には、「街を歩いてみると、君の物ばかり買ひたくなつて仕様がな。買はないであると神経衰弱がひどくなるのだ」とある。観光者という安定した立場を引き受けてしまいたいという欲望も読み取れる。

(4) 矢本正二はサンゼリゼ通りとサントノレ通りの特徴を次のように解説する。

元々サンゼリゼは、以前は確かにパリーの上等物屋が多かつたので、今でも、香水屋のゲランなどはこゝに



あるが、賑やかになるにつれて、アメリカ人その他の外国人相手の自動車がよく売れるやうな、商売振りになって来たものだから、凝った上等物よりも、如何にも外国人が直ぐ飛びつきさうな、パリらしいものとか、人目を引くものとか、利潤の早いカフェー、活動の町に変つて来たのである。／シヤンゼリゼがこんなになつてしまつたのも、こゝ十五六年の変化が殊に激しい。／小さいショウインドーに手袋一つといった様な店は、サントノーレ方面に皆移つてしまった。『巴里通信』築地書店、一九四三年九月、五〇頁)

(5) パリという都市空間を考えるにあたり、ナポレオン期に行われたパリ大改造は避けて通れないだろう。セーヌ県知事だったジョルジュ・オスマンはパリの住民を強制的に退去させ、ブルバール(大通り)を拡張し、ベンチや木々を植え休息しながら遊歩ができるようにした。またブルバールの終点にモニュメントがくるよう設計する」とで、遊歩者に視覚的でドラマティックな最後を迎えられるような仕掛けを施していた (Marshall Berman, *All That Is Solid Melts Into Air The Experience of Modernity*, Penguin Books, 1988, p.150-151)。

(6) パリの都市空間を山で例えていく横光の認識手法は「旅愁」にも引き継がれていく。次の引用部は「旅愁」が単行本化された際に加筆された部分である。

しかし、見渡したところ、足場の一つもないこの大断層にどうして人人が橋をかけるかと思ふと、他人ごとではなく自分の問題となつて響き返つて来るのである。(中略) こゝ「論者注…パリ」は全く矢代には乾燥した無人の高い山岳地帯を登るのと同じだった。それもふとこの山は人がみな造つたのだと思つたその瞬間、がらがらッと思ひは頂上から真逆さまに下まで転がり落ちた。『旅愁』第一篇、改造社、一九四〇年六月、八一―八二頁)

「大断層」や「山岳地帯を登る」といった表現を用い、矢代はパリの都市を捉えている。そして矢代は、日本と西洋との「断層」をどのように乗り越えていくかについて苦悩していく。このような表現は「旅愁（矢代の巻）」でのチロルの氷河登りの場面にも当てはまる。千鶴子と一緒に「断層」を渡り氷河の山岳を登っていく行為は、日本と西洋の「断層」を乗り越えていく試みでもある。パリを山と例えていく「欧州紀行」での横光の認識が、「旅愁」においては同時代思潮（日本と西洋の問題）と結び付き表象されていく。

(7) 石黒敬七は「パリにはロシア料理が仲々多い。大戦後白系のロシア人が多勢入り込んでタクシーの運転手やレストーランで働いてゐる。（中略）ロシア料理の客は、一流以外の店の九〇％はロシア人で、それもあらかたタクシーの運転手である。飯時になるとレストーランの附近はタクシーを乗りつける運転手でゴツタ返して、中に入ると皆ロシア語で、廻すレコードはロシア曲である」（『蚤の市』岡倉書房、一九三五年二月、一三三―一三四頁）と述べている。ソビエト連邦誕生後、パリに亡命して来た裕福ではない白系ロシア人達は、荷物運びやタクシードライバーをこなし生計を立てていた（James E. Hassell, *Russian Refugees in France and the United States Between the World Wars*, American Philosophical Society, 1991, p.48-49）。「欧州紀行」でのパリの描写をみていくと、タクシードライバーに関する言及が度々確認できる（「手紙2」・四月二一日・五月一九日・五月二一日・六月六日など）。横光のパリ生活において、白系ロシア人は身近な存在としていたのかもしれない。

## 第三章 書き変わる日本と東欧

### ——横光利一のブダペスト体験——

#### 一 書き変わる東欧への旅

オリンピック開催まで横光利一はパリを生活の拠点としていたが、その間二週間ほど東欧へ旅行している。パリからミュウヘン、ウィーン、ブダペスト、ベニス、フィレンツェ、ジュネーブを経由してパリへ戻ってくるという行程だった。「この旅行はかなり大旅行だが、一人で来たのは初めてのことで、いろいろ苦勞も入らうと思つたが、来て見て、一人の方が非常に良いと思つた。言葉なんか通じない方が、はるかにのんきで、便利だ」(一九三六年六月二日 チロルより横光千代子宛書簡)と横光はその時の心境を手紙に綴っている。ヨーロッパへ向かう日本郵船箱根丸の船内では高濱虚子、パリ到着後は城戸又一や岡本太郎らと行動を共にしていた横光にとって、この「大旅行」は文字通り単身での旅行だった。

ところで、横光はパリ出発直後、妻への手紙にこの旅行の日程を事細かく記していた。

六月十七日―水曜日、午後一時四十分パリ発ストラスブルグに出発。午後七時二十分、ストラスブルグ着。（中略）明日は三時出発でミュンヘン。その次の日十九日はミュンヘンからチロルのインスブルックといふ所だ。その次の日二十日はウイン。／二十一日はハンガリアのヴダペスト。／二十二日はベニス。（ここは二三日ある）／二十五六日はフロレンス（ここも二三日あるつもり）／二十九日ごろはミラノ。／三十日から一日、二日、三日と、スキスのジュネーブ、（中略）七月の下旬、パリへ戻る。／かういふ順序で、切符を皆買ひ、通しのホテルの切符も買つて、このストラスブルグまで来た所だ。（一九三六年六月一八日 ストラスブルグより横光千代子宛書簡）

切符やホテルを事前に押さえており、この旅行へ向けて周到な準備を有していたことが伺える<sup>(1)</sup>。しかし、実際の横光の行程を辿っていくと、先ほどの書簡での予定と異なっていることが確認できる（【表1】参照）。特にヴダペストに関しては、六月二一日到着の一泊二日の予定であつたのに対し、実際は二二日着、四泊五日の滞在であつた。当初の予定と実際の行程とを比較しても、ヴダペストでの滞在延長は異例だといえる。ハンガリー語を喋れなかつた横光がなぜ予定を大幅に変更してまで、ヴダペストの滞在を延長したのだろうか。

ハンガリーは、横光だけに留まらず近代日本にとって欠かすこ

【表1】 横光利一の書簡での予定と実際の行程

実際の行程	書簡での予定	日程
パリ出発／ストラスブルグ	パリ出発／ストラスブルグ	6月17日
ミュウヘン	ミュウヘン	6月18日
チロル	チロル／インスブルック	6月19日
ミッテンワルデ インスブルック	ウィーン	6月20日
ウィーン	ブダペスト	6月21日
ブダペスト	ベニス (2・3日の予定)	6月22日
		6月23日
		6月24日
		6月25日
ベニス	フィレンツェ (2・3日の予定)	6月26日
6月27日		
6月28日		
フィレンツェ	ミラノ	6月29日
ミラノ	ジュネーブ ※7月上旬頃に パリ到着予定	6月30日
ローザンヌ		7月1日
ジュネーブ		7月2日
パリ到着		7月3日

とできない国であった。両国の関係を考えるにあたり、近藤正憲の論考『戦間期における日洪文化交流の史的展開』千葉大学大学院社会文化科学研究科学位論文、一九九九年九月）は参考になる。例えば、ハンガリーの独立運動の主導者コシュート・ラヨシュが登場する東海散士『佳人之奇遇』（第二編、博文堂、一八八六年一月）について、近藤はハンガリーを含めた「ヨーロッパの小国が主役を演じ、ロシア、イギリスなどの大国は抑圧者として脇役、と言うより悪役として扱われている点」に着目する。そして、「隣国が列強の植民地化されつつあるアジアにおいて自らがその被害者になるかもしれないという緊張感」が当時の日本国内にあったことを看取る（六〇―六二頁）。明治期の日本にとってハンガリーは、ヨーロッパにありつつも、列強国に囲まれた中、どのように近代化を成し遂げていくかについて共通の問題を有していると見なされていた。

また沼野充義は、東欧文学の特徴について、西欧とロシアとの間に挟まれた地政学的立場に自覚的であり、そこから生じる「小国コンプレックス」と同時に、民族的境界の超越の可能性を見出している（「東欧文学とは何か？ はなま 間の世界の地詩学を求めて」『東欧の想像力 現代東欧文学ガイド』奥彩子・西成彦・沼野充義編、松籟社、二〇一六年一月、三七頁）。西欧とロシアという列強国によって〈周縁〉に追いやられた東欧、そこを舞台とした日本近代文学作品を検討することは、イギリス、ドイツ、フランスなどを〈中心〉と措定しがちな従来のヨーロッパ認識を相対化することにも繋がるだろう。

本章では、横光利一のブダペスト体験とその体験がどのように帰国後の文学活動、特に「旅愁」に影響を与えていったのかについて考察を行っていく。横光は帰国直後のインタビューにて、「もう一度行つて見たい所は巴里とハンガリーである」（寺崎浩「横光氏を迎へる（一つのレポルターチュ）」『文芸』四卷一〇号、一九三六年一〇月）と答えている。横光にとって、ハンガリーはフランスと並ぶ印象深い国であった。日本から文化の〈中心<sup>②</sup>〉地パリへ、そこから〈周縁〉である東欧への旅は横光にどのような認識の変化をもたらしたのか。ブダペスト体験が基に描かれた小説「罌粟の中」を中心に考察を進めていく。

## 二 ツラニズムという紐帯

「罌粟の中」は、一九四四年二月『改造』に発表された。本論の展開上、以下梗概を記す。ブダペスト到着後、主人公の梶がホテルで休息していた時、ヨハンという人物が部屋を訪ね、日本語で梶のガイドを務めたいと願い出る。梶はそれを承諾し、ヨハンからブダペストの観光名所や食事やキャバレーなどを案内される。そして、梶はブダペストの郊外の牧場に連れられ、ヨハンに「しらゆきは どうしてゐますか」と尋ねられる。昭和天皇の御料馬の白雪はこの牧場で育てられ、ヨハンは白雪の買い付けの際、通訳を引き受けていたのである。その後ブダペストに戻ってきた際、ヨハンはブダペストの中心に「ジャパン」というカフェがあり、そこはこの国の芸術家が一番集まるところだと梶に紹介するといった物語内容である。

「欧州紀行」や、欧州滞在時に記していた通称「歐洲メモ<sup>(3)</sup>」を照合してみると、日程や横光の体験した出来事が「罌粟の中」にも反映されていることがわかる。小田桐弘子はこの点を踏まえつつも、「この作品はヨハンと白雪の虚構の部分なくして、成立しない」（「罌粟の中」『横光利一事典』井上謙・神谷忠孝・羽鳥徹哉編、おうふう、二〇〇二年一〇月、九七頁）と述べ、一九三六年のブダペスト体験から約八年後に「罌粟の中」が執筆された理由を白雪に関する新聞記事<sup>(4)</sup>にあると推測した（「写真からの再生」『横光利一 比較文化的研究』南窓社、二〇〇〇年四月、一八〇—一八一頁）。しかし、もう一つの虚構部分と言われているヨハンがなぜあそこまで梶に好意的であり、かつブダペストの現地の人々に対し影響力を有していたのかという問題が残存している。本節は、同時代の日本とハンガリーとの関係性を押さえていくことで、この謎めいたヨハンという人物に迫っていきたい。

戦間期の日本とハンガリーの関係において、欠かせないのはツラニズム<sup>(5)</sup>という思潮である。家田修はツラニズムについて、次のように説明している。

「ツラン民族」とは西方のフィン・ウゴル語族から東の日本を含めたツングース語族に至るウラル・アルタイ系言語を用いる諸民族の総称であり、ツラニズムとはこの諸民族を単一ツラン民族として覚醒させ、統合せんとする運動である。（「日本におけるツラニズム」『日本と東欧諸国の文化交流に関する基礎的研究』東欧史研究会・日本東欧関係研究会、一九八二年四月、二〇七頁）

加えて、近藤正憲は日本とハンガリー間におけるツラニズムを、「日本人とハンガリー人の民族的な近親関係を自覚させ、これに基づく連帯、同盟を主張する思想」（『戦間期における日洪文化交流の史的展開』前掲、九四頁）と定義づけている。ここでの「民族的な近親関係」は、先で確認したように、同じ言語族という理由による<sup>(6)</sup>。しかし、それ以外にもハンガリーと日本を結び付ける要因は存在した。日本におけるツラニズムのスポークスマンだった今岡十一郎は、ハンガリーの親日の理由について、①第一次世界大戦後のトリアノン条約により、三分の二以上の領土と人口の過半数を隣接諸国に割譲されたことによるヨーロッパ民族への反発と、それによる自民族への連帯の機運が高まっていた点、②スラブ系民族（ロシア）の膨張発展に対する危機感と、日本軍がロシアを日露戦争にて破ったことによる賛美、③日本軍のシベリヤ出兵の際、ハンガリー人の捕虜を丁重に扱った点などを挙げている<sup>(7)</sup>（『ツラン民族運動とは何か 吾等と血をひくハンガリー』日本ツラン協会、一九三三年六月、一五―一六頁、三三―三四頁）。そして今岡は続けて、「日本とハンガリーは、共同の敵スラヴを有つといふこと、日、鮮、満、蒙人、トルコ人、及びハ

ンガリー人とは血を分つ兄弟民族である」ことを強調する（四三―四四頁）。「日・鮮・満・蒙・漢」という東アジアの協調を掲げた「五族調和」とは異なり、スラブ系民族であるソビエトに対抗するため、「日・鮮・満・蒙・トルコ・ハンガリー」の連帯を説いている。このように、戦間期における両国の関係は文化的な交流というより、政治的な側面（ナショナリズムや地政学上の問題）に拠るところが大きかったのである。

ハンガリー国内にて、ツラニズムの一大拠点として機能していたのは、ツラン協会という組織である。一九一〇年、ツラン民族の学術、歴史、文学、芸術などを研究・発信するため同協会が設立されたのだが、近藤正憲はそこでの特徴を次のように説明している。「閉鎖的な都市知識人の集団であり、大衆運動としては全く力を持っていなかったが、保守的な貴族グループを中心とする政治的特権層に隠然とした影響力をもち政治的圧力団体として機能し、日本との関係においては独占的な地位を確保した」（『戦間期における日洪文化交流の史的展開』前掲、一一五頁）。加えてハラング・ラースローの次の指摘は「罌粟の中」を読み解くにあたって重要である。

ツラン協会はハンガリーを訪問する日本人客に注意を払い、案内や宿泊に関して当該組織がその手助けとなるようにさせることを大切な任務としていた。両大戦間期においてツラン協会が訪洪した日本人に気がつかなかったり、あるいはその日程作成に参画しなかったということはなかった。（『戦間期』『日本と東欧諸国の文化交流に関する基礎的研究』家田修訳、前掲、八一頁）

ツラン協会と思わしき人物が、日本人観光客にガイドを願い出るといった場面は、斎藤茂吉（『ブダペスト』『改造』二三卷一



号、一九四一年一月）、安倍能成（『ブダ・ペストの四夜』『文鳥』六輯、一九三六年二月）、八木壽治（『洪牙利の首府ブダペスト』『欧米の旅』撫順高等女学校校友会、一九二七年二月、三〇三頁）などの言説からも確認できる。そして、このツラン協会の特徴と仕事は「罌粟の中」のヨハンとも合致する。

「私はこのホテルのものではございません、日本語の勉強のため通訳といたしまして、あなたさま御滞在中の御便宜をお取りはからひいたす考へのものであります。何卒、御用お命じ下さいますなら、私ども幸ひと存じるものでございます。当ホテルを本日訪問いたしますれば、あなたさまの御来訪を教へられましたにつきまして、出張いたしました。」

その後ヨハンは、ガイドを行うに従い「驚くべき記憶力と彼の博学さを少しづつ謙遜に示し始め」、「彼は大学で日本語を教へてゐること、日本へは一度も行ったことはないが、好きなため一人で日本語の勉強を始めた」ことを梶は知る。ヨハンが極めてツラン協会と近い人物であることがわかる。

ツラン協会に所属<sup>(8)</sup>しつつ大学で日本語を教えている人物を辿っていけば、パーズマーニユ・ペーテル大学（現エトヴェシユ・ローランド大学、通称ブダペスト大学）の教授プレーレ・ヴィルモシュ（Pröhle Vilmos）の名前が浮上してくる。プレーレは「非凡な語学的才能を有し、他のいくつかの言葉とともに日本語の修得にも卓越した才能を発揮した。ここで強調せねばならないことは、彼は東洋学者ではなく、しかも日本学<sup>(9)</sup>の教育すら受けていなかった」（セーカーチ・エステル「ハンガリーにおける日本学の歴史と現状」『日本と東欧諸国の文化交流に関する基礎的研究』佐藤紀子訳、前掲、九七頁）。複数言語を操り、日本語の教育を受けていなかった点もヨハンと合致する（ヨハンは日本語だけではなく英語も話せる）。白雪の購入時の通訳がプレーレであ

ったという事実は現在確認できない<sup>(9)</sup>が、プレーレは一九三八年四月二十九日、ハンガリー国内の昭和天皇の誕生日を祝う式典にて講演を行っていた。題目は「天皇制二六〇〇年」であった（ハランギ・ラースロー「戦間期」前掲、八一頁）。

「罌粟の中」のヨハンのモデルがツラン協会の人物だと仮定すれば、ヨハンのガイドや言動が腑に落ちてくる。ヨハンは梶にロマの演奏を聴かせた際、「あれはタローガツタといって、ハンガリー独特の木の楽器です。やつてゐるものもこの国第一等の人」だと教える。食事の際も、「この家の料理はこの国で一等です。ハンガリー料理です」と紹介した後、「いかがですか、この料理は？」／ヨハンは梶からここだけ答へを聞きたいらしかったとある。ヨハンは国という単位を強調しながら、ハンガリーの音楽や食事を紹介していくのである。特にハンガリーの踊り子を紹介する場面はその最たる例である。

「この子らは市の踊子で一番権威を持つてゐるのです。ハンガリーの踊り<sup>(10)</sup>です。」（中略）「なかなか面白い踊りですね。」／と梶は見飽きずに云った。ヨハンもさう云はれたことが嬉しいらしく、この踊りだけは観賞し直すといふ風に、／「日本の方が御覧になると、どの子が美しいと思はれますか。」と梶に訊ねた。（中略）揃った肋骨の迅い動きの中から一人を選ぶのは、梶も難しかった。殊に日本人の観賞の眼も共に選ばれてゐることも、この博学なヨハンの太った笑ひの底にひそんでいた。

ヨハンから「日本人の観賞の眼」を期待され、梶は日本人としてまなざしを内面化していく。そしてホテルに到着後、梶は「この日の自分の事実も自分個人のものとは思へぬ色どりに見えて来た」と思う。梶は当初ハンガリーについて「何も知らぬ白紙の状態」だったと記されていた。しかし、ツラン協会員と思わしきヨハンのガイドを受けることで徐々に個人的なブダペスト体験から

日本人としてのブダペスト体験へと書き変わっていくのである。

戦間期におけるツラニズムとツラン協会の存在を加味すると、ヨハンはツラン協会の関係者、特にプレーレ・ヴィルモシュと重なってくるのがわかった。そして、このツラニストとの出会いこそが、横光のブダペストの滞在延長の理由だと考えられる。

### 三 「旅愁」へと流れる音

「罌粟の中」を読み進めていけば、この作品に通底しているモチーフに音が挙げられる。真紅の罌粟に取り囲まれたブダペストには言葉やメロディーが絶えず鳴り響いていた。韓然善は「梶の身体は「愁ひ」というような感情が身体に染み入るという、音に染まりやすい」点を確認し、そこに「音楽」や「言語」、そしてその解釈をめぐる様々な係争」があることを読み取る（「係争」としてのハンガリー体験 横光利一「罌粟の中」を中心に『横光利一研究』九号、二〇一一年三月）。なるほど、確かに梶とヨハンとのやり取りを含めた音が「罌粟の中」の重要なテーマとなっていることは傾聴すべき指摘である。しかし、本節で注目したいのは、音や言葉が梶の認識や「旅の愁ひ」を喚起しており、そのようなモチーフが「旅愁」の基調低音として流れている点である。例えば「旅愁」で初めて「旅の愁ひ」という言葉が登場するのは、ブローニウの森でのアンリエットの歌であった（「旅愁（矢代の巻）」『東京日日新聞』夕刊、一九三七年六月二二日）。本節では「罌粟の中」を含めた横光のブダペスト体験と音に関する描写に注目し、「旅愁」との関係性を押さえていきたい。

まずは、新たな土地に向かう（もしくは帰っていく）場面である。「罌粟の中」では、ブダペストに入る直前、幼少期に唄った

「ダニューブの漣」を梶は想起する。「実地にそこを走つてゐる自分のことをもう忘れ」、「遠い流れの向ふから聞えて来る草笛の音のやうな、甘酸っぱい感傷の情のおもむきで、ひたひたと身に迫つて来る水に似た愁ひ」を味わう。この場面は「旅愁」第三篇、満州国到着直前の矢代の心境を想起させる。「身体が凄いい渦の中に吸い込まれて流れるやうな眩暈ひを感じた。絶えず潮騒に似た音が遠くから聞えて来てゐるくせにあたりが実に静かだった」、「胸の中でごうごうと水の流れる音がして」などがそうである（「旅愁（第三篇）」『文芸春秋』二〇巻一号、一九四二年一月）。鉄道に乗りブダペストに向かう「罌粟の中」と、日本へ向かう途中の「旅愁」、どちらも遠くから聞こえてくる音や、身体が水で満たされていくというイメージが共通している。

「罌粟の中」に戻れば、梶はホテル到着後も音を手掛かりにブダペストというトポスを分節化していく。

一人の知人さへあるわけではなく、どこに何があるかも知らず、言葉も知らなければこの地の歴史さへ不案内だった。蒙古のことをモンゴロワといひ、モンゴロワをフォンゴロワと読み、フォンゴロワをファンガラワ、それをまた転じてハンガリヤと化して来てゐる唇の作用から考へると、あるいはここもまた、十二世紀以来東洋の草原の英雄が、黄旗を押し立てて流れ襲つて来たところかもしれなかったが、見たところ、通つて来た街のここかしこの人人の様子も、どこも西洋と変らなかった。

ハンガリーについて「ダニューブの漣」しか知らなかった梶は、「蒙古」から「ハンガリヤ」へと至る音の変遷〔1〕に着目して、ブダペストの歴史に思いを馳せる。これまで訪れてきた西洋諸国と一見すると変わらないが、梶は言語の音から東洋との結び付きを見出そうと試みるのである。

言語の音からその土地の歴史を想像していこうとするアプローチは、横光のエッセー「ある愛情」（『東京日日新聞』夕刊、一九

三八年九月四日）にも見受けられる。横光は、右記のような音の転移や、アイヌ語とハンガリー語の類似点に言及した後、次のように続ける。

私はブダペストに行つてみて、この国の民衆の日本への愛情が、口伝から起つてゐることを感じたが、歴史と口伝とが人々を動かす力の、はるかに口伝の勝つてゐるのを感じたのも、またこの地で得た私の経験の一つであつた。蒙古人は家系の重要なことを、女子に神の言葉のごとく暗誦させる風習のあることは、ドーソンの「蒙古史」<sup>(12)</sup>の中に出てゐるが、口伝の暗誦を歴史と見ない科学は、恐らく永久にハンガリアの愛情をもこのまま滅ぼして流れ去ることにちがひない。

横光は、ハンガリー人の日本への愛情の理由を「口伝から起つてゐる」のだと述べている。梶は身体を通して音に染まっていくという韓の指摘を踏まえると、横光のこの「口伝」への高い関心は、身体性を有しているかどうかが深く関わっているだろう。身体を介した「口伝」によつて、伝承をイマ・ココに再現する行為、それが日本への愛情の原因だと横光は推測しているのである。このような発話や暗誦を重視していく姿勢は、「旅愁」でも散見できる。例えば、次の引用部は矢代もしくは横光の日本回帰の一端を示す悪評高い場面である。

「人のは知らないが、僕のはただイウエと発音するだけなんですがね、これを早くいふと、いはゆる気合みたいになつて、エツと聞えるけれども、まあそれでも良いのです。」（中略）「言霊ではイは過去の大神で、ウは現神でエは未来の神のことです。ですからこの三つを早く縮めて一口に、エツと声に出してお祈りするのですが、さうすると、日本人なら誰だつて元気が満ち

て来るでせう。このイといふ字とウといふ字とを大昔は石にして、勿論古代文字ですが、どこの国へも一つづつ神社の御本体として祭らせたのですね。ところが、淫らな形をしてゐるといふ理由で、淫祠だなど云つて、引っこ抜いてしまったのです。

『イウ』といふ、この二つの言霊の根本を引っこ抜いたものだから、さあ、それからは日本が大変だ。しかし、日本人は困り出すと、何のことだか分らずとも、エッといつて、元氣になつて何んだつてやつちまふ。これが生といふものですよ。」（「旅愁

（第三篇）『文芸春秋』二〇卷一―号、一九四二年一月）

矢代は「イウエ」と発話することで「日本人なら誰だつて元氣が満ちて来るでせう」と説明する。失われた文字である「イウエ」を発話することは、過去の人達が体感したであろう音と身体感覚をイマ・ココの身体によつて再現することにあつた<sup>13</sup>。もちろんこのような矢代の説明は、横光の古神道への関心が背景にあつたからであろう。しかし、横光の古神道への傾斜（一九四一年頃）より以前のブダペスト体験に「旅愁」に繋がる音とそれを発話する身体性の問題が提出されていたのである。

#### 四 ブダペストという活路

繰り返すように「罌粟の中」は、一九四四年二月『改造』に発表された。なぜ横光は、ブダペスト体験から約八年後に「罌粟の中」を発表したのだろうか。小田桐弘子は、その理由として、白雪に関する新聞記事にあると推測した。しかし、それだけではないだろう。「罌粟の中」を発表した理由の一つに、同時期に執筆されていた「旅愁」と通じる問題があつたからに他ならない。本

節では、「罌粟の中」発表から四ヶ月後、一九四四年六月に始まった「旅愁」第五篇に着目することで、「罌粟の中」と通底する問題を抽出してみたい。

「旅愁」第五篇は敗戦間近なこともあり、『文芸春秋』にて計三回しか連載されなかった（一九四四年六月、一九四四年一〇月、一九四五年一月）。しかし、その中でも重要なキーワードが登場している。それが〈排中律〉である。〈排中律〉という言葉が登場するのは、矢代がサロンに行った際の会話内である。そこでは、〈排中律〉を「Aから見ればBが不正で、Bから見ればAが不正」になるといった二項対立・二律背反の図式で紹介している（「旅愁（第五篇）」『文芸春秋』二二卷一〇号、一九四四年一〇月）。河田和子は、排中律に関する文献を踏査した結果、「旅愁」で紹介されている〈排中律〉は、「明らかに意味を取り違えている」と断じる。しかし、横光なりの理解をもって排中律を「旅愁」に登場させた理由について河田は、「AかBか、即ち西洋か東洋か、科学か道徳かといった二項対立の思考的枠組み」から「如何に抜け出すか、それは、西洋対日本という二項対立の枠組みの中にありながら、いかに西洋優位の対立的枠組みを乗り越えて新たな秩序世界を構想するかという〈近代の超克〉のモチーフにながっていくこと」（『文学的象徴』としての数学と『旅愁』『戦時下の文学と〈日本的なもの〉』横光利一と保田與重郎』花書院、二〇〇九年三月、一〇四頁）を読み取る。このような二律背反の思考的枠組みを乗り越えようとする矢代の姿勢は、第五篇の連載最終回でより顕著になっていく。次の引用部は、盧溝橋事件勃発の翌日、矢代が会社の会合に出席する場面である。

「西洋と東洋のヒューマニズムの相異について」／この夜、このやうな議題が一同の間で発案されたことも、無理からぬ時だったが、しかし、今は火の手は東洋の面々へも迫つて来たのである。（中略）速記が始まると、さすがに誰も口を開かうとするものがなく、そこから再び会は頓挫した。矢代はこの頓挫でほつとした。何を云はふと今は無駄だと思つたからだつた。（「旅

愁（第五篇）』『文芸春秋』二三巻一号、一九四五年一月）

この会合には司会者が存在し、哲学者・文学者・文明評論家・科学者が出席している。「近代の超克」<sup>4</sup>（『文学界』一九四二年九月—十月）の座談会を想起させる箇所でもある。しかし、西洋と東洋の違い、またどのように東洋が西洋に対抗していくのかといった議題について、矢代は「何を云はふと今は無駄だと思つた」というあきらめの感情を抱いている。

さらにこの会合の後日、矢代は東野という人物の講演を聞きに行くことになる。東野の演題は「新アジア」であつた。しかし、この演題に対し、「矢代は、自分ならむしろ新世界としたかつた」と思う。この二つの場面から、矢代は東洋と西洋の二項対立や、「アジア」といった問題設定に賛同しておらず、そこから距離を置こうとしている。

なぜ横光は、このような矢代の心境を第五篇で繰り返し描いたのだろうか。それは、本章でみてきた横光のブダペスト体験を参入してみると明らかになってくる。つまり、「旅愁」で提出された東洋と西洋の対決と調和という問題を解決するために、横光はブダペストというトポスに活路を見出そうとしたのではないだろうか。東洋と西洋という二分法、もしくはアジアといった枠組みでは捉えきれないブダペストに注目したのは、横光の晩年の問題意識と通じているのである。だからこそ、八年という時を経て、ブダペストを舞台とした「罌粟の中」を発表したのである。

ところで、「罌粟の中」は、横光の戦後初めての単行本『雪解』（養徳社、一九四五年十二月）に初収録された。その際に、いくつかの加筆部分が確認できる<sup>15</sup>。【表2】からわかるように、①②④などでは、「はるか遠く」や「遠い異国の果て」といった言葉が加筆されている。日本とブダペストの距離の遠さを加筆することで、アジアから遠く離れた場所にもかかわらず、日本的な要素を持つていたという意外性を強調させることができる。特に重要なのはラストシーンである⑦、梶がブダペストを旅立つ際のヨハ



ンとの別れの場面である。

ヨハンは、ハンガリーの金銭を日本へ持って帰って欲しいと梶に頼み、何度も「さやうなら」と繰り返す。梶はそれを受け、ヨハンだけではなく、踊り場で出会った日本女性のような踊り子イレーネ、梶がきっかけとなりイレーネと婚約することになるラッパ吹きの男、梶を誘惑しようとした踊り子アンナ達にも、別れを告げていく。

初出のラストシーンは、ブダペストの大通り沿いにあるカフェ「ジャパン」をヨハンが「この国の芸術家が一番行くところ」だと紹介する場面であった。言い換えると、西洋の中に「ジャパン」（しかもそこがブダペストの文化の〈中心<sup>16</sup>〉地となっていること）を梶が発見したところで物語が終わる。しかし、初版でのラストシーンでは、ハンガリーの人々との友好を梶が願う場面で物語は閉じられている。東洋と西洋がどのように調和していけばよ

【表2】 「罌粟の中」の初出と初版にかけての主な加筆部分

全集頁	① P251. L4	② P253. L6	③ P257. L17	④ P266. L3	⑤ P266. L9	⑥ P269. L2	⑦ P270. L12
【初出】『改造』一九四四年二月	しかし、何にせよ、ここは通つて来た道すじを考へてもあまりに遠ざかった感じだった。	梶はふと過ぎて来た旅の空が暮はしく胸に溢れて来るのを感じた。	ともに舌のない獅子を示してゐるやうで、暫く不愉快になるのだった。	しかし、それでも梶は、貴い滴りのやうに素直に胸で受けとめて悔ひなかった。	ちようどホールは最後の湧き立ちで崩れやうとしてゐるときだった。	しかし、それにしても、この遠いほろかな異国の果てで、ヨハンの口から突然そのやうな姿の浮ぶ言葉が出やうとはただもう今は不思議な感じだった。	
【初版】『雪解』養徳社、一九四五年二月	しかし、ここは通つて来た道すじを考へただけでもあまりに遠ざかった感じだった。実際にはほろかな遠くに日本が見えて寂しかった。	梶はふと過ぎて来た空が暮はしく、胸に溢れて来るのを感じた。花の紅さが空と水とに沁みにじみ、水面に眼をつけてはるか遠くを仰ぐやうな哀愁だった。	忽ち諷刺の爪をむき立てた獅子に追はれるやうで暫く不愉快になるのだった。	しかし、この遠い異国の果てで、まだ誰からも貰つたことのない言葉をひと言不意に貰はうとは――梶は、貴い滴りのやうにアンナの囁きを素直に胸で受けとめて悔ひなかった。	アンナには喇叭の囁き意味も聞きたるものであらうか、さらにイレーネには頼着せず梶を揺すぶり流す視線をつづけた。何か擦れかほり入れかほる暖寒の気苦勞で、ちようどホールも最後の湧き立ちに近づき、崩れやうとしてゐるときだった。	しかし、ここでもまた、罌粟の花に取り包まれた遠いほろかな異国の果ての、ヨハンの口から、突然そのやうな姿の浮ぶ言葉がでやうとは――ただもう今は不思議な感じだった。	翌朝の彼の出発は早かった。通りに朝霧のやうな薄霧がこもつてゐた。滞在中梶はヨハンに支払ふべき案内料を一度も貰さずしまつたが、五日間の料金は意外に少額ですんだ。彼は他に謝礼を出したいと思ふのに、もう残りのハンガリーや金は少く、財布をは叩いてそれを出さうとする。ヨハンは、記念に日本へこの国の金銭を所持して帰つて貰ひたいと梶に頼んだ。／＼飛行機まで送つて来てくれたヨハンと別れるときは、梶はその別れが辛かった。廻り始めたフロベラの音を聞きながら、／＼「それでは――」／＼と、差し出す梶の手をしつかり握つて振り振り、ヨハンも「さやうなら、さやうなら」と繰り返した。／＼ああ、何んと沢山の御馳走が出たものだらう。と梶は思つた。空へ舞ひのぼつて行く機体の影から下を見降ろしたとき、彼は、忘れずイレーネと喇叭の一组の夫婦のことも考へて、／＼「仲良くしてくれ、仲良く――」／＼と、さう下に向つて帽子を振るのも、またいつかそれはアンナにも振つてゐる帽子に変つていった。

いのかという横光の問題意識が、「旅愁」第五篇を経て徐々に強まっていたことがラストシーンの書き換えから読み取れる<sup>17</sup>。

本章では、横光のブダペスト体験がどのように晩年の問題意識、特に「旅愁」と関わり合っているのかについて考察を行ってきた。一九三六年のブダペスト体験は、横光にツラニズム協会員との邂逅をもたらし、西洋の中にも日本的な要素（天皇の御料馬白雪が育った牧場や、文化の〈中心〉地である「ジャパン」）が存在していることを気づかせる契機となった。そして、日本とハンガリーの友好の紐帯に言語的理由を挙げ、言葉と身体感覚との関係性の気づきを横光に与えた。その後、東洋と西洋の対決という「旅愁」で提出された問題を考えるにあたり、横光はかつてのブダペスト体験を想起、「旅愁」と並行する形で「罌粟の中」を発表したのである。横光にとってブダペストとは、「旅愁」に登場しないまでも、戦争末期そして戦後にかけての横光の思想の一端を担う重要なトポスなのである。

最後に、しかし横光が志向したような東洋と西洋の調和も、結局は日本やハンガリーを〈中心〉とした「世界史」の書き換えに陥ってしまう。「世界史は即ちヨーロッパ世界史」であり、「世界史転換の主導的な役割を演じてゐるものは、実に我が日本である」（『世界史の理念』『世界史の哲学』岩波書店、一九四二年九月、八八―八九頁）として、大東亜戦争を肯定していった京都学派高山岩男の言説とも呼応するだろう。たしかに「世界史」の書き換えという点において、横光と京都学派（もしくは「近代の超克」）は同じ目的地を目指していたのかもしれない。しかし第二次大戦期を「ヨーロッパ世界に対して非ヨーロッパ世界が独立しようとする趨勢」（前掲、二頁）の時期であると指摘したように、高山はヨーロッパと非ヨーロッパという対立図式を保持し続けた。横光と、京都学派や「近代の超克」の言説群とを分かち要因は、まさにブダペストというトポスにあった。日本回帰という思想的行程においても、横光はブダペストを経由していたのである。

注

(1) 横光が渡欧中の出来事を記していた通称「歐洲メモ」(『横光利一 歐洲との出会い』『歐洲紀行』から『旅愁』へ)井上謙・掛野剛史・井上明芳編、おうふう、二〇〇九年七月)の中には、この旅行と異なるルート(パリ→ジュネーブ→ミラノ→ベニス→フイレンツェ→ローマ→ニス→モナコ→ニス→マルセイユ)が記されている(「I-77」九四頁)。ブダペストを含む東欧への旅は当初の予定に含まれていなかったことが推測できる。

(2) 「旅愁」においてパリは世界の文化の〈中心〉地として表象されている。例えば、久慈はパリのコンコルド広場について「世界の文化の中心の、そのまた中心なんだからなア」(『旅愁(矢代の巻)』『東京日日新聞』夕刊、一九三七年六月三日)と讃嘆する。さらに、矢代はパリ祭でのパリ市民の暴動を目の当たりにし、「もう世界の文化の中心もいよいよ崩れへたばつてゆくばかりだと思ひ、茫然として最後の文化のその絢爛な呻きを聞いてゐる」(『旅愁』第二篇、改造社、一九四〇年七月、三四七頁)という一節が初版の際に加筆されている。

(3) 「歐洲メモ」(『横光利一 歐洲との出会い』『歐洲紀行』から『旅愁』へ)前掲)の「II-4」(九八頁)にはブダペストの占領の歴史、「II-5」(九九頁)には各言語でのダニューブの呼び方が記されており、「罌粟の中」でのエピソードと合致する。ところで、今回の五ヶ国への旅行の際の「歐洲メモ」を概観してみると、横光が見た光景や心情の記述が中心となっている。しかし、ブダペスト滞在時のメモは、ハンガリー語やブダペストの歴史といった専門性の高い言葉が並んでいる。横光はハンガリー滞在中、誰かから聞いた内容をメモに記していた可能性がある。

(4) 「御料馬に『初雪』号」(『東京朝日新聞』朝刊、一九四二年二月一六日)、もしくは「鍛鍊半世紀／鍛鍊期間へ二つの指針」(『東京朝日新聞』朝刊、一九四四年一月一日)。

(5) 「罌粟の中」の先行研究において、同時代のツラニズムの状況に早く目を向けたのが韓然善である。韓はツラニズムの思潮を踏まえ、「ハンガリーは「東洋」と「西洋」という二項のうち、どちらにも帰属せず、常に両者を内包する特異なトポスとして位置付けられていたといえる。(中略) 東洋と西洋との狭間。それは東洋と西洋という二つのトポスを意味していたハンガリーのイメージを通じて、その両者の間で彷徨う日本の複雑な状況を見出そうとした」(「係争」としてのハンガリー体験 横光利一「罌粟の中」を中心に)『横光利一研究』九号、二〇一一年三月)と結論付ける。本章は、韓の論考を踏まえさらに考察を深めようとするものである。特に重視するのは、ブダペストというトポスや、ツラニズムといった思潮がどのように「罌粟の中」、そして「旅愁」へと展開されていったかにある。

(6) 日本語とハンガリー語の共通点としてメゼイ・イシュトヴァーンは、同じ意味を持つ単語の音がよく似ている点(例えば日本語の「塩」はハンガリー語で「sós」<sup>ショース</sup>、名詞の後に「テニヲハ」のような助詞を付ける点、姓名や年月日の書く順番が同じ点等を紹介している(『日本と洪牙利』今岡十一郎訳、今岡十一郎発行、一九三八年一月、六―七頁)。しかし、現在において日本語とハンガリー語は異なった語族として捉えられている(南塚信吾「ハンガリー アジアからヨーロッパへ」『東欧の民族と文化』南塚信吾編、彩流社、一九八九年二月、一五〇―一五一頁)。

(7) ツラニズムの東洋への関心がわかる詩を一つ挙げておく。次の詩は、ハンガリーの詩人ゼムブレーニイ・アールパード「東を目指せ マジカル人よ」(今岡十一郎訳『日洪文化』八巻、一九四三年二月(初出一九一〇年)の一節である。

東を目指せ マジカル人よ

面を 東に向けて走れ

そこに なれのמידだすは

互ひに助け合ふ同族の繁栄ぞ

なれが同胞のうち

日出づる東にて

なれ その友を求めよ

おゝ わが英雄的なる国民よ！

〔論者注…マジャル人とは、ハンガリー人の別称のこと〕

- (8) 日洪文化協会の機関誌『日洪文化』(第六巻、一九四二年一〇月)内の「日洪文化協会会報」に「国立ブダペスト大学文学部には以前より日本語講座ありて今岡十一郎・外山高一氏担任せり。近年はプレーレ教授と徳永康元氏分担任して講義を行ふ」という記述がある。そのほか、角岡知良は「われ等の三大綱領と汎黄色人種連盟」(『大道』二年一号、一九三〇年一月)にてツラン協会の説明した後、「プレーレ博士の如きも熱心なツラニスト」だと記している。

- (9) 戸谷浩は、ツラン協会とその機関紙『ツラン』(Turán)を概観しつつも、「天皇個人との結び付きは、ハンガリーにおいては全くと言っていいほどに顧みられることがなかった。それは一般のハンガリー民衆間の事情のみならず、ツラニストの間でさえほとんど話題にされることがなかった」(「提督の白い馬・天皇の白い馬 戦間期の日本Ⅱハンガリー関係史の一断章」『明治学院論叢』六二二号、一九九九年一月)と述べている。また、ヨハンとプレーレの唯一といってもいい不一致点は、来日経験の有無である。プレーレは一九二九年に来日、東京帝国大学や早稲田大学にて講義を行っていた (Isván Ornos: Remarks on the life of Vilmos Pröhle, KELETKUTATÁS, 2012, pp.50-51)。

- (10) ヴィスキイ・カーロイは、ハンガリーのダンスについて「その国語または音楽と同様に、この民族の特徴である」(今岡

十一郎訳」と述べている（『ハンガリー・ダンス』『日洪文化』八巻、一九四三年二月）。

(11) 飯島正は「オノゴロホノゴロホンゴロフンガロハンガリイ、といふ関係が明かにされ、即ちハンガリイと日本

とはその原始時代を同じくしてゐる」（『ハンガリイのために』『東洋のこころ』生活社、一九四一年九月、一八七頁）というハンガリー人マルコシュ・ジュラの説を紹介している。

(12) ドーソン『蒙古史』上巻、田中翠一郎訳、岩波文庫、一九三六年一二月

(13) 「旅愁」第四篇（『文芸春秋』二二巻三号、一九四三年三月）での母との会話から、矢代の年齢は三〇代だということが判明する。つまり、矢代は明治末頃に産まれたことが推測できる。矢代は、久慈との論争の中で、「論理が表へ立たずに道理が表へ立つて明治になつたところへ、君の好きなヨーロッパの知性といふ奴が這入つて来たのだ。こ奴は分析力だから何もかも分析して、道理も感情も分析し始めたのが、大正昭和といふところだ」と反論していた（『旅愁（続篇）』『文芸春秋』一七巻一号、一九三九年六月）。矢代はヨーロッパの「知性」が日本に侵入し始めて来た時期に生を受け、そのような時代の中で教育を受けてきた世代なのである。石田仁志は、『旅愁』で西欧文化の追従に専心しているものとして理解される知識人階級像は、いわば〈身体〉を西欧文化という価値基準に縛られ制度化されている者をイメージしていると言える。したがって『旅愁』の矢代の〈課題〉とは、その制度化された〈身体〉を一度解放し新たな価値による再制度化をめざしたものと見えよう」（『『旅愁』試論』『語文論叢』一一巻、一九八三年九月）と述べている。だとすれば、古神道の「イウエ」という発話は、矢代が培ってきた自身の西欧型の身体を再制度化、言い換えれば身体を新たに書き変えようとする実践であつたといえる。本論文第五章では、同様の問題を〈異言語〉という観点から、捉え直している。

(14) 「旅愁」と「近代の超克」との差異について、例えば渡邊一民は、「三〇年代後半の西と東の現実との対決をつうじて、

明治以来の東と西の交流の歴史を踏まえながら、東と西を融合する新しい時代を予言するものとして構想されたのが、横光利一の後半生を賭けた『旅愁』にほかならなかった。ついに未完であったとはいえ『旅愁』が、「近代の超克」のこたえようとして失敗した時代の要請に、それなりにこたええた作品だった」（日本への回帰 横光利一『旅愁』をめぐる『フランスの誘惑』 近代日本精神史試論 岩波書店、一九九五年一〇月、二二二―二三頁）と評価づけている。

(15) 横光のこの加筆が戦中か戦後、どちらの時期になされたのかは定かではないが、仮に戦後になされたものならば、GH

Q/SCAPによる検閲の問題を考慮にいれなければならないだろう。しかし、初出から初版にかけての異同箇所を確認すると、加筆部分は多くみられる一方、目立った削除・修正箇所はみられなかった。加えて、十重田裕一は、「罌粟の中」が再録（底本は初版）された『微笑』（斎藤書店、一九四八年三月）に関するプランゲ文庫所蔵資料を調査した結果、不許可の指摘を受けた収録作品は「厨房日記」のみだったことを報告している（「横光利一の著作に見るGHQ/SCAPの検閲 『旅愁』『夜の靴』『微笑』をめぐる』『早稲田大学大学院文学研究科紀要 第三分冊』五七巻、二〇一一年二月）。これらのケースから、「罌粟の中」の検閲の影響は、戦後版『旅愁』や「微笑」と比べると、少なかったといえるだろう。

(16) 横光のエッセー「ある愛情」（前掲）でも、「ハンガリアの首府であるブダペストの中心に、「日本」といふ壮麗なカフェーがある。（中略）「日本」といふカフェーへ一国の芸術家ばかりの集まるところは、恐らく世界の首府では、ハンガリアばかりであらう」という記述がある。ここでもカフェ「ジャパン」をブダペストの文化の〈中心〉地と見なしていることがわかる。

(17)

〈排中律〉は戦後に発表された「微笑」『人間』三卷一号、一九四八年一月)においても登場する。そこでは、「冷笑するがごとく世界はますます二つに分れて押しあふ排中律のさ中にあつて漂ひゆくばかり」とある。〈排中律〉というキーワードを通して、東洋と西洋をいかに調和させていくのかという横光の問題意識が戦後においても継続していたことが確認できる。「微笑」における〈排中律〉の問題については、第六章にて詳述する。



## 第四章 横光利一とベルリン・オリンピック

### ——身体感覚・認識・トポス——

#### 一 横光利一とベルリン・オリンピック

一九三三年アドルフ・ヒトラー政権が誕生。ヒトラーは当初オリンピックを「ユダヤ人の陰謀」と非難し、開催に難色を示していた。しかし、ヨーゼフ・ゲッベルスらの助言もあり、オリンピックを国威発揚の場と位置づけていく。オリンピックスタジアムを含めた公共事業に莫大な資金を投入し、ユダヤ人に対する人種差別の隠蔽、ボイコットに向かいつつあったアメリカ・イギリスに対する工作活動等、ナチス・ドイツは、オリンピック開催に相応しい国であるかのように演出していった<sup>(1)</sup>。ベルリン・オリンピックそのものに着目すれば、黒人差別が激しい状況の中、陸上競技四冠を達成したジェシー・オーエンスの活躍<sup>(2)</sup>、朝鮮半島出身者で日本代表としてマラソン金メダルを獲得した孫基禎の苦悩<sup>(3)</sup>、レニ・リーフェンシュタール監督作『民族の祭典』と『美の祭典』（一九三八公開）、ベルリン大会から行われた聖火リレーは一九三九年ナチス・ドイツ軍が侵攻するルートの前調査<sup>(4)</sup>であつたこと等を思い起こさせる。一九三六年のベルリン・オリンピックは、現在の（そしてこれからの）我々に対しても様々な問

題を投げかけていくだろう。このような国際的祭典、帝国主義下のベルリンにおいて、横光利一は何を見て、何を感じ取ったのだろうか。

そもそも横光の渡欧の目的はベルリン・オリンピックの視察を東京日日新聞・大阪毎日新聞社に勧められたからであった。パリを中心に滞在していた横光がベルリンに到着したのは七月二四日であった。そしてオリンピックの閉会を待たず、八月一日ベルリンを発つ。

繰り返すように「旅愁」前半部がパリを主な舞台としているせいか、横光の欧州体験もヨーロッパパリという図式で理解されがちであった。海外紀行文「欧州紀行」『欧州紀行』創元社、一九三七年四月）に関する先行研究を概観しても、横光が長期滞在していたパリに比重を置いた論考が多数見られる<sup>(5)</sup>。しかし、渡欧の目的であったオリンピックや当時のナチス・ドイツの状況を実タイムで経験している点は注目に値する。横光のベルリン体験について言及した数少ない論考の一つに栗坪良樹のものが挙げられる。栗坪は横光のベルリン滞在とパリ滞在とを比較し、「認識する表現者、無国籍の立場を堅持する横光と、国籍日本を意識せざるを得ない横光との格闘によって、次第に宙ぶらりんの日本国が浮上してくるのが、約半年の渡欧体験であり、それを決定づけたのが、ドイツ体験であった」（「横光利一のドイツ体験 パリからベルリンへ」『国文学 解釈と教材の研究』三五卷一三号、一九九〇年十一月）と結論付けている。しかし、「欧州紀行」の描写だけを頼りに、横光のベルリン体験を考察していくことには注意が必要である。横光のベルリン体験は、オリンピック開催時期のベルリンという特異なトピクスでの体験でもあったからである。

そこで本章は、「欧州紀行」でのベルリン滞在時の描写に加え、国内外の言説を重ね合わせながら、横光の視線とその特異性、また認識の変化を浮き上がらせていく。そして横光のベルリン体験がどのように「旅愁」へと展開されていたのかについて考察

を行っていく。

## 二 「一個の自然人」から日本の〈代表〉者へ

「二人のアスリートの競技する身体が、オリンピックが抱え込む過積載気味の意味と期待とを担うという、恐ろしいまでの落差こそが、〈代表のスポーツ〉の栄光であり興奮であり恐怖であろう」と日比嘉高が指摘するように（「〈代表する身体〉は何を背負うか 一九三二年のロサンゼルス・オリンピックと日本・米国・朝鮮の新聞報道」『メディア 移民をつなぐ、移民がつなぐ』河原典史・日比嘉高編、クロスカルチャー出版、二〇一六年二月、二四〇頁）、オリンピックは〈代表〉選手の身体をナショナルな身体へと変貌させる<sup>(6)</sup>。これはスポーツに関心の無かった人々にも〈代表〉選手に対し、まなざしを与える程強力なものであった<sup>(7)</sup>。

しかし〈代表〉となるのは、競技者のみに留まらない。ベルリン滞在中の横光も日本の〈代表〉者として期待とまなざしを引き受けていくことになる。オリンピック開幕直前の七月三〇日、ベルリンで開催されたIOC（国際オリンピック委員会）総会にて、次回一九四〇年のオリンピック開催地が東京に決定する。八月一日付の『東京朝日新聞』号外には、大きく見出しに「ベルリンの日本人／みんな万歳だ！」とあり、現地での興奮の様子を伝えている<sup>(8)</sup>。しかし、横光はそのような記事と異なる光景を「欧州紀行」に書き記していた。

今回のオリンピックが日本と決定する。逢ふ日本人は互に顔を見合せた形だ。どことなく誰もがつかりしてゐる。(中略)これから始まらうとするベルリンのオリンピックのことなど、今はどうでもよいといふ気持ちになつて来る。／日本人の集る街の食事場もまた一種異様な興奮の仕方である。／「いよいよ来たね。」／「うむ。」／かういふ会話の次には誰も黙つて何も云はない。ヨーロッパ各国の視線が同時にこちらを向いたのだ。(七月三〇日)

ベルリンの日本人が「万歳」している様子ではなく、「互に顔を見合せ」「がっかりしてゐる」様子を横光は目撃する。「ヨーロッパ各国の視線」と記していることにも注意したい。海外や世界中の視線ではなく「ヨーロッパ各国の視線」、つまり近代化の過程において、西洋へまなざしを送ってきた日本・日本人がこれからは否応なくまなざしを向けられる立場になつていくのだという横光の認識と緊張感が読み取れる。馬術競技出場者だったバロン西こと西竹一は、同時期の妻宛ての書簡にて「オリンピック村は、大したものだ。今度日本の番だそうだが、これを見ない人には見当がつくまい。出来ることやら、われわれは日本に決つたと聞いて冷汗をかいいたわけだ」(大野芳『オリンポスの使徒 「バロン西」 伝説はなぜ生れたか』文芸春秋、一九八四年七月、一五〇頁)と記している。横光と西、共通の認識を有していたことがわかる。横光においては翌日の七月三十一日、「カフェーに坐つてゐると、ボーイはわれわれの卓の上に日の丸の旗を置くといふ始末だ。外国の客たちは一斉にわれわれの方を見る。昨日から大舞台に出てゐるやうで少少うるさい」とある。日本人に対する外国人のまなざしが翌日にも継続していることがわかる。

〈代表〉者としてまなざしを向けられ、日本人というアイデンティティを内面化していく横光のベルリン生活はパリ滞在中とは対照的である。横光はベルリン出発直前の七月二〇日、これまでのパリ生活を「私といふ一個の自然人が、この高級な都会の中へ抛り出され、形成されてゆく心理の推移を、偽りなく眺めるのが目的」(七月二〇日)だったと総括している。パリ滞在中、横光

の世話をしていた読売新聞社特派員松尾邦之助は「彼と一緒に街を歩み、カフェーやキャバレにも行ったが、彼は、煙草屋に飛びこみ、大声で、「オーイ。たばこ！ たばこ！ マッチだ、マッチをくれ」と、日本語でどなつていた」姿を目撃し『巴里物語』【二〇一〇復刻版】社会評論社、二〇一〇年一月、二八九頁）、フランス政府給費留学生の丸山熊雄も「レストランなんかでも、お行儀が悪いんですよ。誰かが通訳して注文なんかしていると、まどろこしいもんですから、「あれが食べたい」なんて言つて、よその人のを指さしたりする。そんなんでみんなが何となく敬遠しちゃつて」（『一九三〇年代のパリと私』鎌倉書房、一九八六年二月、一六〇頁）と回想している。パリ滞在中の横光は現地人のまなざしをさほど気にしていなかったことが伺える。黒田大河は「欧州紀行」の「前半部分での横光の姿勢は、自分自身を対象化して見つめようとするものであったのに対し、「半球日記」「論者注」のち「欧州紀行」に収録されることになる、ベルリン滞在時の出来事を記した初出時の題名」では他者から見られる自分を意識した言説が多く見られる」（「作品としての『欧州紀行』 『旅愁』への助走」『横光利一とその時代 モダニズム・メディア・戦争』和泉書院、二〇一七年三月、一五六頁）と指摘している。まなざしを意識し出すターニング・ポイントは七月三〇日、東京オリンピック招致決定の報だったといえる。オリンピック東京招致成功のニュースは横光を、「一個の自然人」からまなざしを引き受ける日本の〈代表〉者へと変貌させていった。

ところで、横光は七月二四日、到着直後のベルリンの様子を次のように記していた。

パリーの町の建物の中を歩いてゐる時には、山の頂きを仰ぐやうな感じであつたが、ここベルリンの建物の下では岩石の谷間を歩いてゐるやうな感じである。町に起伏がなく何処まで行つても同様な町ばかりだ。（中略）パリーの町ではわれわれの眼は市街の彫刻にさ迷ひ、商店の装飾に戯れ、マロニエの幹の優雅さに休息し、街街の起伏や人人の上に憩ひ得られた自由さが

あつた。しかし、此処では最初に一目見たものの許りが何処までも続くのである。このやうになれば、人の心の鍛錬の仕方は忍耐許りとならざるを得ない。この市街の人人の心が団結のままに動くのも尤もだと思ふ。

パリを「山の頂き」、ベルリンを「岩石の谷間」と例え、画一的で整然としたベルリンの様子に横光は困惑する。七月二七日では、「どこもかしこもこれ程掃除の行き届いた街はない。(中略) 整理の限りを尽した人物は、団結するより方法はあるまい」とある。どちらも具体的なベルリンの都市の特徴を観察し、そこにファシズム政権化のドイツの思想・政情を読み取っている。同時期にベルリンに滞在していたアメリカ人作家トマス・ウルフも自伝的小説『汝再び故郷に帰れず』(鈴木幸夫訳、荒地出版社、一九五九年三月(原著…一九三七年))において、「大会の華麗さは、まさに圧倒的であり、そのためジョージは息苦しくなり始めるほどだった。その中には何か不吉なものがあつて、巨大な努力の集中、全ドイツの膨大な統合力の中に潜むべき牽引と秩序が感じられた。(中略) あたかも競技それみずから新しき統合力の象徴であり、この新たな力の結果を世界に具体的に示すための手段として選ばれたようだった」(四四一頁)と記している。横光は「清潔さ」や「団結」、ウルフは「統合力」や「秩序」といった言葉を用い、都市ベルリンとナチス・ドイツとの関係性を読み解いている。

両者の鋭い視点は射っていた。当時ナチスとベルリン市当局は外国人訪問者に好印象を与えるため、市町村に訓示を出していた。例えば、空き家の商店に借家人を住まわせ、囚人労働者の労働を禁止、宣伝省の職員が全国の都市を巡回、美化運動・衛生促進運動を行っていた(デイヴィッド・クレイ・ラージ『ベルリン・オリンピック 一九三六 ナチの競技』高儀進訳、白水社、二〇〇八年八月(原著…二〇〇七年)、二四六―二四七頁)。ベルリン・オリンピックのオフィシャル・レポートには当時の様子が細かく記されている。

行政の観点からみた準備作業として、輸送の問題や様々な試合会場を想定した道路建設だけに限らず、街や主要道路の祝祭的な装飾もまた行われた。(中略)ベルリン市民はまたオリンピック期間中、ベルリンに祝祭的な空気を与えるため、進んで市当局を手伝った。市内全域特に多数の外国人が滞在していた地区の貸間やアパートのオーナー達は、窓やバルコニーを飾り付けてお互い競い合った。(The XIth Olympic Games Berlin, 1936 : official report, Organisationskomitee für die XI. Olympiade Berlin 1936 E.V., W. Limpert, 1937, pp.454 [論者訳])

ベルリン市民も自ら進んで都市を清掃し、訪問者に対してまなざしを向けていったことがわかる<sup>(9)</sup>。横光は東京のオリンピック招致成功と、ナチスからの訓令を受けた人々、二つのまなざしを受けざるを得ない状況へ陥っていったのである。

### 三 オリンピックでの横光のまなざし

八月一日ベルリン・オリンピックが開催される。横光と同様に、オリンピックの視察を新聞社から請け負った文学者に、西條八十と武者小路実篤がいた。西條はコロムビア・レコード企画「詩と音楽の旅」の旅行中に読売・朝日両新聞社から、武者小路は朝日新聞社からオリンピック特派員の依頼を受けていた。本節ではオリンピック開会式の観戦記、特に三者が共通して記した入場行進の場面を比較検討していき、横光のまなざしの特殊性について迫っていく<sup>(10)</sup>。まずは、西條と武者小路の観戦記である。

【西條八十】

草色の衣、爽やけきギリシヤ、紅薔薇のごとき短衣のデンマーク／素朴なるイングランド、黒シヤツのイタリー／見よ、来れり、来れり、翩翻としてひらめく日の丸！／男、女、わがなつかしき同胞選手は微笑しつゝ来れり／彼等ことごとく旅の陽に黒くやけつれど元氣颯爽。／明るき足どりにて歩み来る／旅にゐて彼等をみる心地は、とほく故国の港を眺める心地なり／声かけたき、抱きたき、さはれ一瞬にして、一団の姿はわが眼底より群集のなかに消えたり。（『祖国を賭ける』『読売新聞』号外、一九三六年八月二日）

【武者小路実篤】

フランス人がナチス式の挨拶をした時何となく涙ぐんだ。平和が感じられたからだ。／二十五番目に日本の諸君が現れる。我等は誇りを以て拍手を送った。（中略）確に独逸の国民がこの国際競技に捧げた祝典として我等はその隙間のない行動に感動し感心す。／四年後に我等は東京に於て日本人らしくこの祝典を行つて我等国民の行動力を示したいものだと思つた。（『仏人のナチス式／挨拶に涙ぐむ／思ひを東京大会に』『東京朝日新聞』朝刊、一九三六年八月二日）

西條はヨーロッパ各国の入場行進の様子を冷静に記している。しかし日本選手団が来ると一転、主観的で興奮した描写となっている。そして日本選手団の行進の様子を「明るき足どりにて歩み来る」と評していく。対象に対する温度差を付けることで、日本選手団に同一化した際の興奮を日本人読者へ効果的に伝えることが可能となっている。武者小路は一九三六年三月七日、ナチス・



ドイツ軍によるラインラント進駐が背景にあったため、「フランス人がナチス式の挨拶をした時何となく涙ぐんだ。平和が感じられたからだ」と述べている<sup>1)</sup>。加えて「四年後に我等は東京に於て日本人らしくこの祝典を行つて我等国民の行動力を示したい」とあり、東京大会へ向けての展望を述べている。このように西條と武者小路の観戦記は、日本や日本選手団に対して概ねポジティブなものであった。

この両者の内容を踏まえ、横光の観戦記を吟味していきたい。

正面ヒットラーの前まで行進した各国の選手は、その国国の礼をしなければならぬ。しかし、喜ばれた国はドイツ式の宣誓の挙手をした国である。横に正面を見上げつつ進んだ国に、英国と日本がある。誰も黙つてこの二ヶ国には拍手をしない。服装や顔色で明快な国はその美しさのために拍手があがる。オーストリアと米国はむしろ政治的背景として歓呼の声が場内を圧したが、選手を旗手ただ一人より送らぬコスタ・リカはその寂しい孤影のため厚意の波を湧き上がらせた。(中略) 中華民国は悉く夏帽を冠つて出て来たが、一斉に揃へた脱帽の美しさは民国の優雅さが感じられる。むしろ日本選手の後半が足乱れ、踏むべからざる芝生を踏んで行進して来るのをみると、オリンピック日本招致が選手に与へた興奮を思ひやられ手に汗を握るのである。殊に堂堂たるイタリアの行進と拍子湧くが如きその後だ。選手行進の最後はドイツである。各国のうち最も足並み整ひ、白の服色明快で場内の緊張に一層強く輪をしめた観がある。(「オリムピック入場式を観る」『東京日日新聞』号外、一九三六年八月二日)

横光の観戦記は日本を中心化せず、大小含め様々な国の行進の様子を詳細に捉えている。特に注目すべきは「日本選手の後半が

足乱れ、踏むべからざる芝生を踏んで行進して来る」という一節である。開会式における日本選手団に対する不評と、行進失敗の理由は主に四つあった。一つ目は服装が質素だった点<sup>①</sup>、二つ目はヒトラーへの挨拶がナチス式でもオリンピック式でもなく観客からは分かりにくい「頭、右」だった点<sup>②</sup>、三つ目は日本選手団の不仲<sup>③</sup>、四つ目は西洋式の行進に不慣れだった点<sup>④</sup>である。横光は西條・武者小路両者に比べ、このような行進の乱れを注意深く観察していたことになる。日本選手団の行進が乱れていたという横光の指摘は日本国内で話題となった。「彼は日本選手のだらしなさを指適<sup>⑤</sup>し、列は乱れ、礼儀正しくなく、芝生を踏む者もあつたと警鐘を鳴らしたが、まさに新聞記者の役目を奪ひ取つたやうなもの、出かしたり横光！」（關無門「壮絶な空輸リレー新聞匿名月評」『文芸春秋』一四卷九号、一九三六年九月）、「選手のこのだらしなさは、どこからきてゐるか。日本の国民が、輕薄で、運動選手を何か偉いものでもあるかの如く、優遇しすぎた結果、彼等から慎しみの感情といふものを取り去り、人間の生地をまるだしにさせたものとみられる」（板垣直子「オリンピック選手の国辱問題」『新潮』三三年一二号、一九三六年一二月）等である。両者とも横光の指摘を受け、そこから選手達のだらしなさへと結び付けている。しかし、横光は決して日本人選手団がだらしなかったから足並み乱れたとは記していない。行進の失敗の原因を横光は「オリンピック日本招致が選手に与へた興奮」のためだと記しているのである。西洋からまなざしを受けているといった意識はここでも継続し、横光の対象への視線や解釈に大きな影響を及ぼしていることが読み取れる。

このようなまなざしを内面化したまま、横光はオリンピック競技を観戦していくことになる。競技開始直後の日本選手団の成績は振るわなかった。八月二日の横光の記述には「日本選手の成績が悪いのでこれを文章に書く気がしない。書け書けと喧しい新聞社の催促を受けるが、ペンを持つ気さらになし」とある。日本選手の不振を目の当たりにしつつも、観戦記を書かなくてはいいという苦悩が読み取れる。そして翌日の八月三日、連日の日本人選手の不振の原因を横光なりに分析・言語化しようと試みてい

く。

昨日（二日）も今日（三日）も天気が悪い。家を出る時空を見て降りさうな天気の日、今日は日本は駄目だといつも思ふ。日本人は植物のやうに一片の雲にも皮膚の感覚がちぢむのである。（中略）日本人が自分の記録を誰も出さず敗北してゐる第一の原因は、底から仰ぐ狭い空の曇つてゐることだ。たとへば比較的良好な成績をあげた村社と、山本嬢二人の出場の時は太陽が雲を破つて珍しく場内が輝き渡つてゐた。人間が実力以上の活動を希へるのはその時の自然によらねばならぬ。（『日本選手への鬼門』『東京日日新聞』夕刊、一九三六年八月五日）

横光は日本人選手の不調を「日本人は植物のやうに一片の雲にも皮膚の感覚がちぢむ」ためだと推論する。そしてその証拠に八月二日、一万メートル競走で四位の村社講平と、女子やり投げ五位だった山本定子の競技の際には「太陽が雲を破つて珍しく場内が輝き渡つて」おり、「人間が実力以上の活動を希へるのはその時の自然によらねばならぬ」と考察する。他紙と比較してみても、横光のこの観戦記は少々趣が異なる<sup>16</sup>。横光の天候に対する関心は七月二六日「晴れたと思ふとすぐ雨だ。雨かと思ふとまたすぐ晴れる。（中略）何もすることがないと思ふと天気ばかりが気懸りなものだ」、八月七日「雨が降つたかと思ふとすぐまた天気だ。私にとつては、今日はレインコートを持つて出ようかどうかを考へるのが最大の私の関心事になつて来た」等から、ベルリン滞在中継続していたことがわかる。たしかにパリ滞在時の記述をみていけば横光は頻繁に当日の天気を記している。しかし例えば、四月六日「晴。巴里へ来てから初めての晴天だ。しかし、私の頭の中では、渦が幾つも巻きつづけ、衝突し、崩れ、巻き込み合ひ、不斷に変化をつづけていく」というように、天気と自身の心理や身体との関係性についてまでは考察が及んでいない。

画一的で代わり映えのないベルリンの都市の中で、「晴れたと思ふとすぐ雨だ。雨かと思ふとまたすぐ晴れる」といった天気の変化に横光は関心を向けるようになったのではないだろうか。

ところで、村社講平は一万メートル競走で善戦出来た理由について「スピードを常に織り込んだ走法の技術を身につけた猛練習の中からつかみ出した練習法」にあったと回想している（『長距離を走りつづけて』ベースボール・マガジン社、一九七六年七月、一二七―一二八頁）。村社の四位は太陽が「場内が輝き渡つて」いたことによる「実力以上の活動」ではなく、周到な練習に裏打ちされた「実力」通りの結果であった。もし横光の推論が正しければ八月五日、天候が非常に悪くかつ決勝は夜遅くまで行われていた棒高跳び決勝にて、二・三位に入賞した西田修平・大江季雄の活躍はどのように説明すればよいのだろうか。しかしここで重要なのは横光の推論の妥当性を問うことではなく、村社の善戦やその他の日本選手のパフォーマンスの不振を天気という環境要因に結び付けた点にある。そして、環境やトポスが日本人の身体やパフォーマンスに影響を与え、「植物のやうに一片の雲にも皮膚の感覚がちぢむ」といった認識は「旅愁」へ引き継がれていくことになる。

#### 四 身体感覚―認識―トポス

「旅愁」続篇にて、日本人二人がパリとベルリンの優位性について激論を交わしている場面がある（「旅愁（続篇）」『文芸春秋』一七卷一五号、一九三九年八月）。ドイツを「団結力」「綜合力」、フランスを「自由性」「分析力」と形容していくことから、思想上の対立関係にあることが読み取れる。しかし、「旅愁」の物語内容においてドイツやベルリンは前景化されてこない。矢代が

パリ滞在後ベルリンへ向かうことは物語序盤から示唆されていた。だが、矢代のベルリン体験は、「パリを発つたのが七月の終りで、それからベルリンへ行つた一ヶ月の間に、またいろいろの事情でイタリアまで飛行機で飛んだりした」（『旅愁（第三篇）』『文芸春秋』二〇巻一号、一九四二年一月）と第三篇冒頭部分で回想されるだけである<sup>18</sup>。

しかし、だからといって横光のベルリン体験が「旅愁」に反映されていないわけではない<sup>19</sup>。横光がベルリン・オリンピックで得た、日本人を植物的存在として措定し、環境によって身体が影響を受けるといった境地は「旅愁」の全篇に貫かれている。例えば、東野と久慈の初対面の場面で、東野は「日本にゐれば僕らはどんなことを考へてゐようと、まア土から生えた根のある樹ですが、ここへ来てれば、僕らは根の土を水で洗はれてしまつたみたいですからね」（『旅愁（矢代の巻）』『東京日日新聞』夕刊、一九三七年六月一日）と語る。東野は自身の境遇を文字通り根無し草<sup>デラシネ</sup>のようにみなしている。西洋主義者であつた久慈も、「日本人の生える土地はこゝにはないと、だんだん東野に教へられたままに久慈の考へが流れ落ちていく不安に襲はれ出すのだつた。／問題は土だ。それも農村問題や政治問題ぢやない。もつとその奥にあるものだ」（『旅愁（続篇）』『文芸春秋』一七巻一三号、一九三九年七月）と思うに至る。土を希求していく東野と久慈は、まさに自身を植物的存在とみなしている証左だといえよう。

興味深いのは、一九四〇年に「旅愁」が単行本化される際、植物的表現が加筆されていく点にある。例えば、パリ到着間もない頃の矢代のパリ生活の描写である。

新しい野菜と水ばかりのやうな日本から来た矢代は、当座の間はからからに乾いたこの黒い石の街に馴染むことが出来なかつた。蛙は濡れた皮膚から体内の瓦斯を發散させて呼吸の調節を計るやうに、湿気の強い地帯に住んで来た日本人の矢代の皮膚も、パリの乾ききつた空気にあふと、毛孔の塞がつた思ひで感覚が日に日に衰へ風邪をひきつづけた。（中略）少し街を歩く

と堪らなく水が見たくなつてセーヌ河の岸の方へ自然に足が動いていくのだつた。〔旅愁〕第一篇、改造社、一九四〇年六月、八〇頁）

「新しい野菜と水ばかりのやうな日本から来た」矢代は「黒い石の街」パリに馴染めず部屋に戻ると靴を脱いでしまう。自身を蛙に喩え、慣れ親しんだ水気のある「土」ではなく乾燥した「石」の上を歩かなければならないという身体の違和が描かれている。注意したいのは、当該場面は『改造』欧州大戦臨時増刊号（二一卷一―号、一九三九年九月）内の小特集「回想の欧洲」に掲載された小説「最初の日」がもとになっている点にある<sup>20</sup>。横光は同作品の冒頭部に、「一人の人間、それも日本人が初めてパリへ現れた一週間のまごまごした気持を次のやうに書いた」と記している。第二次世界大戦勃発直後に、横光は自身が体験したパリ到着直後の印象を再度想起し、加えてそこに植物的表現を盛り込んで作品化したのである。

このような植物的表現の加筆箇所は、矢代が展開する日本論においても確認できる。例えば、次の場面である。

悪点を数へ上げれば、およそ、良い所がどこにあるのかと云ひたいほど、数限りもなく沢山にあつた。しかし、矢代は、それらのいかなる悪点よりも、自然を喜ぶ日本の文化に、悪人が少いと云ふ美点を、何より喜ぶのであつた。（『旅愁』（矢代の巻）『東京日日新聞』夕刊、一九三七年七月七日）

悪点を数へ上げれば、およそ良い所がどこにあるのかと云ひたいほど数限りもなく澤山にあつた。しかし、もう少し考へると、それらの欠点は日本人の美点から生れて来た、他国には見られぬ花の名残りとも見られる球根につづいてゐた。『旅愁』

第一篇、前掲、二〇〇頁「傍点は論者が打った」

このように、「旅愁」の連載が進むにつれ、ベルリン体験で得た植物的モチーフが強まり、「旅愁」の中心的なテーマの旅や日本文化にも発展していくのである。

「旅愁」第三篇以降も同様である。帰国後、矢代は自分たちを「立ち対ふ態度を洋式にしてゐるうち、いつとは知れず心魂さへ洋式に変わり、落ちつく土もない、漂ふ人の旅の愁ひの増すばかりが若者の時代」（「旅愁（第三篇）」『文芸春秋』二〇巻六号、一九四二年六月）と定義づけている。加えて、「落ちつく土もない」ことが「旅愁」の主題である「旅の愁ひ」を喚起する要因であることが示されている。次に矢代の父の死後、実家での場面である。

矢代はまたあたりの風景を眺めてみた。父のあるときには、自分の背後に父からの長い紐がついてゐて、そこから養分を吸ひ取りつつ、それも知らずに迂闊に見てゐた景色だった。それが今は、ぷつりと背後の紐は断ち切れて、眼に映る港の建物、船舶、街路の起伏に連る人家の隙間と、直接自分の根を張りわたらせる樹木のやうに、独立してゆくものの切迫した、初初しい悲しみを彼は覚えて来るのだった。（「旅愁（第四篇）」『文芸春秋』二二巻七号、一九四三年八月）

親子の関係を「長い紐がついてゐて、そこから養分を吸ひ取りつつ」と称している。そして父の死後、その「背後の紐は断ち切れ」「養分」が吸い取ることが出来なくなるため、「自分の根を張りわたらせる樹木のやうに、独立してゆくものの切迫した、初初しい悲しみを彼は覚えて来る」。父という「根」を失ったことにより自身の知覚・認識までもが変容してしまうことが示唆されて

いる。そして矢代は、「先祖の呼吸し、眺め暮して滅び散った館の跡を見て置きたい」（「旅愁（第四篇）」『文学界』一一卷二号、一九四四年二月）<sup>1</sup> と思い、父親の故郷である九州へ旅に出る。父親が知覚してきた光景を自身の身体を通して追体験しようとする旅だと言い換えることができる。その後、矢代は父の故郷へ着き、山へ登っていく。

矢代は頂きの石の上に腰を降ろして休んだ。黒松の幹の間から海が見えるのが、ここに棲つたものの今もなほする呼吸のやうに和いだ色だつた。葛の葉や群る笹の起伏する上から遠ざかつたむかしのころの面影を想像してみても、たしかにここには、父に繋がるもののかつて刻んだ労苦の痕跡が感じられた。彼は骨箱を松の枝にかけて暫く耳をすませてみた。しかし、今の矢代に通ひ匂つて来るものは、峰から峰をわたつて来る松風の音ばかりだつた。それはもうむかしの響き轟いた矢筒の音でもなければ、叫び倒れるものの声でもなく、肋骨の間を音もなく吹きぬけて行くやうな、冴えとほつたうす寒い、人里はなれた光年の啾啾とした私語であつた。（「旅愁（第四篇）」前掲）

矢代は「頂きの石の上に腰を降ろし」、そこでの光景、そして松風の音を聴き、「肋骨の間を音もなく吹きぬけて行くやうな、冴えとほつたうす寒い、人里はなれた光年の啾啾とした私語であつた」と感じる。植物の音である「松風」を「光年の啾啾とした私語」という比喩表現を用い、矢代はそれを実感する。つまり矢代は、そこで暮していた先祖達が見て来た光景を追体験することができるのである。山を登る途中「路はしだいに細まり峻しくなつた。矢代は汗をかきかき雑草を靴で踏み跨いで歩いた」（「旅愁（第四篇）」前掲）が、先の実感後「山路を下る矢代の足首に草の実が附着して来た」（「旅愁（第五篇）」『文芸春秋』一二卷六号、一九四四年六月）という第五篇冒頭部は、先祖の土地と矢代の身体との調和を物語っている<sup>2</sup>。



一九三八年に横光は「地が揺れる」(『東京日日新聞』夕刊、一九三八年八月七日)というエッセーにて次のように述べている。

一度人は地を自分の足で蹴つて飛び上つて見るが良い。必ずまた元の地へ直ぐ落ちる。一分間ほど飛び上つてゐられる人さへ、まだ私は見たことはない。地に足をつけてゐる感覚は、人間認識の根元であることには、今さら疑ひを容れ得ない。その土地が揺れ動くといふ国と、絶対に不動であるといふ国との認識を、同様だと思ひ得られる人の感覚には、何かここに誤りもまたなければならぬ。

「地に足をつけてゐる感覚は、人間認識の根元」であり、「土地が揺れ動くといふ国と、絶対に不動であるといふ国」の間では認識が異なっているのではないかという考察がなされている。このような「身体感覚―認識―トポス」の関係性は、第一章でみてきた水原秋櫻子との対談の中でも発言「ベルリンで月を見てびつくりしましたね。ドイツ語では月は男性になつてゐるのは尤もだと思つたんです。カツと非常に強い感じがするんです。男といふ感じですよ」(『対談記』『俳句研究』三卷二二号、一九三六年二月)とも通底している。この二つの言説で示されているのは、トポス(地)によつて、人間の身体感覚や認識が変容してくるという点である<sup>(22)</sup>。前節で確認してきたトポスを移動する際に生じる身体の違いと知覚の変化が、「旅愁」においては植物的表現によつて表象されていくのである。

このような知見は「欧州紀行」を「旅愁」のサブテキストと定置すると前景化し得ないだろう。「欧州紀行」のパリの描写を一次資料として参照しつつ、「旅愁」の提出した問題へ迫っていく。このようなアプローチでは当然「旅愁」の舞台にはならなかったベルリンはオミットされていく。しかし日本人を植物的存在とみなし、トポスによつて身体や認識が変容するといったベルリン

での横光の気づきは、「旅愁」の水脈を流れ続けているのである。

注

(1) オリンピック開催までのナチス・ドイツの動向は、デイヴィッド・クレイ・ラージ『ベルリン・オリンピック 一九三六ナチの競技』（高儀進訳、白水社、二〇〇八年八月（原著・二〇〇七年））に詳しく書かれているので参照されたい。

(2) しかし、オーエンスが四冠を獲得したにも関わらず、黒人に対する差別・偏見は改善しなかった。「ベルリン大会は、アメリカにおいては（ほかの国においてと同様）、黒人はある種のスポーツでは解剖学的に有利であるという、当時生まれかけていた紋切り型の考えを強めたが、ニグロは生来、性格と知能が劣っているという紋切り型の考えをそれが打破することとはなかった。黒人は短距離競走と跳躍では才能があるかもしれないが、スタミナ、規律、チームワーク、精神的鋭敏さを必要とする競技では白人を凌駕することは決してないだろうと考えられていた」（デイヴィッド・クレイ・ラージ『ベルリン・オリンピック 一九三六 ナチの競技』前掲、五二一頁）。

(3) 大会中、孫基禎はサインを頼まれるとそこに「K O R I A」と朝鮮半島の絵を描き、優勝時には「君が代」が自身の国歌であることに悔し涙を流した。また大会終了後、『東亜日報』は孫のユニフォームにある日の丸を塗りつぶした写真を掲載し、それにより朝鮮総統府から発行停止処分が下される。詳しくは、孫基禎『あめ月桂冠に涙』（講談社、一九八五年二月）を参照。

(4) デイヴィッド・クレイ・ラージは聖火リレー実施の背景について次のように指摘している。「最初はナチの宣伝省によって立案され、ドイツ組織委員会の疲れを知らぬ事務局長のカール・デイームによってもっぱら具体化された聖火リレー

は、南東および中部ヨーロッパに新生ドイツを宣伝するものに変わった。その地域は、ナチの生活圏（ドイツ拡張主義のスローガン）を提唱する者が欲しがっていた地域だった——そして、やがてドイツの国内軍によって蹂躪された。オリンピックからベルリンに聖火を徒歩で運ぶという一見無害な行事は、その後のあからさまな侵略を予告するものだったのである」（『ベルリン・オリンピック 一九三六 ナチの競技』前掲、九頁）。

- (5) 「欧州紀行」でのパリに着目した論考として、中川成美「『欧州紀行』論への試み 横光利一の巴里」（『立教女学院短期大学紀要』一四号、一九八三年一月）、山本亮介「自壊（滅）していく文明とともに フランスの現実とテキストの生成」（『横光利一 欧州との出会い 『欧州紀行』から『旅愁へ』』井上謙、掛野剛史、井上明芳編、おうふう、二〇〇九年七月）などが挙げられる。

- (6) 女子二〇〇メートル平泳ぎ金メダリストの兵藤（旧姓・前畑）秀子は当時の状況を次のように回想している。

とくに私の場合、勝つことが至上命令のようになっていました。国威発揚の期待はロサンゼルス大会のときより、いっそう強まってきました。けっして大げさではなく、日本中が私に注目していたのです。プレッシャーがかかるのは、むかしもいまも変わりはありませんが、当時は、ナショナリズムという厄介なものが加わっていたので、その激しさは、現代とはくらべようがありません。／じっさい、私は、もし優勝できなかったら死のう、と考えたほどです。帰りの船から飛び込もうか、いや、私は泳げるから、海では死ねないのではないか、などと本気で考えたのです。（『前畑は二度がんばりました 勇氣、涙、そして愛』ごま書房、一九八五年二月、九二頁）

- (7) 例えば、荒木巍はベルリン・オリンピック終了後オリンピックのユニフォームを着た選手が店の娘を待ち構えていた場面に遭遇し「伯林でどんなことを仕出しかしたのか具体的に知らぬし、知らうと云ふ興味もないが、——またオリンピック選

手だと云ふ亢ぶった気持ちのはづみ、所謂血気の過ちとも言へやうが、かう云ふ粗野な神経や教養の低さを持つてゐるのでは、運動選手は何をしでかしたか知れぬと云ふ不安が起つた」（『オリンピック服と選手』『人民文庫』一卷一〇号、一九三六年十二月）と述べている。

（8） 浜田幸絵は『東京朝日新聞』『読売新聞』『東京日日新聞』三紙のベルリン・オリンピックの報道を比較・検討して「四年前」〔論者注…ロサンゼルス・オリンピック〕よりも膨張傾向にあり、自国中心・愛国主義的で扇情的な傾向を強めていた。広告も、記事に呼応して国民意識を喚起する役割を果たした」（『東京三紙のベルリン大会表象 ナショナリズムの肥大化』『日本におけるメディア・オリンピックの誕生 ロサンゼルス・ベルリン・東京』ミネルヴァ書房、二〇一六年二月、二〇三頁）と分析する。

（9） 七月二八日、横光はウンテル・デン・リンデンにある横浜正金銀行を訪れた際、老婆が行先を丁寧に教えてくれたエピソードを記している。穿った見方をすれば老婆のこの親切な対応は、ナチスの「外国人訪問者に好印象を与える」といった訓令を内面化した上での行動かもしれない。

（10） 三者のオリンピック観戦記を比較検討した著書に上村直己『西條八十の見たベルリン五輪』（熊本出版文化会館、二〇一二年七月）がある。上村は開会式における観戦記を比較して次のように結論付けている。「実篤と利一はフランス選手団が入場式でナチス式の敬礼をしたことに注目し、強い感銘を受けているが、八十はそれについて触れていない。一方、八十は聖火の劇的效果を強調し、またナチス新国家「ホルスト・ヴェッセル」に深く感動しているが、実篤も利一もそれについて何も書いていない。関心の対象や感情における詩人と小説家の違いが見られて興味深い」（九九頁）。本章も上村と同じく三者の観戦記の比較を行うが、重視するのは、横光の開会式における「関心の対象や感情」の要因を突き止めること

にある。

- (11) しかしフランス代表団の挨拶はナチス式ではなく、オリンピック式の挨拶であった。斜め前に右腕を向けるオリンピック式の挨拶はオリンピック競技場で観戦していた観衆たちにとって右腕をまっすぐ向けるナチス式の挨拶に見えたため拍手が沸き起こったのである。詳しくは、リチャード・マンデル『ナチ・オリンピック』（田島直人訳、ベースボール・マガジン社、一九七六年三月（原著：一九七一年）、一八一頁）を参照。

- (12) オリンピックに帯同した瀧澤七郎は「我が日本の選手の服装は、近くで見ると左程でもないが、あの広く高い所から眺めた場合、誠に引き立たぬ。私共が盛んに拍手を送つても、周囲の人達が共鳴せぬ。一寸したことであつたが、実は残念でたまらなかつた。／質素も宜いが、次回は大に考へて頂きたいものである」（『オリムピックを観る』健康之友社、一九三六・一〇、七二頁）と語っている。

- (13) 鎌田忠良『日章旗とマラソン』潮出版社、一九八四年八月、二七一―二七二頁

- (14) 行進順が前回のロサンゼルス大会から役員↓女子選手↓軍人・軍服着用者（近代五種・馬術競技者）↓男子選手と変更になったため、軍人・軍服着用者からの反発があつた（孫基禎『あゝ月桂冠に涙』前掲、一四八―一四九頁）。澁谷壽光は当時の様子について、「日本軍の行列のつたなさにはあきれる。計画も悪いにはちがひないが。選手個人のだらしさも多分に原因をなしてゐる。一番いけないのは指揮者の両氏「論者注…大島鎌吉・清川正二」、其の次が兵隊さん達」（『一九三六年 ベルリンオリンピック遠征記 澁谷壽光の足跡』鈴木幸子編、鈴木幸子、二〇〇四年六月、五七―五八頁）と日記に記している。

- (15) 鎌田忠良『日章旗とマラソン』前掲、二七二頁

(16) 武者小路実篤は「しかし日本は負けたが実際見てみると日本の選手はよく闘った、殊に村社君は孤軍奮闘大いに努めた

といつていゝ、最後までよくねばったフィンランドの選手三人を相手に半分までは先頭をつとめ少しもくたばらず途中で抜かれてもまた抜き返したりした。最後にあゝいふ結果になつたがひとりで頑張つた点は偉いと思つた。(中略) 日本程あらゆる方面に優秀な力を示した国民はさうないやうに思ひ負けはしても心丈夫さを感じた」(莊巖・日本の奮闘／負けて悔なし『東京朝日新聞』夕刊、一九三六年八月四日)と記している。

(17) 当日の会場の様子は次の引用部から伺い知れる。

ところが此の頃また驟雨が沛然と襲来しスタンドは混乱に陥つて棒高跳も或は中止かと思はれるに至つた。／しかも此の間熱鬧は続けられたが遂に夜陰は迫り照明下の大争覇となつて勝敗は決し優勝の栄冠は惜くも米のメドウスに譲つた。併し日本は西田、大江同成績で西田二位、大江三位を占めた。(陸上競技研究会編『伯林オリムピックの全貌』一成社、一九三六年一月、五九頁)

(18) 横光がベルリン体験やオリンピックを登場させなかった理由に、「旅愁」の執筆時期が影響しているのかもしれない。矢代達がパリを旅立つまでを描いた第二篇の連載終了が一九四〇年の四月、日中戦争激化のため、東京オリンピックの開催権を返上したのが一九三八年七月である。ナチス・ドイツに視点を移すと、ナチスのポーランド侵攻は一九三九年九月、一九四〇年四月からは立て続けにデンマーク、ノルウェー、そしてパリを占領下に置いた。『旅愁』初出時点においてベルリンやオリンピックを描くことは、開催されたかもしれない東京オリンピックと、「平和の祭典」であるオリンピックを開催したドイツが積極的な軍事行動に出ているという矛盾を読者に想起させてしまう。松村良は「『旅愁』は作品世界の〈時間〉に執筆時の〈時間〉が介入し、その〈時差〉が作品世界の人物(主に矢代)の「思考基盤」に影響を及ぼし、ま

た「現在時への郷愁」をもたらすという、特異な小説」だと指摘している（『横光利一「旅愁」の〈時差〉』『國學院雑誌』一〇五卷一一号、二〇〇四・一一）。だとすれば、物語現在と執筆時期との「時差」に横光は苦悩した結果、矢代のベルリン滞在を省略し、早急に舞台を日本へ移していったのではないだろうか。

- (19) 「旅愁」とベルリン・オリンピックの関係性を指摘した論考に金泰暲のものがある。金は「旅愁」第三篇に登場する南という人物は、ベルリン・オリンピックでマラソン三位に入賞した南昇龍の影響があるのではないかと指摘する（『可能性としての「朝鮮」』『横光利一と「近代の超克」』『旅愁』における建築、科学、植民地』翰林書房、二〇一四年一二月、一二七―一二三頁）

- (20) 古矢篤史は、「最初の日」の執筆時期と『旅愁』第一篇に組み込まれていく経緯を踏まえ、一九三九年の時代状況や「この「欧州大戦」への視座が組みこまれていることに留意する必要がある。端的に言えば「東洋」および「西洋」双方のシニフィエに変容が起きている」（『最初の日』『横光利一研究』九号、二〇一一年三月）と指摘する。

- (21) 矢代が草や花を踏みしめて歩いていく描写はパリ（ブローニュの森での場面）と日本（矢代が幼少の頃、先祖の土地を訪れた場面）、どちらにおいても確認できる。

・少し疲れて手から力を抜くと、たちまち密集して来る海老殻色の茎の弾力に跳ね返されて二人は打ちよせられた。  
足で踏みつけた茎も二人の過ぎた後方で戻り合ふ音を立ててゐた。（中略）矢代は汗が出て来たが仕方もなく暴暴しく真白の絡りついた茎を踏みつけて云った。／「氷河をわたるよりこつちの方がよつぽど骨だ。」（『旅愁（続篇）』『文芸春秋』一七卷一九号、一九三九年一〇月）

・山の上の崩れた石垣の間に茂つた羊齒や芒など、靴で踏みつけ何を知らずに歩いた幼年のころの旅の記憶を呼び起

してみても、ただの荒城とより思へないながら、今見れば少しは前とは感慨も違ふであらうと思はれた。（「旅愁

（第三篇）」「『文芸春秋』二〇巻八号、一九四二年八月）

だとすれば、第五篇の冒頭部「山路を下る矢代の足首に草の実が附着して来た」という描写は矢代の身体とトポスとの関係性において大きなターニング・ポイントだったといえる。しかし、矢代は「さまよふ自分の旅ごころこそ実の世界」（「旅愁（第五篇）」「『文芸春秋』二二巻六号、一九四四年六月）という境地に至っていくように、土と身体との調和をさらに越えていこうとしていく。このような土からの脱却という志向性については、終章にて検討を行う。

（22）

矢代が帰国後に抱く千鶴子への認識の変容も、「身体感覚―認識―トポス」の関係から説明可能である。矢代は帰国後、「水が氷になるやうにいつの間にやら揺れ停つて質の変つてゐる自分であつた」と感じ、日本で会う千鶴子は「別人のやうに見えるにちがひなかつた」（「旅愁（第三篇）」「『文芸春秋』二〇巻五号、一九四二年五月）と想像する。ヨーロッパというトポスで知覚し認識した千鶴子と、日本というトポスで知覚し認識していく千鶴子は、身体が根ざしているトポスが異なるため、おのずと認識も異なってくるのではないかということが暗示されているのである。矢代が帰国した塩野と再開した際、「あなたや千鶴子さんと会ふのも嬉しいが、惜しいことに、外国へ行く前に一度会つておいたんだと、もつと良かった」（「旅愁（第三篇）」「『文芸春秋』二〇巻七号、一九四二年七月）と述べたのは、日本というトポスでも千鶴子を認識しておきたかつたという意味であろう。事実、千鶴子と再会した際、矢代は「千鶴子の姿が、ますます別人のやうに見える」（「旅愁（第三篇）」「『文芸春秋』二〇巻八号、一九四二年八月）と思う。ヨーロッパという夢のようなトポスで知覚し認識した千鶴子像と、日本という現実の生活上でのトポスで知覚・認識していく千鶴子とのズレに矢代は苦悩していくこととなる。



第五章 〈異言語〉への旅と愁い

——横光利一「旅愁」論——

一 「旅愁」の「断層」を跨いでいくために

横光利一は亡くなる一ヶ月ほど前、「今の日本には、ワシの『旅愁』を判ってくれる人が一人もない。しかし百年後の人は判ってくれると思うよ」（横光佑典「父の残した言葉」『横光利一の世界Ⅱ』豊の国宇佐市塾、二〇〇三年三月）と家族に漏らしていたという。横光がその胸中を吐露してから七〇年以上が経過した。しかし未だ「旅愁」という作品は我々読者を困惑し続けている。

敗戦後、「旅愁」が「痴呆の書」（杉浦明平「横光利一論」「旅愁」をめぐって『文学』一五卷二一号、一九四七年一月）とまで断罪されたのは序章にて述べた通りだが、このような「旅愁」評価に異議を唱えたのは長谷川泉であった。長谷川は「旅愁」矢代の巻での矢代と千鶴子のチロルの場面に着目し、「杉浦明平が『痴呆の書』ときめつけた『名論卓説』を素通りして通る限りにおいては、清冽な恋愛の書として十分に楽しませる可能性を持っている」（「旅愁」（横光利一下の四）

現代文の鑑賞三十八』『国文学 解釈と鑑賞』二三巻五号、一九五七年五月）と評価づけていく。日置俊次は、「チロルの面の抒情性が称揚されたことで、イデオロギー性の薄いチロルの場面はとりあえず認めようとする評価軸の傾斜が生まれた」（『旅愁』『横光利一事典』井上謙・神谷忠孝・羽鳥徹哉編、おうふう、二〇〇二年一〇月、二二二頁）と長谷川論の研究史的意義を強調する。

長谷川論が呼び水となつてか、現在までに様々なアプローチから「旅愁」の読み直しが図られてきた。その隆盛ぶりは一時期『『旅愁』論の季節』（田口律男「研究動向 横光利一 『旅愁』論の季節」『昭和文学研究』三三集、一九九六年二月）が到来したと言われた程である。現在、横光利一文学会の論文データベースで「旅愁」というキーワードを検索してみると、その数は二〇〇近くにも及ぶ。内容もナシヨナリズムやポストコロニアルの問題はもちろんのこと、舞台となったパリや旅という行為、後半部での主要テーマである古神道やみそぎ、さらには建築・俳句・科学・数学など論点は多岐にわたる。

しかし、これら膨大な先行論を概観してみると、そこには二つの傾向が見出せる。すなわち、ヨーロッパを舞台とした第一・二篇、日本に帰国してからの第三・四・五篇・「梅瓶」のどちらかに軸足を置いた論考に大別できるという点である。中村三春が「概ね、否定論が否定するのは全五篇と「梅瓶」から成る『旅愁』のうち第三篇から五篇にかけてであり、肯定論が肯定するのは第一篇から二篇にかけてである。すなわち、欧州紀行の部分と古神道教義の部分に大別され、前者に比べて後者は評価できないというのが一般的な批評である」（『係争する身体 『旅愁』の表象とイデー』『修辭的モダニズム テクスト様式論の試み』ひつじ書房、二〇〇六年五月、一六九頁）と端的にまとめているように、「旅愁」を論ずる際の比重の置き方が、そのまま「旅愁」評価にも結びついていくのである。「旅愁」には東京とパリを比較して、またチロルの氷河

の場面の際、度々「断層」というキーワードが登場するのだが、「旅愁」論においても、前半部と後半部の間に「断層」が見られるのである<sup>(1)</sup>。

しかし、前後半いずれも「旅愁」という題名が付されている以上、また「旅愁」を救済もしくは批判するにせよ、そこで連続性や相関性は当然検討されねばならない。つまり問うべきは、「旅愁」前半部におけるパリやチロルでの体験がどのよう<sup>(2)</sup>に第三篇以降に接続されていくのか、または古神道に代表される矢代の神がかり的な日本回帰の問題に前半部の欧州体験がどのように影響を及ぼしていくのかということである。換言すれば次のようになる。『旅愁』は始めから「痴呆の書」ではなく、「痴呆の書」となつてしまつたのであり、またヨーロッパの旅を経て、矢代は「いかがわしい日本」<sup>(3)</sup>へ辿り着いてしまつたのである。これからの「旅愁」論において必要なのは、矢代のヨーロッパ体験がどのように後半部の日本回帰の問題へ行き着いてしまつたのかという理路と隘路の検討だろう。先で引用した日置は、「テキストの詳細な検討や、語りの様式に関する考察、また身体論、メディア論、ジェンダー論、比較文化論、都市空間論などの援用はもちろんだが、これらの多様な視点が総合されて、断片的ではない「旅愁」の全体像が次第に構築されていくことが望ましい」(『旅愁』前掲、二二二頁)と記している。「旅愁」論の新しい「季節」を迎えるためには、こうした連続性や総合性を見据えた視点<sup>(4)</sup>が必要になつてくるのではないだろうか。

そこで本章では、「旅愁」の前後半どちらかに軸足を置くのではなく、前半から後半へ跨いでいくような思考的枠組みを意識しつつ、「旅愁」を読み進めていきたい。重視するのは〈異言語〉という視点である。ここでの〈異言語〉とは、単に外国語だけではなく、より広く自身の使用言語と異なる言語(とそこでの意識)を指し示すことにする。〈異言語〉に注目する理由は、こうした〈異言語〉接触が「旅愁」全篇において貫かれているからである。「旅愁」前半部においては、パリでのフラ

ンス語を含めた外国語がそれにあたり、後半部では、古神道の失われた文字「イウエ」の注目や矢代の父親の故郷で出会う浄瑠璃口調の老婆、女中とよの手紙のエピソードなど、矢代が使用する標準語と異なる言語の出会いが散りばめられており、しかもこれら〈異言語〉が矢代の日本傾斜を後押しすることにも繋がっていく。「旅愁」全篇を貫く〈異言語〉に注目することで、後半部での矢代が陥る隘路についても検討することができるだろう。

もう一つの理由としては、こうした〈異言語〉への注目が横光の文学活動を考える際に有効な視座を与えてくれるからである。例えば次の引用部は、研究史においてたびたび言及される『書方草紙』（白水社、一九三二年一月）の序文である。

此の集の中には大正七年から昭和元年にいたる十年間の、主に国語との不逞極まる血戦時代から、マルキシズムとの格闘時代を経て、国語への服従時代の今にいたるまで、およそ十五年間の紆余曲折した脱皮生活の断片的記録を集めた。

十重田裕一は「横光利一にとって「国語」とは何か」『昭和文学研究』四一集、二〇〇〇年九月）において、同時期の国語政策の動向を踏まえ、横光が「国語」政策のもとで教育を受けた第一世代」でありつつも、しかし「標準語化の趨勢と結局のところ呼応」していったと考察する。加えて興味深いのは、「国語への服従時代」という表現に注目した、十重田の次の分析にある。

「国語への服従」と述べたとき、意識的であるか否かは別として、横光は「国語」の、そしてそれを創定する「国家」に連なることを宣言してしまっているのである。そのことを横光が自覚していたか定かではない。しかし、一九三〇年代に

顕在化してくる横光のナショナリズムへの傾斜が、この表現にすでに象徴的に表われていたとみることは十分に可能である。

本章で検討していく〈異言語〉の問題にも通ずる指摘であろう。ただ十重田は、「一九三〇年代に顕在化してくる横光のナショナリズムへの傾斜」という指摘にとどまっており、「旅愁」や欧州体験での〈異言語〉体験をどのように位置付けければよいのかという問題は残されたままである。「旅愁」での〈異言語〉体験を考察していく本章の作業は、「国語への服従」からナショナリズムの傾斜へと向かう横光文学の変遷を見通す際にも有益に資することだろう。以上のような問題意識から、次章以降「旅愁」前後半に跨る〈異言語〉体験の道程を辿ることにする。

## 二 パリでの〈異言語〉体験

本節では、パリを主な舞台とした「旅愁」前半部での〈異言語〉について考えていきたい。たしかに、「フランスにあって、フランス人が登場しない——アンリエットという横浜にいたことのある女性がちらつと出て来るのを唯一の例外として——きわめて閉鎖的な小説」（西尾幹二『「旅愁」再考 ひとつの読み方』『文学界』三七卷一〇号、一九八三年一〇月）と揶揄されているように、「旅愁」では日本人同士の交流やそこでの論争の場面にページが多く割かれている。しかし、そうした中においても、フランス語を始めた〈異言語〉接触が、矢代の日本回帰の思想に影響を与えていくことになる。例えば、「旅愁」矢

代の巻で登場するアンリエットである。アンリエットは先の指摘通り、「旅愁」に登場する数少ないフランス人の一人であり、矢代と久慈のフランス語の家庭教師を務める人物でもある。矢代はフランス語の「純粋な発音を習ふため」(「旅愁(矢代の巻)」『東京日日新聞』夕刊、一九三七年五月二八日)、アンリエットに本の音読をしてもらうことになるのだが、次の引用部はその後の二人の会話である。

「あたしの発音法は、これでまだ完全ぢやないのよ。パリの人の発音は、たいていはまだ駄目。やはり、一度ギヤストンバツチの女優学校へでも這入つて、正規の発音を習はなきゃ、信用出来ないわ。」／このパリの高い文化でさへがさうなかと、矢代は驚いた。／「さういふものですかね。しかし日本にも日本語の完全な発音なんか、どこにもないですよ。東京の者だつて、つまりは、東京の方言を使つてゐるんですからね。」(「旅愁(矢代の巻)」『東京日日新聞』夕刊、一九三七年五月二九日)

「純粋な発音を習ふため」フランス語の習得に努めようとした矢代だが、教師であるアンリエットですら「正規」の発音はでないという<sup>(4)</sup>。矢代はそれを受け、「日本語の完全な発音なんかどこにもない」と返答する。発音の「純粋」・「正規」性への探求が困難だという矢代の意識が、今話している日本語にも向けられているのがわかる。「血液の純潔を願ふ矢代にしては、異国の婦人に貞操を奪はれる痛ましさに較べて、まだしも千鶴子を選ぶ自分の正当さを認めたかつた」(「旅愁(矢代の巻)」『東京日日新聞』夕刊、一九三七年五月五日)と、矢代の「純潔」性への志向は既に示されていたが、言語の発音という次元においても同様のことがいえるのである。

フランス語の「純粋な発音」に関する問題は、その後の矢代と千鶴子との会話にも登場する。千鶴子がパリのサロンに通い始めた際、矢代に「言葉だつて、モンパルナスあたりの言葉を、一寸でもサロンで使はうものなら、もう相手にしてくれないんですつて」(「旅愁(矢代の巻)」『東京日日新聞』夕刊、一九三七年七月三日)と告げ、矢代はもつともだと頷く。ここでの「モンパルナスあたりの言葉」というのは、恐らく俗語やスラングの類のものだろう。しかし、外国人が多く住み、矢代達も居住し普段耳にしてきたであろう「モンパルナスあたり」でのフランス語は、サロンでは通用しない、つまり「正規のもの」とみなされていないのである<sup>(50)</sup>。

この二つのエピソードからわかるのは、矢代がいくらフランス語の「純粋」・「正規」性を希求しようとしても、それは限られた特権階級が有するものであると同時に、自分が今の生活圏にいる以上、また外国人である以上、それは到底習得できないという気づきである。フランス語という〈異言語〉に触れることで、矢代は言語の「純粋」・「正規」性への会得が困難なことを痛感するのである。

パリの〈異言語〉体験としてもう一つ重要な場面は、モンパルナスのカフェでの討論である。周知の通り、モンパルナスにはセレクト (Le Select)、ロトンド (La Rotonde)、クーポール (La Coupole)、ドーム (Le Dome) などが乱立し、外国人を含めた多くの客で賑わっていた。例えば、「旅愁」にて矢代達が度々論争するドームには、同時期ジャン＝ポール・サルトルやシモーヌ・ド・ボーヴォワールを始め、イリヤ・エレンブルグ、アルベルト・ジャコメッティ、ロバート・キャパなど多くの文学者・芸術家が足繁く通っていた。加えて、ボーヴォワールが「私のまわりでは亡命ドイツ人たちが新聞を読んだりチェスをやったりしていた。あらゆる国籍の外人たちがお互いに熱心に、しかし声をひそめて議論していた。(中略) 私たちとドームのほかの常連とのあいだには、一種の暗黙の親しさが生まれた」(『女ざかり上 ある女の回想』朝吹登水子・二宮フサ訳、紀伊

国屋書店、一九六三年五月（原著…一九六〇年）、二六三―二六五頁）とそこでの様子を記しているように、ドイツ系や東欧系の外国人たちが多く集まっていたカフェとしても知られている。たしかに「旅愁」で繰り広げられる矢代達の論争は、主に日本人同士で交わされているため、「きわめて閉鎖的な小説」だといえる。しかし、そのような討論の空間が様々な〈異言語〉が飛び交う喧騒したカフェで行われていたことは注目すべきであろう。

さて、次の引用部は久慈と東野がカフェで居合わせ、討論を交わす場面である。そこで東野は、久慈に対し次のように疑問を投げかける。

「僕は外国から来た抽象名詞といふものは、分析用には使ふけれども、人間の生活心理を測定する場合には、極力使はないやうにしてゐるのです。それは誤るだけの効果の方が多いからです。あなたは外国製の抽象名詞以外には、知識はないと思つてゐられるんでせうが、僕はそのやうな見解の知識を、いつかあなたに云つたやうに、簡便主義の知識だと思つてゐるんです。」（「旅愁（続篇）」『文芸春秋』一七卷二一号、一九三九年六月）

科学主義者だと自認し、論理や知識の普遍性を重視する久慈に対し、東野はそうした領域で使用される言葉は「外国製の抽象名詞」に過ぎないと述べ、「人間の生活心理を測定する場合」には「誤るだけの効果の方が多い」と忠言する。神谷忠孝の『「旅愁」における日本人の西洋体験に共通しているのは、文化を考える尺度がほとんど西洋にある』（「横光利一『旅愁』近代日本人の西洋体験」『国文学 解釈と教材の研究』一八巻九号、一九七三年七月）という指摘に従えば、日本語における「抽象名詞」も西洋の尺度によって創出されているのではないかという問題が提出されているのである<sup>(6)</sup>。



その後矢代が合流し、議論が継続されることになるのだが、〈異言語〉という観点から興味深いのは、同時進行で描かれる外国人客たちの描写にある。「旅愁」によると、人民戦線運動下での頻繁な罷業のせいか、カフェの中の殆どの外国人客が政治談議に花を咲かせていたという。しかも、一人でカフェにいる数人の外国人客以外は、「皆それぞれ自国語で左翼の話をしていた」という。東野はそこで、ある客の光景に目を向ける。

彼の前から見てゐた眼の異様に青い美しい婦人は、文士の主人がその傍にゐるにも拘らず、出版屋の頭の禿げた片眼の男に強く抱きかかへられてゐたからだつた。美男子の主人は、妻がだんだん強く片眼に擦りよられ嬉しげにくつくつ笑つてゐるのを、さも得意らしい薄髯顔で見ぬふりを保ちながら、平然と横の客と英語で左翼の話を聞はしてゐた。(中略) 矢代と久慈との渡り合ひ出したその後で、眼の青い女を抱きかかへた片眼は傍見もせず、しつこくかき口説きながら女の唇の傍へ自分の口をよせていつた。その傍で女の亭主は倦くまで理想主義のトロツキストを支持しつつ、現実主義のスターリン派を罵倒してやめなかつた。(「旅愁(続篇)」前掲)

ソ連の社会主義体制維持のため西欧諸国の革命が漸次必要になるというレフ・トロツキーの永続革命論を支持する文士の男が、隣の客と英語で議論しているのにも関わらず、彼の妻が口説かれてゐる状況に東野は注視する。当初東野は、そこに男性なりの風刺や狙いが込められてゐるのではないかと思ひ觀察していたが、口説いていた出版屋の男が妻に口づけをしようとしてゐる際にも、「亭主は倦くまで理想主義のトロツキストを支持しつつ、現実主義のスターリン派を罵倒してやめなかつた」。いくら普遍的な理想を語っていても、現実が起こっている妻の危機に抗することができないことが暗示されているのである。

このような店内の状況に影響されたのか、久慈は矢代に次のような発言をする。

久慈と矢代の頭も、そのアメリカ人の英語が強く響いて来て議論もばったり停つたままだったが、突然久慈は、／＼しかし、われわれから理想がとれるか。理想をとつた頭といふもので、どうして建設が出来るのだ。」と矢代にいら立たしい声で詰めよつた。（「旅愁（続篇）」前掲）

「僕らから理想がとれるか」という久慈の発言は、亭主の議論の中で示された理想と現実の問題の反論として理解できよう。ただ矢代は、そうした久慈に対し「翻訳語で理想を考へるといふのは、どういふことだ。田舎者が標準語で都会の理想ばかり考へて、死んでしまふことを云うのか」と返答する。ここでの「翻訳語」とは、東野の「抽象名詞」とも通ずる考えであろう。そうした西洋由来の「翻訳語」で自己や日本や東洋を語ることの困難さを矢代は問いかけていくのである。

以上みてきたように、矢代はアンリエットやモンパルナスのカフェでの〈異言語〉に接することにより、言語の「純粹」・「正規」性を希求していくことや、西洋由来の「翻訳語」によって自己の心理や日本を語ることへの困難さを意識し始めていくのである。

### 三 「感覚の古層」への旅

本節では、前半部までの矢代の〈異言語〉体験がどのように第三篇以降に展開されていくのかについて検討していく。かつて前田愛は『旅愁』第一・二篇が空間的な旅であるのに対し、第三篇以降は「時間の旅」だと指摘していた（『共同討議『旅愁』の意味』『国文学 解釈と観賞』四八巻一三号、一九八三年一〇月）。だとすれば、矢代が考えるイマという時代認識を押さえることが第三篇以降を解くカギになってくるだろう。矢代が抱くイマという時代認識を押さえることで、古神道を始めとした過去への傾斜、つまり「時間の旅」をより正確に測定できるからである。

まずは矢代の年齢からみていこう。矢代の父親が久木の会社に勤めていた三〇年近く前に矢代が誕生しているという「旅愁」第四篇（『文芸春秋』二二巻三号、一九四三年三月）の描写から、矢代が誕生したのは一九〇五年前後、つまり明治末から大正にかけてだと推測できる<sup>⑦</sup>。一八九八年生まれの横光よりも若干若く設定されているが、ほぼ同じ世代といっても差し支えないだろう。

矢代が生まれた一九〇五年前後は、国語化政策が推進され日本語の近代化が図られた時代だったことも重要である。イ・ヨンスクは一九〇〇年八月の小学校令改正によって、それまで読書・作文・習字の三つに分れていた教科が「国語科」の名のもとに統一されたこと、一九〇四年に刊行された第一次国定国語教科書『尋常小学読本』に「異様なまでに綿密な発音矯正がもくろまれている」点に着目し、「小学校に〈国語〉の理念が浸透したことは、〈国語〉がすべての国民によって意識さ

れるべき規範的価値となるための制度的基盤を形成したことを意味する」（『国語学』から『国語政策』へ）『国語』という思想 近代日本の言語認識』岩波現代文庫、二〇一二年二月、一七七―一八〇頁）と指摘する。矢代は物心がつく頃から、国語に接してきた世代なのである。

次に矢代の時代認識はどのように描かれているのだろうか。「旅愁」内での時代認識を追っていけば、明治・大正と昭和の間には、ある「断層」が確認でき、それが矢代の考える世代意識の差と重なり合っていくのである。それがわかる箇所を抜き出してみる。

論理が表へ立たずに道理が表へ立つて明治になったところへ、君の好きなヨーロッパの知性といふ奴が這入つて来たのだ。こ奴は分析力だから何もかも分析して、道理も感情も分析し始めたのが、大正昭和といふところだ。（『旅愁（続

篇）』『文芸春秋』一七卷一一号、一九三九年六月）

立ち対ふ態度を洋式にしてゐるうち、いつとは知れず心魂さへ洋式に変わり、落ちつく土もない、漂ふ人の旅の愁ひの増すばかりが若者の時代となつて来たのである。（『旅愁（第三篇）』『文芸春秋』二〇卷六号、一九四二年六月）

明治の初期から吹き流れて来た欧化主義の直写時代、大正の消化時代をへて、現在の日本化時代といふ、矢代らの呼吸

してゐる一期間に於てもそれは繰り返し行はれて来た歴史である。（「旅愁（第四篇）」『文学界』一〇巻一〇号、一九四三年一〇月）

「旅愁」各篇にわたり示された矢代の時代認識を約言すれば次のようになる。明治の後期までは「道理」や「感情」が機能しており、ヨーロッパから学ぶ「洋行」の時代（「欧化主義の直写時代」）であつた。しかし、大正期に入るとヨーロッパの「論理」や「知性」が侵入し（「消化時代」）、昭和期、つまり矢代達の世代に入ると、「心魂さへ洋式に変わり、落ちつく土もない、漂ふ人の旅の愁ひの増すばかりが若者の時代」（「日本化時代」）となつていくのである。特徴的なのは、「心魂さへ洋式に変わり」などの表現からわかる通り、矢代は自分たちを、既に西洋的なものが自分の認識や身体に接着してしまった世代だとみなしている点にある。冒頭で紹介した十重田は、『書方草紙』の序文での一節、「国語との不逞極る血戦時代」での「血戦」という語句の使用理由について、国語化政策を推進した上田万年の、「日本語は日本人の精神的血液」（『国語のため』富山房書店、一八九五年六月、一二頁）といった言説を参照し、「横光が「国語」との格闘を、「血」を賭した骨がらみの、身体的イメージのもとに感受していた」（「横光利一にとって「国語」とは何か」前掲）と指摘する。しかし、「旅愁」の矢代は、そのような「国語」を「身体的イメージ」として感受していたからこそ、イマ自分が使用している言語や発音は、近代以降に整備されたものに過ぎず、加えてその中に「翻訳語」が多数含まれていることを実感していくのである。つまり、イマ使用している言語体系は、過去から連綿と続いてきた言語とは異なるのでは、といった矢代の意識がみられるのである。

第三篇以降に展開される古神道への注目<sup>(8)</sup>は、このような言語観と無縁ではない。例えば、横光は吉川英治との対談において、古神道を次のように評価づけていく。

**横光** 自我といふものを古神道は重んじてゐて、しかも、精神と肉体とを放してはゐない。肉体これ即ち精神と解して  
ます。

(中略)

**横光** この頃よく言はれる、物の秩序とそれから心の秩序が分裂して来て、それで近代が困つてゐるといふ、つまりあれなんかでも、古神道といふのはね、そんなのやはり分けてない。つまり精神とは肉体だといふ解釋ですね。

(「日本の精神」『文芸』八卷一〇号、一九四一年一〇月)

近代の混迷した原因は身体と精神とが分裂したからだと横光は述べ、古神道の「肉体これ即ち精神」といった心身一元論的な思想を評価していることがわかる<sup>(9)</sup>。この対談の翌年に「旅愁」第三篇の連載が開始されるのだが、そこで開陳される「イウエ」という発話への着目は、こうした古神道の心身一元論的な思想が反映されている。

「言霊ではイは過去の大神で、ウは現神でエは未来の神のことです。ですからこの三つを早く縮めて一口に、エツと声に出してお祈りするのですが、さうすると、日本人なら誰だつて元気が満ちて来るでせう。このイといふ字とウといふ字とを大昔は石にして、勿論古代文字ですが、どこの国へも一つづつ神社の御本体として祭らせたのですね。ところ

が、淫らな形をしてあるといふ理由で、淫祠だなど云つて、引つこ抜いてしまったのです。『イウ』といふ、この二つの言霊の根本を引つこ抜いたものだから、さあ、それからは日本が大変だ。しかし、日本人は困り出すと、何のことだが分らずとも、エツといつて、元氣になつて何んだつてやつちまふ。これが生といふものですよ。」（『旅愁（第三篇）』『文芸春秋』二〇卷一一号、一九四二年一月）

吉本隆明が「涙が出るほど悲惨で滑稽である」（『横光利一』『悲劇の解説』ちくま文庫、一九八五年十二月、一九七頁）と述べたように、矢代もしくは横光の日本回帰の一端を示す悪評高い場面である。矢代は「イウエ」と発話することで「日本人なら誰だつて元氣が満ちて来るでせう」と説明する。川面凡兒は、「イウエ」という発話によつて、「始めて精神と肉体とが連結合一して、その統一的融会が出来る」（『日本古典真義』『川面凡兒全集』第一巻、川面凡兒先生十周年記念会、一九三九年八月、六六八頁）と説明している。まさに矢代の「イウエ」という発話は「精神と肉体とを連結合一」させる実践だったのである。だとすれば『イウ』といふ、この二つの言霊の根本を引つこ抜いたものだから、さあ、それからは日本が大変だ」と矢代が説明する先の場面は重要である。古代文字として消えてしまった「イ」と「ウ」をイマ・ココの身体の発話によつて、過去の人々が有した感覚を追体験していくような思考回路が読み取れる。

ところで、成田龍一は「旅愁」で登場する古神道を「日本の古層の根拠として」みなし、「対立の軸そのものが消去されていく」四〇年代的思想の象徴であると指摘している（『戦時の自画像』『旅愁』をめぐって）『横光利一研究』三号、二〇〇五年三月）。傾聴すべき指摘であるが、これまでみてきたことを踏まえれば、古神道「イウエ」の発話は「日本の古層」ではなく、むしろ市川浩が述べる「感覚の古層」を辿る実践に近いといえる。

すでに意味をもった現在の知覚の世界は、生理的に、あるいは文化的・歴史的に沈澱した意味によって、制約されている。文化的・歴史的に沈澱した意味は、慣習化され、原初的な意味を失うことによって、新しい、おおむねより抽象化された意味を析出する。(中略) 有縁性をもたない感覚の仮説的な追求は、印象派がその端緒を切り開いたように、われわれを世界との癒着的な関係から解放し、新たな世界像を生み出す。その反面この方向の純粹化が、世界とのつながりが失われたデラシネの袋小路へわれわれをみちびく可能性があることも事実である。それにたいして感覚の古層の追求は、無感動な伝統主義におち入らないとすれば、感覚の誕生の瞬間に立ち合わせ、感性の歴史を再体験させることによって、感性に生命を吹き込み、それに拡がりと呼びをあたえる。これもまた世界を再建し、世界を再創造するもう一つの道なのである。(「感覚の拡大のために 感覚についての二章」『身体論集成』中村雄二郎編、岩波現代文庫、二〇〇一年一〇月、二八九―二九五頁)

古神道の失われた文字を含んだ「イウエ」の発話によって、自身の血肉化された国語や翻訳語を脱色し、自身の身体に「感覚の古層」を再現させていくような取り組みだったと理解できる<sup>10)</sup>。

このようにみていけば、必然的に書かれた文字よりも、発話行為の方に比重が置かれていくことになる<sup>11)</sup>。なぜなら発話行為の方は身体性が伴っているからである。矢代の文字ではなく声への傾斜を端的に示すものとして女中とよの手紙の場面が挙げられる。「読み書きの出来な」かった(近代教育を受けていない)とよが「郷里の男」へ手紙を送る際に、矢代の妹の幸子に手紙の代筆を頼むのだが、そこでとよは「夢のかけはし霞みにちどり思ひかなはぬ身なれども」という歌を詠む。幸



子はその様子をみて笑い転げてしまい、「たうとうその手紙は駄目になった」。しかし、矢代はそこで次のような感想を抱くことになる。

とよの手紙のやうな文章は、僕らの時代のものには、誰も書けないんだからな。実際、個性といふやうなものが、明治の中期から日本に這入つて来て、だんだん人間が機械になつて来たので、夢のかけ橋かすみに千鳥なんて、さういふ風なものをみな消してしまった。（中略）この公園がまだ大名屋敷だったそのころのことを思ひ描いた。そして、蒔絵の文箱を持つた奥女中が矢立てに帯を結び、水際の睡蓮の傍でそつと蓋を抜いてみてゐる、その手紙の中の文章を想像した。それはおそらく、とよの手紙のやうに韻をふんだ、鳴り出すやうな人間味豊かな手紙だったにちがひないと思つた。それに今はどうだらう。自分にしても婚約のあひだの千鶴子に示す手紙に、光線の原理など書かねばならぬ時代になつてゐるのだつた。さう思ふと、とよの手紙に笑ひ転げたと同様に、自分の手紙にもそれ以上のをかしなものもあるのだらう。

（「旅愁（第四篇）」『文学界』一一卷一号、一九四四年一月）

矢代はとよのような手紙を「鳴り出すやうな人間味豊かな」と評価する一方で、標準語を駆使し、説明的な自身の手紙との落差を痛感する。そしてとよのような手紙を「僕らの時代のものには、誰も書けないんだからな」と評価づけていくのである。とよの手紙を矢代の妹の幸子が代筆（書記化）出来なかったことは象徴的である。「道理」や「感情」が機能していた世代であるとよの「韻をふんだ、鳴り出すやうな人間味豊かな」声を現代語によって書記化することの困難さが示されているのである。

これと同様のケースに、矢代が父親の郷里に行った際の老女たちとの邂逅の場面がある。矢代は父親の遺骨を奉納しに、郷里へ向かうのだが、そこで浄瑠璃口調の老婆たちと出会うことになる。

手真似までして、浄瑠璃口調の失せぬ老婆に出られたとき、まだ今ものり附いてゐさうな自分の体温に触れる思いで、彼はどきりとした。覚えのないその枯れた肩口を撫で擦つてみたくなつた。あたりに彼の体の破片が、散り蠢いてゐる風な一室になつて来てからは寺の人は遠のいて来なくなつたが、村人たちは彼の周囲でまた親戚たちの話をし始めるのだつた。（『旅愁（第五篇）』『文芸春秋』二二巻六号、一九四四年六月）

別の箇所にて、「この地方は浄瑠璃の染み入った土地とは聞いてゐた」と説明されているように、矢代はここで標準語とは異なる〈異言語〉としての浄瑠璃口調に出会うのである。館下徹志は当該場面について、「『手真似』を交えて語る老婆の浄瑠璃口調に惹き込まれた矢代は、『抱く―抱かれる』という一体化した身体の記憶を媒介にして、郷里という〈クニ〉の原初性Ⅱ時間性に触れる」と解釈する。そして館下は、老婆の言動が近代の道德や礼法からは大きく逸脱していることを押さえた後、「矢代にとって九州の郷里は、『近代』の所産にほかならない観念的に均質化された〈日本／日本人〉像を揺さぶられる異界であつた」（『横光利一『旅愁』における〈郷里〉という難題 〈クニ〉の揺さぶりが意味するもの』『日本近代文学』八二集、二〇一〇年五月）と結論付けていく。身体を媒介とした「原初性」への接近は、「イウエ」への関心のそれと軌を一にしているだろう。

#### 四 イマ・ココの言語を脱色した果てに

加藤周一は『日本文学史序説』（下巻、ちくま学芸文庫、一九九九年四月）において、近代文学者の西洋受容を次の三世代に区分している。森鷗外・夏目漱石ら留学によって西洋を知ることになった「日本郵船の世代」、芥川龍之介といった原書・翻訳書で西洋を知ることになった「丸善洋書部の世代」、そして、横光利一や川端康成ら翻訳書で西洋を知るといった「翻訳小説の世代」である。この「翻訳小説の世代」について、加藤は次のように詳述している。

大衆小説作家を除けば、三〇年代にいちばん広く読まれた小説家は、横光であったかもしれない。また彼はおそらく翻訳の西洋文学と同時代の（または近代の）日本文学のみによって養われた最初の小説家であったという意味でも、一時代を象徴していた。（中略）彼は日本語の語感において中野重治や後述する石川淳にはるかに及ばず、科学的なものの考え方には慣れず、東西の文明のいずれについても、その知識は芥川のそれとくらべものにもならなかったからである。丸善が芥川を作ったとすれば、翻訳小説の時代が横光とその読者を作った。（四六八頁）

戦前の一高在学時に行われた横光の講演の際に批判を投げかけ（『羊の歌 わが回想』岩波新書、一九六八年八月）、戦後すぐ「文学検察」（『文学時標』六号、一九四六年四月一日）にて横光の戦争責任を問うた加藤だけに、横光への評価はいささか辛いものがある。しかし加藤が指摘した通り、横光は青年期の頃から翻訳小説に親しんでおり<sup>12</sup>、新感覚派と称された

時期の作品「日輪」(『新小説』一八巻五号、一九二三年五月)が、ギュスターヴ・フロベール『サランボオ』(博文館、一九一三年六月)での生田長江訳の文体に影響を受けていることなどは既に知られているところであろう<sup>13</sup>。横光を「翻訳小説の世代」の代表者とみなした加藤の指摘は的を射ている。

さて、自身の文学を含めた価値観が西洋由来のものに培われてきたという意識は横光と同世代の文学者達にも共有されていた。例えば、小林秀雄は「故郷を失った文学」(『文芸春秋』一一巻五号、一九三三年五月)にて次のように語る。「私達はもう西洋の影響を受けるのになれて、それが西洋の影響かどうか判然しなくなつてゐる所まで来てゐるといふ事だ」。中村光夫も、近代の超克の座談会の際に提出したレポート「近代」への疑惑(『文学界』九巻一〇号、一九四二年一〇月)において、「今日僕等がそれを西洋のものと気付かぬものは、それだけ西洋の影響が深く僕等の生活に浸み透つてゐるからだ」と。現代の社会生活が汽車や郵便や電話などなしには考へられぬのは、つまり僕等の生活がこれらの事物によつて或る根本的な変化を蒙つたことの証左ではなからうか」と読者に問うていく。西洋の影響が各人において「判然しない」・「気づかない」までに浸透しているという両者の指摘は、本章でみてきたような内容とも通じているだろう。加藤の言葉を借りれば、横光ら「翻訳小説の世代」とは、西洋と日本とが混在していった世代なのであり、裏を返せばそれらを分離し対象化していくことが困難な世代だともいえる。

しかし、彼らの「翻訳化」された意識は、戦中期に差し掛かると、その「判然としない」・「気づかない」まで浸透していったはずの西洋を対象化していく作業が求められていく。つまり、自身の血肉化された意識から日本的なものを抽出するため、西洋的なものを脱色する作業を行うのである。だとすれば、「旅愁」後半部における捻じれた文体は、横光自身のビルトインされた翻訳文体から西洋的な要素を脱色しようとした結果であつたと解釈できる。未分化だった自身の身体・言語イメ

ージから、西洋的なものを抜き取っていく作業、その結果が「旅愁」における「いかがわしき」や「グロテスク」なものに繋がっていくのである。

本章では、〈異言語〉というキーワードから「旅愁」に通底するモチーフを抽出してきた。〈異言語〉としてのフランス語の接触を契機に、矢代は日本語の「純粹」・「正規」性への探求が困難なことを自覚していく。しかも、自身が使用する言語は、既に西洋由来の翻訳語が多分に組み込まれている。だからこそ、古神道やそこでの心身一元論的な思考が召喚され、「イウエ」などの現代語とは異なる〈異言語〉に惹かれていくのである。

だとすれば、本論文で度々用いてきた日本回帰という用語は、若干の修正を加えねばならないだろう。つまり、横光や「旅愁」の矢代は日本回帰へ向かったのではない。日本語回帰へ向かっていったのだと。

# 注

- (1) 「旅愁」第一・二篇と三篇以降の断絶について、例えば東郷克美は、「第二篇の雑誌連載最終回に「(終篇)」とあることや、第三篇の連載開始まで一年半以上の空白があり、その間に日米開戦があることなどを考え合わせると、帰国後の矢代を中心とした第三篇以降の物語が、最初の構想の中にあっただうかさえ疑わしくなる」(『旅愁』漂う心／漂うテキスト『国文学 解釈と教材の研究』三五巻一三号、一九九〇年一月)と、テキスト・クリティックの視点から、「旅愁」が当初の予定とは異なった問題へ向かわざるを得なかったことを推測する。また、成田龍一は「旅愁」の一・二篇が一九三〇年代、第三篇以降が四〇年代に発表された点に注目する。そして成田は、思想的三派鼎立(マルクス主義・ファシズム・自由主義)の三〇年代から、マルクス主義が失効し「二項の対立で遂行

せざるを得ない」四〇年代の同時代思潮を重ね合わせ、「横光利一、あるいは「旅愁」という作品にとって、一編・二編と、三・四・五編（「梅瓶」を含めてですけれども）、この二つの固まりの間には、ある切斷がある」（「戦時の自画像 『旅愁』をめぐる」『横光利一研究』三号、二〇〇五年三月）と看破していく。

（２） 田口律男は「旅愁」後半部で表出された「錯乱した物語言説」に着目し、「〈論理以前の論理体系〉をあくまでも〈論理〉に従って表象しようとしたために、奇妙な振れが発生した」と分析する。そのため「旅愁」には、「美しい日本」でも「世界史」的な使命を帯びた日本」でもない、「グロテスク」かつ「いかがわしい（日本）が現象している」（「いかがわしい『旅愁』の〈日本〉」『早稲田文学』二四巻六号、一九九九年十一月）と結論付けている。

（３） もちろん、「旅愁」前後半の連続性についての先行論は数が少ないものの確認できる。例えば、森本隆子は「矢代の「旅愁」に一貫して底流し続けるものは、異質なものととの遭遇を回避しようとする拒絶感、裏返せば、自己は純一でありたいという願いである」ことを押さえ、「一大長篇『旅愁』は、プロットに従うならば西欧から日本への回帰、そのことによる恋愛の成就を語っているが、それらの基層に沈む矢代の精神に読みを切りかえるならば、他者の回避と自己同一性希求の物語であったといえよう」（『「旅愁」への一視角 主題の統一的把握を求めて』『国文学研究ノート』二二号、一九八八年八月）と述べる。また、渡邊一民は、「障害を乗り越え、しかもいまは「実践」だったと認識しなおされたヨーロッパ経験、すなわち「パリとの格闘」をつうじて学んだものを生かしうる、総合的なひとつの立場を見いだすこと―それこそ二人の結婚実現のため必須の条件であり、その探究を経てひとつの立場ないし思想がついに見いだされたとき、はじめて二人の結婚は成就されるわけであった。そして以上のあげた障害がいずれも日本と西洋とを対立させる本質的問題であったことは繰り返すまでもあるまい」（「日本への回帰 横

光利一『旅愁』をめぐる『フランスの誘惑 近代日本精神史試論』岩波書店、一九九五年一〇月、二〇五頁）と考察する。両者とも、従来「旅愁」で峻別されがちであった前半と後半、または思想と恋愛という要素の統一的把握を目指している点で示唆に富む。

(4) ルイ・ジャン・カルヴェは、フランス革命を契機に「フランス語を話すことが愛国者の証」とみなされるようになった点と、方言は国民国家形成の際、「分裂の要因」に繋がりうるという懸念を生み出すことになったと指摘する（『フランスにおける言語植民地主義』『言語学と植民地主義』ことば喰い小論』砂野幸稔訳、三元社、二〇〇六年七月（原著…一九九八年）、一八九頁）。アンリエットの「純粹」・「正規」性への考えも、こうしたフランス語の真正を巡る意識が影響を及ぼしているのかもしれない。

(5) 横浜正金銀行リヨン支店に勤務していた瀧澤敬一は、当時のフランスの方言・発音・抑揚の違いの多さに触れつつも、パリのフランス語 (Île de France) は「第十二世紀以来立派な文学上の官語になつて居るのである。巴里はその富と力をもつてフランスに君臨する専制君主であるから、いくら威張られても仕方があるまい。／自分の田舎フランス語は、歌ふが如しとて巴里人からは笑はれる」（『標準語と方言』『フランス通信』岩波書店、一九三七年五月、一六九頁）と記している。

(6) 宮内淳子は、フランス語が出来なかった横光について、「体験したことのない内面の危機を感じたのではないかと推測し、次のように述べていく。「横光はパリに来て、自己を形成してきた日本語の中にある重要な語彙が、ヨーロッパ人の世界観を体现したものであることを認識し、内的な危機を感じた。日本人とヨーロッパ人の違いを見据えて、自己を建て直す必要に迫られたのである。それが彼にとっての「征欧」であった。この闘いが困難をきわめ

たのは、それだけ彼の中にヨーロッパ経由の観念が骨がらみであったからだ」（一九三〇年代・パリの日本語 横光利一・林芙美子・森三千代の場合）（『昭和文学研究』四一集、二〇〇〇年九月）。このような宮内の指摘は、「旅愁」の矢代にも当てはまるだろう。

（7） 対して、矢代の父親は作中にて七一歳と記されている。つまり、一八六七年前後の生まれ、「道理」や「感情」が機能していた明治維新前後の世代である。柳田國男は、「せめては親と子との間ぐらゐは、「今」といふ一つの心持を以て語りかはすやうにしたいものと思ふが、それも許さぬ位に東京の言葉はすぐ古びて行く」（『東京語批判』論者注…のち「東京語と標準語」と改題）『標準語と国語教育 国語教育学会叢書第二輯』国語教育学会編、岩波書店、一九四〇年九月、四二頁）として、「新陳代謝」が早い東京語を標準語化していくことに反対していた。言語という次元においても、父子間の「断層」がみられるのである。

（8） 「旅愁」における古神道について、例えば、濱川勝彦は戦後版『旅愁』においても古神道の描写が削除されず、加えて国家神道との差異化が図られている点に注目し、「第一次・第二次世界大戦で、もろくも崩れさったヨーロッパ的知性、科学主義への信仰にかわる、新しい東洋的倫理・東洋的ヒューマニズムの可能性を示している」（「旅愁」『論攷 横光利一』和泉書院、二〇〇一年三月、一九〇頁）とする。河田和子は、笈克彦やラフカディオ・ヘルン、川面凡児らの神道理解を横光が取り合わせ、「近代科学を如何に超克するかという問題」の解決を企図していたことを指摘し、「横光は、科学を否定せず、分析論的思考も総合的に捉え直していく思考基盤を古神道に求めたのであり、古神道は、そのための一つの思考装置であった」（『旅愁』における〈みそぎの精神〉と古神道）『戦時下の文学と〈日本的なもの〉 横光利一と保田與重郎』花書院、二〇〇九年三月、八五頁）と捉えている。



(9) このような知見は、座談会で横光が読んだと言った川面凡児『日本最古之神道』(稜威会本部蔵版、一九二二年九月)からも確認できる。川面は「世界列国ではいづれも、肉と心とを分ち、物質と精神とに別つ。(中略)独り我が日本には、この区別あることなし。心―精神―とは、||肉―物質―の稀薄極小なる者にして、肉―物質とは―心―精神―の膨張堅実なる者に過ぎず」(一四―一五頁)と説明している。

(10) 矢代の「イウエ」の発話という実践は、酒井直樹が指摘する「起源への同一化」を希求するモデルケースともいえる。酒井は「演技として学ばれる純粹日本語は、儀式の体系に近いもの」だとみなし、次のように考察する。

この実践系では、純粹日本語は学ばなければならない統一体として与えられ、すでに身に付いているものとしてではなく、これから、未来に向かって学習しなければならないものとして構想されるのである。このかぎり、純粹日本語は、一八世紀の日本語論者にとってひとつの外国語と変わらないことになる。外国語は、その発音・統辞法なども物まねすることなしには学ぶことはできない。しかし、こうして真似び||学ばれる日本語は、同時に失われた本来性として提示され、失われた「われわれ」の本来的な共同性を「真似び」においても保証するものとして構想されるのだ。だから、日本語の死産には、外国語としての日本語を「自ら」の物と錯誤しつつ、学習し身に付ける、実践的な規範があらかじめ内在していると考えなければならないだろう。／ここには、国民語の生成の基本条件が提示されている。国民語は、国民という統一体がそうであるように、仮設され、未来に向かって制作されなければならないものとして、構想される。しかし、そうして投射された未来の目標へと至る軌跡は、喪失された本来性への回帰、自らの生の深部に宿る起源への同一化、の過程として空想される。

(「死産される日本語・日本人 日本語という統一的制作をめぐる(反)歴史的考察」『死産される日本語・日

本人 「日本」の歴史 地政的配置』新曜社、一九九六年五月、二〇五―二〇六頁）

「イウエ」が過去―現在―未来を繋げていくという矢代の説明とそこに内在する欲望は、このように説明できるのである。また、パリの〈異言語〉体験の際に確認した矢代の「純粹」・「正規」性へのこだわりも、このような発話の形によって結実していくのである。

(11) 発話行為への注目は、座談会での横光の発言からも確認できる。

書く言葉としては標準語といふやうなものは今はありませんけれども、話す言葉の標準語といふものは一つより外ないやうに思ふのです。例へば東京の人が東京語で話をして居るのを聞いて居りますと、やはり東京語といふ方言を使つてゐて、絶対にその正しい標準語といふものを話す場合には話してゐないし、又さういふものを顧みてゐないのだと私は思つて居ります。（中略）話す方の混乱といふのは混乱以上に混乱して居ると私は思つて居りますから、今の所何ともお答へ出来ないと思つて居ります。（座談会「放送座談会 国語と現代人の言葉」『放送』九巻一号、一九三九年一月）

(12) 例へば、横光は「ストリンデルヒと鰻」（『文芸の先駆』二巻三号、一九二五年三月）内で、自身の文学体験の来歴を語っていくのだが、そこで登場する作家の殆どが海外文学者であつた。

(13) このほかにも、渡邊一民は、新感覚派作品がポール・モーラン『夜ひらく』（新潮社、一九二四年七月）に影響を受けているという通説を検証した結果、影響を与えたのはモーランではなく、むしろ翻訳者であつた堀口大学の文体であつたことを論証している（『文学としての翻訳 「夜ひらく」考』『文学』四八巻一二号、一九八〇年二月）。

## 第六章 それでも最期は微笑を浮かべて

### ——横光利一「微笑」論——

#### 一 苦しい表情から零れ落ちる微笑

一九四七年十二月三〇日午後四時一三分、横光利一は家族に見送られながら息を引き取った。横光の担当医であった柴豪雄によると、胃潰瘍と腹膜炎の併発が死因だったという（「横光さんの臨終」『別冊文芸春秋』六卷、一九四八年四月）。中山義秀は横光の死去の翌日、横光邸を訪れた時のことを次のように回想している。「横光は顔をしかめ、苦しい表情で死んでいた。それほど病気の苦痛がひどかったのか、それとも招かざる死神に、最後まで抵抗して闘ったのか、つきぬ憾みと執念とを、まざまざとこの世にとどめているような、いたましい死顔であった」（『台上の月』新潮社、一九六三年四月、二七二頁）。

横光にとつての戦後は、敗戦から亡くなるまでの二年四ヶ月足らずであった<sup>(1)</sup>。横光の年譜を紐解けば、この間大きく分けて二つの仕事を行っている。一つ目は戦後版『旅愁』（第一―四篇、改造社、一九四六年―七月）の改稿作業<sup>(2)</sup>、もう一つは疎開先の体験を記した『夜の靴』（鎌倉文庫、一九四七年一月）に関する諸篇の執筆である。特に最初に挙げた『旅愁』の

改稿作業が横光の体調を悪化させ<sup>(3)</sup>、また戦後に一変する横光評価と相まって、中山のいう「苦しげな」、また「いたましい」死顔へ繋がっていくことになる。

もちろんここでの横光評価の変化とは、戦争責任のことを指している。小田切秀雄「文学における戦争責任の追求」(『新日本文学』一卷三号、一九四六年三月)で名指しされた二五名の内の一人として横光の名前があることは既に知られているところであるが、さらに踏み込んで横光個人の戦争責任に言及したものとして、加藤周一の「文学検察」がある。

敗戦以来、言論の背後に権力とその犬共とのない自由な空気の中で、我々は「小説の神様」が、「知性の作家」が、そして大東亜文学者大会の宣言の華々しき起草者が、過去と現在とに就いて語るのを待つてゐた。何故今日まで沈黙を続けてゐるのか。何故世界主義の流行の中で、「東洋と西洋」「心理と論理」「科学と精神」——或はそれに類する幾つかの意味ありげな対句に就いて語らないのか。(『文学検察(五) 横光利一』『文学時標』六号、一九四六年四月一日)

加藤は、戦前の「旅愁」に代表される横光の問題意識をなぜ戦後においても問おうとせず、沈黙を貫くのかと疑問を呈す。横光の戦前の文学活動に対する弁明を期待していると同時に、戦後になって横光が主張するような問題はもはや通用しないという反語的意味も含意されているよう。

こうした横光批判の極北ともいえるべきものは、やはり杉浦明平「横光利一論 「旅愁」をめぐって」(『文学』一五卷一一号、一九四七年一月)だろう。百数本ある「旅愁」論の中で恐らく最も引用されたであろう文章であるが、そこで杉浦は「旅愁」を「痴呆の書」、登場人物の矢代を「早発性痴呆」とみなしていく。そして批判の矛先は作家横光にも向けられ、「こういう狂

人が瘋癲院に押込められず白昼の街路を横行」したわけは、偏に「日本帝国主義に尽すことが出来た」からだとし、「旅愁」其他幾巻の書物の障子を立てることによって日本人民から科学的に思惟し良識を以て歴史を見透すことを妨げ、狂乱の戦争へと狩り立てるのに役立った」と指摘する。激烈な批判である。

本章で取り扱う「微笑」はこうした時代状況の中、執筆されたのである。「微笑」の原稿自体は既に鎌倉文庫の編集者木村徳三に手渡されており<sup>(4)</sup>、横光の死去の翌月、一九四八年一月の『人間』に作品が発表されることとなる。ただ当該号の奥付をみると、発行日が一九四八年一月一日となっており、また編集後記にも横光の死は言及されていない。新年号として満を期した横光の新作であったはずが、結果的に遺稿となってしまったのである。

「微笑」は戦前から書き続けられてきた（梶もの）という梶＝横光を思わせる人物が登場する作品群の一つであり、何より同作品中に梶が「旅愁」を書いているという文言が登場する。また、作品内時間は戦中期から戦後にかけてである。これらの要素に加え、『旅愁』の改稿作業を経て「微笑」を執筆したという経緯<sup>(5)</sup>を押さえれば、「微笑」はまさに加藤が要求するような説明責任に答える可能性を有していることがわかってくる。

たしかに、戦後の横光は体調を崩し、また文壇からの攻撃によって苦々しいものであったに違いない。中山が「苦しげな表情」や「いたましい死顔」と形容したのにも納得がいく。しかし、青野季吉が「告別式の日にくくと、無理してこの作品をかいたことが、死を早めた一因らしい」（『文学通信』『現代人』一卷三号、一九四八年三月）と語っていたように、そのような「苦しげな」表情の中から、「微笑」が生み出されたのである。以上のような問題意識を有しつつ、「微笑」で提出された問題について考えていきたい。

## 二 書き変わる栖方

「微笑」を考えていく際に欠かすことができないのは、やはり栖方という人物の存在であろう。タイトルである微笑を浮かべるのがこの栖方であることはもちろんのこと、主人公である梶は、絶えず栖方の言動に対し思惟を巡らせていく。数学の天才でありつつも俳人高田の弟子で俳句を嗜む栖方を神谷忠孝は「科学と自然の両方に関心をもたざるを得ない近代人の象徴」（『科学と狂気 「微笑」』『横光利一論』双文社出版、一九七八年一〇月、一二九頁）と捉えている。「旅愁」からの横光の問題意識が投影された人物として造形されているのである。そこで本節では、栖方という人物を起点として、「微笑」という作品の特異性を措定していきたい。

まずは栖方のモデルについてである。若干二一歳で帝国大学（一高出身者であることから恐らく東京帝国大学だと思われる）に進学し、アインシュタインの相対性理論の間違いを指摘した学位論文を提出しようとする数学の天才であり、同時に海軍に引き抜かれ殺人光線の開発に従事<sup>⑥</sup>している栖方は、一見すると現実味に欠ける人物である。しかし、横光の周囲の証言によると、栖方のモデルはたしかに存在していたという。例えば、井伏鱒二は一九四四年一〇月頃、横光に会った際、「ある奇妙な青年について詳細にわたって話した。いまその話を、そのままここに書かうとすれば、「微笑」の全文を写し取るのが適切である。そんなに「微笑」の内容と一致してゐた」（『埋草』『横光利一全集 月報』一七号、改造社、一九四九年一〇月）、鷺尾洋三は「モデルになった青年にはついで会ったことはないが、横光さんは好んで僕に、その青年の話をして聴かせた」（『素朴と誠実さ』『横光利一全集 月報』九号、改造社、一九四八年十二月）とそれぞれ回想している。

なるほど、たしかに井伏・鷲尾両者の証言から、栖方らしき人物は実在し、横光と交友関係にあったことは間違いないだろう。その体験が「微笑」執筆の要因であることもわかった。しかし、栖方に関する多くの固有名が作品内に刻印されているにも関わらず、実在のモデルを特定するには困難が伴う。例えば、栖方が提出した相対性理論に関する学位論文や、『帝国大学新聞』に掲載されたという小説「傘屋の娘」について、実際に調査を行ってもそれと思わしき文章は管見の限り見つけれない<sup>(7)</sup>。特定できうる固有名の多さに比して、栖方の痕跡を辿ることが出来ないのは少々気にかかる。

ただ、調査の過程で横光の弟子の一人であった石川桂郎が興味深い証言をしていることがわかった。次の引用部である。

「鶴」投句者である伊豆三郷と親しくつき合っていて、三郷の弟子に斎藤という帝大の学生がいた。俳号をたのまれて私は栖方と名付け親になったが、その栖方は海軍少尉の軍服を着、短剣をさげていた。先生の晩年の小説「微笑」の主人公が栖方になるわけだが、彼はしきりと横光先生に会いたがった。「微笑」を読んだ人達には説明するまでもないが、ある種の電光発射機を発明し、その光線に当たった敵機、軍艦など一瞬にして破壊されるという。現に伊豆三郷たちの横須賀句会へあつまる人達の中に、海軍の高級事務官がいて栖方の発明の話に同調していたのだ。／いよいよその電光発射機が実物され、二階級特進の栄誉を得、天皇の御前でお言葉までいただいたと言い、二十歳そこそこの栖方が大尉の襟章をつけているのを私も見ている。(中略)丁度私の店へたずねてきた栖方を連れて、ある日、先生にお目にかかる、軍人らしい正しい礼のあと、いきなり、先生の表札がどれくらい盗まれましたか、私は四枚持つております、と放言し、つづいてアインシュタインの相対性原理について臆することなく先生と論議をかわす。(「回想の文学歴遊」『俳句』一八巻二号、

一九六九年二月)

同資料によると、後日横光と石川は、栖方の案内で水交社へ昼食を食べに行き、その夜には横須賀の氏家衛（俳号・英茸雨）

宅で俳句会が行われそこで一泊したこと、翌日は三笠艦に登ったことなどが回想されている（横光と栖方が一緒になった写真も添えられている）。同様のエピソードは、石川の「一ト匙の砂糖 横光利一断章」（『俳句』八巻一号、一九五九年一月）においても披露されている。ここから、「微笑」に登場する俳人高田のモデルは石川桂郎であることもわかる。これらの資料については、既に八木泉「横光利一と石川桂郎 叱られ続けた弟子」（『横光利一と鶴岡 21世紀にむけて』井上明芳・佐藤俊和編、横光利一文学碑建立実行委員会、二〇〇〇年九月）にて紹介されているため、論者が新しく発見したものではない。ただ数ある「微笑」論において、井伏・鷺尾兩人の証言のみが援用される一方、石川の証言は等閑視されてしまっているため、議論の俎上に上げる必要があるだろう。特に「微笑」の作品生成を考えるにあたり、次の石川の証言は重要だからである。

栖方の話一切が嘘偽とわかつたのは終戦直前だった。（中略）自己弁護になるが、終戦後、私はそのことで、栖方のことで横光先生を訪ね、お詫びしたことがある。／「みんな夢をみていたんですよ。しかし栖方君の、あの微笑を思い出して見給え、今日だつて僕達は一緒につられて笑いたくなる。ねえ君イ、そうじゃないですか……」／ひとこと言われたただだった。（「回想の文学歴遊」前掲）

いままでの栖方の話一切が嘘偽だったのである。どうやって栖方が海軍の制服や襟章を用意し、水交社へ出入りしていたのかは定かではない。しかし、栖方というトリックスターの話に関心を持ち、戦後それが嘘だとわかっていながらも、横光は彼



を題材にして「微笑」を執筆したのである。興味深いのは、栖方の一連の話を嘘だったと一蹴せず作品化した点にある。ただ「微笑」の梶は、栖方の話を本当だとも信じていない。「微笑」を確認していけば、「これは眼前の事実であらうか、夢であらうか」、「すべて真実だと思へば真実であつた。嘘だと思へばまた全く嘘に見えた」、「彼の云つたりしたりしたことは、あることは事実、あることは夢だったのだと思つた」といった梶の混乱した栖方への認識が繰り返し描かれている。栖方に対してもこうした傾向は当てはまる。例えば、梶が数学者クロネッカーの「夢の中で考へついたといふ、青春の論理」の話をした際、栖方は朝起きたら机に計算式が数多く書かれていたが、記憶になかったと言う。「微笑」では栖方と彼の話が嘘か本当か、または夢か現実かといった要素が混在した中で展開されていくのである。黒田大河は戦時下の政府の情報管理の老獪さを踏まえ、「何が真実で何が嘘であるかが見えないような時空がそこに成立していた」（『「微笑」論 横光利一の戦中・戦後』『横光利一とその時代 モダニズム・メディア・戦争』和泉書院、二〇一七年三月、二九九頁）と指摘しているが、モデルである栖方という次元からも、同様の問題が考えられるのである。嘘―真実、夢―現実のどちらにも収斂せず、むしろ混在させた中にこそ「微笑」の特異性が認められるのである。

このようにみていけば、自ずと「微笑」の論点がみえてくるだろう。つまり、「微笑」がどのようにしてモデルであつた栖方の嘘を取り込み作品化していったのか、作品構造や脚色のされ方、栖方の話をどのように梶が受け取ったのかという問題である。

例えば、「微笑」の最終部にて言及される新聞記事がその好例だろう。梶は栖方の発狂死を戦後すぐの新聞記事によって知ることになる。「微笑」では次のように説明されている。「技術院総裁談として、わが国にも新武器として殺人光線が完成されようとしてゐたこと、その威力は三千メートルにまで達することが出来たが、発明者の一青年は敗戦の報を聞くと同時に、口惜

しさのあまり発狂死亡したといふ短文が掲載されてゐた」。実際の記事は『読売新聞』一九四五年一〇月二八日朝刊に発表された「千米隔て兎を殺す／B29撃墜へ利用も考へた／」日本の殺人光線”語る八木博士”だと思われる。そこには次のように書かれている。

日本の殺人光線は「九十呎の距離で僅かに人間に眩暈をおこさせる程度のものだ」と言ふ報告は誤りらしい、日本の科学者たちは人間殺害も十分可能であることを証言してゐる、たゞこの武器は人間に対しては実験されなかったのだ、元技術院総裁八木秀次博士の云ふ処によると／”殺人光線”を実験中だった一科学者はその光力のために遂に発狂して了つたし、八木博士自身も発振機の試験中に足と口にひどい熱気を感じたとも言つてゐた

殺人光線に関する八木秀次の談話はこの他にも散見されるが、科学者の発狂に関する言及があるため、恐らく横光はこの記事を読んだのだろう。横光は実際にあつた記事を借用することで、真実性を装いつつ作品世界を構築していったのである<sup>(8)</sup>。前章でみてきた「微笑」に散りばめられた固有名の多さも、栖方の話を空想的なものとして一蹴されないようにした工夫の結果だといえる。重要なのは、実際の記事には科学者が実験中に発狂したとしか書かれていなかったのが、「微笑」では実験中ではなく、日本の敗戦によつて栖方が発狂死したと書き変えられた点にある<sup>(9)</sup>。栖方の死の脚色のされ方からも、戦中戦後という時代相が「微笑」の作品構成に影響を及ぼしていることが予想される。そこで次節では、こうした時間軸を留意しつつより作品を具体化させていく。

### 三 戦後は冷笑する

戦中戦後という時代意識の差は「微笑」の冒頭部から示されている。「微笑」の作品構造が回想形式を採用していることはもちろんだが、内容の次元においても両時代の断層が読み取れるのである。少し長くなるが冒頭部を引用してみる。

次の日曜には甲斐へ行かう。新緑はそれは美しい。そんな会話が擦れ違ふ声の中からふと聞えた。さうだ。もう新緑になつてゐると梶は思つた。季節を忘れるなどといふことは、ここしばらくの彼には無いことだつた。昨夜もラヂオを聞いてゐると、街の探訪放送で、脳病院から精神病患者との一問一答が聞えて来た。そして、終りに精神科の医者 of 記者に云ふには、／「まア、こんな患者は、今は珍らしいことではありません。人間が十人集れば、一人ぐらゐは、狂人が混じつてゐると思つても、宜しいでせう。」／「さうすると、今の日本には、少しをかしいのが、五百万人ぐらゐはゐると思つても、さしつかへありませんね、あはははははは——」／笑ふ声が薄気味わるく夜の燈火の底でゆらめいてゐた。五百万人の狂人の群れが、あるいは今一斉にかうして笑つてゐるのかしれない。尋常ではない声だつた。／「あはははははは……」／長く尾をひくこの笑ひ声を、梶は自分もしばらく胸中にゑがいてみてゐた。すると、しだいにあははははがげらげらに変つて来て、人間の声ではもうなかつた。何ものか人間の中に混じつてゐる声だつた。／自分を狂人と思ふことは、なかなか人にはこれは難しいことである。さうではないと思ふよりは、難しいことであると梶は思つた。「傍点は論者が打つた」

繰り返される「今」という言葉からもわかる通り、戦後という時空間が強調されている冒頭部である。それに伴い、「次の日曜には甲斐へ行かう」と会話する人達と梶の時間意識の差も象徴的である。季節の変化に気づき、次の日曜日の予定を計画するいわば未来志向の人々とは異なり、梶は「季節を忘れるなどといふことは、ここしばらくの彼には無いことだった」とあり、なぜか季節の変化に気付くことはなかった。そうした気づきから昨夜のラジオ放送、そして栖方に関する回想へ繋がっていくことを踏まえれば、梶は戦後に生きる周囲の人々とは異なり過去、具体的にいえば戦時中の記憶に引きずられている人物だといえる。だからこそ、イマ・ココの季節の流れに立ち遅れているのである。

栖方の回想の契機となった探訪ラジオもこうした要素に深く関わっている。上林暁は、このラジオ番組は実際に一九四七年の新緑の頃に放送されたものであることを指摘し、そこでの内容を次のように記している。「国際タイムス」という新聞のラジオ評者は、狂人をバカにしたような放送員の態度を、非人道的であるとして、痛烈な憤りを浴せていた。／しかし「微笑」の作者は、そういうことには少しも関心なく、放送員の「あははは」という軽薄な笑いから、「げらげら」を変える無気味な笑い声だけを感じるのである」（「死をめぐる観念」『東京新聞』一九四八年二月三日）。このラジオ番組のモデルは、一九四七年七月二五日〔<sup>①</sup>〕に放送された「社会探訪「松沢病院」」〔<sup>②</sup>〕だと思われる。日本放送協会編『ラジオ年鑑 昭和二十三年版』（日本放送出版協会、一九四八年十二月）には、次のような説明がある。

社会探訪——社会の明暗の実態をドリルの逞しさで探索して話題を投じたこの種目は、五月五日世相録音として初めて登場し、七月第一週から社会探訪と改題した。大衆の知らない世界に伸びたマイクコードがお座敷放送の型を破つて、回を重ねる毎に、異色ぶりを発揮した。（中略）母と夫と子を失った引揚者の婦人患者が、私は狂人ではないと言い張りなが

ら語る言葉が何時しか錯乱する「松澤病院」の哀れさ。(五五頁)

モデルとなったラジオ番組に登場した患者が「母と夫と子を失った引揚者の婦人患者」だったのである。精神障害者に関する厚生省の実態調査が一九五四年からなので、この時期の正確なデータを知るのは難しい。だが、精神病院に入院経験を持つ紀野親二の指摘、「戦前、日本には三百人に一人の割合で精神病者がいた。ところが、戦後は、総計四十万人以上に精神病者が累加したと云われている。即ち、百九十五人に一人の割合ということになる。戦争が人類の不幸であることは、狂人を作り出す一事においてさえも、かくの如しである」(「あとがき」『狂人の世界より帰って 精神病全快者の手記』照林堂、一九四八年一月、二三一頁)や、「世に所謂「松澤行き」と称号を与えられる名誉の士は、約四十万いるという。「一寸イカれている。ノオテン・ホワイラ」といういかゞわしいのを加算すると、実に百万に上るという。要するに人口八千万として、十三人に一人弱の割合で「一寸イカれた」のが、全国にバラ撒かれている」(本誌特派記者「秘境 松沢病院探訪記 忘却の天国「松沢」は嗤っている」『ウイंक』一九四八年二月)といった同時代資料から、戦争によって精神病患者が顕在化されていた時代だったとひとまずは言えるだろう。しかし上林の証言によると、そのような患者に対し、「バカにしたような放送員の態度」があったという<sup>(12)</sup>。ここで示されているのは、戦争被害者を嘲笑しようとする姿勢である。栖方への回想のきっかけは、ラジオから流れた狂人という話題だけではなく、そこに内在された戦争や被害者、並びに彼らを顧みない戦後に生きる人々へ向けた懐疑があったのである<sup>(13)</sup>。

ただここで重要なのは、上林の指摘通り、放送員への怒りの方へ梶が向かっていない点にある。梶はラジオから聴こえる笑い声を胸中に思い描き、「しだいにあはははがげらげらに変わって来て、人間の声ではもうなかった。何ものか人間の中に混じつ

てゐる声だった」と感じ、栖方の回想に至るのである。石川巧は、こうした笑いの変容が、「狂人」ではなく「記者」から発せられている点に特徴があるとし、「そこには理性と狂気をめぐる揺らぎがある。「狂人」を笑う者が「狂人」以上の「狂人」に見えてしまうような倒錯がある」（『師／弟小説としての「微笑」 栖方の微笑はなぜ「美しい」のか』『敍説Ⅲ』一七号、二〇二〇年一月）と指摘する。常人と狂人を倒錯させようとする志向は、まさに前章で確認してきた嘘と真実を混在させていく作品の特徴と通底しているだろう。

このようにみていけば、栖方への回想部分で登場する〈排中律〉がさらに意味深いものとして捉えることができる。「微笑」において、〈排中律〉は次のように説明されている。「同一の問題に真理が二つあり、一方を真理とすれば他の方が怪しく崩れ、二つを同時に真理とすれば、同時に二つが嘘となる。そして、この二つの中間の真理といふものはあり得ないといふ数学上の排中律の苦しみ」。嘘と真実、狂人と常人という二項対立的な要素が提出されつつも、しかし一方に偏ってしまうことは、他方を排してしまうことに繋がってしまうという問題に梶は関心を向けていくのである。

では、そうしたジレンマに対する方策はあるのだろうか。それが暗示されている箇所として、梶が栖方に〈排中律〉の話題を振った場面が挙げられる。

「君、排中律をどう思ひますかね、僕の仕事で、いまこれが一番問題なんだが。」（中略）すると、栖方は、「あッ、」と小声の叫びをあげて、前方の棚の上に廻転してゐる扇風機を指差した。／「零点五だッ。」／（中略）「あの扇風機を中心は零でせう。中の羽根は廻つてゐて見えませんが、ちよつと眼を脱して見た瞬間だけ、ちらりと見えますね。あの零から、見えるところまでの距離の率ですよ。」

一見すると、栖方は梶の質問に答えていないように見えるのだが、ここでの「零点五」という小声の驚きと、「ちよつと眼を脱して見た瞬間だけ」見える扇風機の羽根への注目は、〈排中律〉への象徴的な解答として理解できる。先で引用した石川巧は当該場面について、「〈0〉と〈1〉のせめぎ合い、あるいは、二つの要素が混じり合っている状態」（『師／弟小説としての「微笑」』栖方の微笑はなぜ「美しい」のか）前掲）だとみなす。この他にも例えば、位田将司は「視線と視線の移行の中でしか発見されない」羽根の回転運動に着目し、それは「あらかじめ観察者の視線を待ち構えているような、固定された対象ではなく、視線と視線の移行の内に、「ちらり」と「瞬間」的に発見される」（『微笑』という「視線差」）「排中律」について「『感覚』と『存在』 横光利一をめぐる「根拠」への問い』明治書院、二〇一四年四月、二七九頁）ものだと思えば、金泰暲は「中心と周縁の二項対立に支持される「羽根」は、それから「ちよつと眼を脱して見た」その瞬間、「ちらりと」だけ、比較と発展主義の幻想から目覚める。「零点五」の思考こそ、「排中律」的な二項対立を脱構築する道として、最後に提示された「言葉」であつたろう」（『むすびにかえて 敗戦後の横光利一文学』『横光利一と「近代の超克」』『旅愁』における建築、科学、植民地』翰林書房、二〇一四年十二月、一九九頁）と考察する。論者もこのような指摘に概ね首肯する立場であるが、あえて付け加えるならば、こうした「零点五」的思想の射程が、イマ・ココにおける戦後空間にも向けられている点にある。「微笑」の最終部では、栖方の微笑とイマの時代状況が対置されていく。

それ「論者注…栖方の微笑」はいまの世の人たれもが待ち望む一つの明哲判断に似た希望であつた。それにも拘らず、冷笑するがごとく世界はますます二つに分れて押しあふ排中律のさ中にあつて漂ひゆくばかりである。

ここでの「冷笑」という言葉は、冒頭部のラジオで流れて来た患者に対する嘲笑と対応している。戦後特有の「冷笑」は、自身と異なる世界・属性の人達を排する笑いだと解釈することができる。しかし、嘘と真実、夢と現実、狂人と常人が混在し、かつ両者の狭間で揺れ動く栖方の微笑は、そのような二項対立の合間に「ちらり」と見えるものであり<sup>(15)</sup>、もう一方を排する笑いではない。だからこそ、「冷笑するがごとく」争い続ける世界の中で、栖方の「微笑」は「明哲判断に似た希望」となりえるのである。

#### 四 微笑を失えば不正となる

戦時下に近代の超克の座談会に出席し、日本浪漫派の中心的人物であつた亀井勝一郎は、戦後「微笑について」というエッセーを発表している。本エッセーは、戦前に刊行された『大和古寺風物誌』（天理時報社、一九四三年四月）の改訂増補版（養徳社、一九四五年十二月）の際に書き下ろされたものだが、亀井はそこで日本の敗戦の理由を「微笑の喪失にあつた」と述べ、次のように持論を展開していく。

私はこの言葉によつて何を求めてゐたか、必ずしも口辺に浮んだ微笑のみではない。精神の或る健全な姿を求めてゐたのだ。おのづから、繊細な心、深い思いやり、隠れた愛情、慈悲、柔軟性、様々の表情を微笑といふ一語にふくめて、こ



れを戦乱の巷に求めてゐたのであつた。(中略)常に正しいことだけを形式的に言ふ人、絶対に非難の余地のないやうな説教を垂れる人、所謂指導者なるものが現はれたが、これは特定の人物といふよりは、強制された精神の畸形であつたと言つた方がよい。精神は極度に動脈硬化の症状を呈したのである。言論も文章も微笑を失つた。正しい言説、正しい情愛といへども、微笑を失へば不正となるのだ。正しいことを言つたからとて、正しいとはいへないといふ微妙な道理をいやになるほど痛感した。(二一八―二二〇頁)

亀井は、小田切秀雄「文学における戦争責任の追求」(前掲)の中で、横光と同様戦争責任者の一人として名指しされた人物なのだが、こうしてみると亀井と横光、どちらも戦後に微笑の問題を考えていたことは興味深い<sup>(15)</sup>。ただ、亀井は戦時下に、横光は戦後になって微笑が喪失したと考へている点は大きな違いである。横光が戦後になって微笑(＝栖方)が喪失したと判断したのは、まさしく本章で考へてきた戦後という時代状況が影響を及ぼしているだろう。「微笑」の原稿を受け取った木村徳三は当時の横光の様子を次のように回想している。「戦争中の作品傾向を顰蹙、憫笑する作家・評論家が横行し、少し前まで長篇「旅愁」に感激した読者もそれを口にしなくなっていた。(中略)横光さんはすっかり寡黙になり、笑みを失なつた顔色は疲れ切つた蒼黒さに沈んでいた」(『文芸編集者の戦中戦後』大空社、一九九五年七月、六一頁)。戦後版『旅愁』の改稿作業を通して、また度重なる文壇からの「憫笑」を伴つた糾弾により、横光は戦後になって「言論も文章も」、そして自分自身も微笑を失つたのである。しかしだからこそ、イマ・ココの戦後社会に向け、「微笑」を浮かべる必要があつたのである。

もちろん、横光は戦後を否定し戦前に回帰しようと思つていたわけではないだろう。これは、戦後発表された「紅い花」(『女性改造』創刊号、一九四六年六月)からもうかがえる。

私たちは誰も自分を善人だとは思ってゐないだらう。また自分を悪人だと思ふ度胸も持ち合せてゐないにちがひない。しかし、自分はそんなことを思はずとも、人が自分を一眼見た瞬間、多くのものは、これは善人、これは悪人、とどちらかの一方へ直ちにその場で押し込めてしまふものだ。いかにそれに反抗しようとも、ひそかに黙つて、さうして獄に入れられてしまへば、私たちはそこから脱出することは出来ぬものである。(中略) かういふ場合、知識階級とは、自分を自分の手で獄に入れるものをいふのである。自分を自分の手で獄にも入れぬものは、悪人たる資格はない。と、そのやうに一度は親鸞も考へたことだらう。

自分自身や他者を「善人」か「悪人」かに峻別してしまう人間の心理を説明しつつも、横光は親鸞の悪人正機説を参照し、知識階級は「自分を自分の手で獄にも入れるもの」だと述べる。つまり、知識人は自分自身を「悪人」かもしれないという意識の必要性を戦後において問おうとしているのである<sup>16</sup>。

冒頭で紹介した杉浦明平は、横光を「こういう狂人が瘋癲院に押し込められ」なかったのかと批判していたが、その後も続けて「横光の全作品は精神病理学研究者に博士論文の好資料を提供する役にしか立たなくなつたのである」(「横光利一論」「旅愁」をめぐつて) 前掲) と述べていく。横光を「狂人」と措定し「戦争中の作品傾向を顰蹙、憫笑」する批評家の一人に数えられたであろう杉浦の批評態度は、「微笑」で登場するラジオ番組の医者や放送員の姿と被つてみえてくる(「微笑」での「梶は自分も少しは彼に伝染して、発狂のきざしがあつたのかもしれないと疑はれた」は、梶Ⅱ横光Ⅱ「狂人」といった戦後の横光評価を逆手に取った表現なのかもしれない)。ただ「紅い花」の理路に従えば、こうした杉浦の横光への糾弾は、横光を「悪

人」という「獄」に閉じ込めることで、批判者自身の「善人」性を補強する行為ともいえる。横光は、自分自身を無謬の「善人」だと固定化していかうとする戦後知識人たちへ批判を向けていくのである。

たしかに、語気や表現が強烈であるものの概ね杉浦らの横光批判は「正しい」。戦時下の作品や発言などを概観してみれば、やはり横光の文学活動は「狂乱の戦争へ戦争へと狩り立てるのに役立った」と言わざるを得ない<sup>17</sup>。またこうした杉浦らの横光批判が、戦後の文学の再起動のために必要であったことも想像に難くない。しかし、戦時下を「狂った」時代として、また横光を「悪人」として断罪・冷笑するだけでは「世界はますます二つに分れて」いくだけである。だからといって、横光を「善人」だったと救済していくことも同じ陥穽が待ち構えているだろう。必要なのは、狂いと正常、夢と現実、善と悪などの狭間で揺れ動く戦中戦後という特異な時代を、「零点五」の地点から扇風機の羽根を捉えるように、その瞬間瞬間を掴み取っていくしかない。そうした知的営為の中からでしか、横光の「旅愁」から続く問題系を捉えることは出来ないのである。まさに「正しい言説、正しい情愛といへども、微笑を失へば不正となる」のである。

戦後、徐々に「苦しげな表情」になっていった横光は、それでもなお微笑を浮かべようとしていた。横光が最期に残したその「微笑」は、戦中から戦後そしてイマ・ココに生きる我々にも届きうる光線なのである。

注

- (1) もちろん、佐藤卓己『八月十五日の神話』（ちくま新書、二〇〇五年七月）。佐藤卓己・孫安石編『東アジアの終戦記念日 敗北と勝利のあいだ』（ちくま新書、二〇〇七年七月）などが正しく指摘するように、戦後という時代は八月一五日を境に明瞭に区分できるものではなく、絶えずゆらぎが生じていたことは言うまでもない。ただ、横光は

ポツダム宣言受諾翌日から始まる『夜の靴』（鎌倉文庫、一九四七年一月）の「あとがき」にて、「終戦の日から自宅に帰る日までの、およそ百ヶ日間ほどのこと」（二四九頁）と記していることから、横光にとっての「終戦」意識は、八月一日を起点にしているといえる。

(2) 『旅愁』の改稿作業とはもちろん、GHQ/SCAP (General Headquarters/Supreme Commander for the Allied Powers) による事前検閲のことである。一連の検閲の経緯と内情については、すでに十重田裕一の詳細な研究、例えば「せめぎ合う占領期事前検閲と改造社文芸出版 一九四五―四六年・横光利一『旅愁』を中心に」（『日本文学』六四卷一一号、二〇一五年一月）、「占領期メディア検閲と横光利一『旅愁』 プランゲ文庫所蔵の校正刷からの照明」（『文学』一七卷六号、二〇一六年一月）などがあるので、そちらを参照されたい。

(3) 由良哲次の証言（井上謙『横光利一 評伝と研究』おうふう、一九九四年一月、四六九―四七〇頁）によると、横光の健康不調は既に戦時中からその影を落としていたようだが、症状が悪化するのには『旅愁』の改稿作業の時期からだと思われる。戦後版『旅愁』の編集を手掛けた木佐木勝の『木佐木日記』（四卷、現代史出版、一九七五年一〇月）によると、『旅愁』第一篇改稿後の一月一五日には「憔悴が目立っていた」（七一頁）、七月一日には「旅愁」もいよいよ最終巻「論者注…戦後版『旅愁』第四篇の改稿作業のことだと思われる」を迎えて、作者の健康のさらに衰えたとも聞く」（一四三頁）などの記載がある。井上謙は「横光利一 新世紀への序章」（『近畿大学日本語・日本文学』創刊号、一九九九年三月）の中で、横光家に千代夫人記載の病氣記録「父の回想」が存在していることを報告している。そのメモには、横光の「病氣の遠因は廿一年の七月二十三日以来である」と書かれており、まさに『旅愁』の改稿作業や戦後の横光批判が活発化された時期に死に至る病が進行していたのである。井上はそ

れに加え、身内であつた那珂考平から非難の手紙が来たことも横光の体調に影響を与えたのだろうと推測している。

(4) 木村徳三『文芸編集者の戦中戦後』（大空社、一九九五年七月）、「横光さんの微笑」(『横光利一全集 月報』一一卷、河出書房、一九五六年四月)に、一連の経緯が記されている。なお、『人間』掲載時の原稿は、GHQ/SCAPの検閲を恐れて木村が手を加えたものである。詳しくは、十重田裕一「引き裂かれた本文 横光利一「微笑」と事後検閲における編集者の自主規制」(『文学』四卷五号、二〇〇三年九月)を参照のこと。本章で引用する『定本横光利一全集』掲載の「微笑」本文は、木村が手を加えておらず、またGHQ/SCAPの検閲も特に問題がなかった初版『微笑』（斎藤書店、一九四八年三月）収録のものを底本としている。

(5) 本章第二節で詳述するように、「微笑」の素材自体は戦時中からあつた。しかし、作品内に登場するラジオ放送が一九四七年七月に放送されている点から、「微笑」を執筆し終えたのは、戦後版『旅愁』の改稿作業や、「梅瓶」(『人間』一卷四号、一九四六年四月)の発表以降であることがわかる。

(6) 栖方が勤めていた機関は、恐らく横須賀の海軍航空技術廠だつたと思われる。「殺人光線」(当時は「Z装置」と呼ばれていた)は、河村豊『旧日本海軍の電波兵器開発過程を事例とした第2次大戦期日本の科学技術動員に関する分析』(東京工業大学博士論文、二〇〇一年一月)に詳しい。河村によれば、海軍が「Z装置」の研究を立案した時期は一九四二年七月頃であり、その後九月に「Z装置」の研究に関する訓令が発令され、翌年には同研究所でかなりの規模で実施されていたと述べている。また実験の際、約三七〇名の研究者や助手といった係官が必要とされ大学の物理学者も参加することになったこと、Z装置開発のための新たな研究所の設置が計画され、一九四三年五

月に静岡県島田に設立された海軍技術研究所に「Z装置」開発の拠点を移したことがまとめられており参考になる（第四章 電波兵器開発計画とその初期の対応）。

（7）ただ、相対性理論に対する疑義自体は同時代からもみられ、その代表者として土井不曇の名前が挙げられる。土井は既に一九二〇年代に『アインスタイン相対性理論の否定』（総文館、一九三二年九月）を上梓しており、作品内時間と比較的近いものと「相対性理論の内部的不合理を論ず」（『理化学研究所彙報』一三卷一号、一九三四年一月）、「相対性理論を駁す」（『理化学研究所彙報』一七卷一二号、一九三八年十二月）などの論文がある。栖方の「あれは仮説が間違つてゐるのですよ」と語る内容それ自体は、同時代空間において決して荒唐無稽なものではなかったのである。

（8）ただ河田和子は、殺人光線の射程範囲が同記事ではせいぜい「二千米」、「微笑」では「三千メートル」と記されている点に注目し、「いわば仮想現実に似た時空を「微笑」では捉えているのである。「微笑」では、そうした現実と夢とが入り交じった戦中の意識を相対化しながら、戦後の意識も表わされている」（『横光利一の戦中戦後と「微笑」』『近代文学論集』三二号、二〇〇五年一月）と指摘する。

（9）芹澤光興は「栖方の死を予感した梶が、しかしその〈死に方〉については何も考えられず、また考えようとしなかったこと」に着目し、「彼の予感が栖方における客観的必然性というより、むしろ自身の主観的必要性から生れたことを物語っているよう。横光にとって、栖方はまさしく『大東亜戦争』とともに死なねばならぬ存在だった」（『夢からの「微笑」』『名古屋短期大学研究紀要』二二号、一九八三年五月）と述べている。本章でのモデルであった栖方の書き変えの問題とも通ずる指摘であるだろう。

(10) 『読売新聞』(朝刊、一九四七年七月二五日)のラジオ欄からの情報による。

(11) 東京都立松沢病院は日本で初めての精神病院であった。文学界隈でいえば、一九三〇年に検挙され市谷刑務所の収容中に拘禁反応となった中本たか子、「微笑」発表の翌年の一九四九年に、愛人刺傷事件のため田中英光が、それぞれ松沢病院に入院している。また大川周明が東京裁判以降、精神鑑定のため一九四六年から四八年にかけて入院していたのも同病院である。横光との関係だと、新感覚派映画連盟の作品として制作された『狂った一頁』(衣笠貞之助監督作、一九二六年以上映)のモデルとなったのが、この松沢病院であった。詳しくは岡田靖雄「作品をとおしてみる松沢病院一〇〇年史」『日本医史学雑誌』二六巻二号、一九八〇年四月)を参照のこと。

(12) 松沢病院に勤務していた看護師の鈴木はる子が、「精神医学の重要性はまだ一般に認識されておらず、精神病患者は単に気狂いとして斥けられ、不幸なこの人達に対して一般の人は同情はもとより関心さえ寄せない状態ではないか」(心を病める者と共に 松澤病院看護婦の手記)『婦人公論』三八一号、一九四九年二月)と嘆いているように、世間一般の精神病患者に対する認識は、ラジオ番組の内容同様冷たいものであったことがうかがえる。

(13) 石川巧は「師／弟小説としての「微笑」 栖方の微笑はなぜ「美しい」のか」(前掲)において、「他者の厳しい視線に晒されることの多い栖方は、精神を休めるために〈師〉を必要としていた」のに対し、梶は「栖方の心に浸透する言葉を探すことを怠るだけでなく、〈弟〉として受け容れること自体も拒絶するのである。(中略)〈弟〉の立場で信頼できる〈師〉を求めた栖方をしかと受け止めようとはせず、彼の言葉を戦後日本に生きるすべての人々に開いてしまっている」とその問題性を指摘する。たしかに傾聴すべき論考だが、モデルであるラジオ放送の内容や狂人達を冷笑していく戦後空間や、栖方のもう一人の〈師〉ともいえる高田が栖方について「死児の齢を算へるつま

らなきで、ただ曖昧な笑ひをもらすのみだつた」と述べられているのに対し、「かき消えていく多くの記憶の中で、ますます鮮明に膨れあがつて来る」として梶が栖方の記憶を回想していくことは重要である。戦時中の栖方を「受け止めよう」としなかったからこそ、梶はその後悔の念から、戦時中の時間意識に引きずられ、また狂人達を冷笑し顧みない戦後の人々に向けて、栖方の記憶を語り出すと解釈できうるのではないだろうか。

- (14) 栖方の「微笑」が登場する箇所注目してみれば、「赤児が初めて笑ひ出す醫のやうな、消えやすい笑ひ」や、繰り返される「ぱっ」という言葉から、扇風機の羽根の姿のように瞬間的に表れるものであった。

- (15) 横光と亀井の関係については、神谷忠孝が「横光利一の戦後 禅から親鸞へ」(『横光利一論』前掲)にて両者の戦中・戦後の親鸞受容を取り上げその類縁性を指摘している。

- (16) 二項対立の図式と、他方を排していく力学への批判のまなざしはその後も散見できる。例えば、横光の明治大学の講師時代の教え子であり、ルソン島で戦病死した桔梗五郎の追悼文の一節、「判断力が表現力よりも正しく、その二つのそぐはぬ部分で苦しんだやうであるが、そこをいつも微笑で通過させて誤まちがなかつたところに、桔梗流の哲学も出かかつて来てゐたやうである」(「桔梗君の相」『批評』八巻二号、一九四六年一〇月)や、「微笑」と同時に発表された「悪人の車 覚書」(『改造』二九巻一号、一九四八年一月)での「右翼といへば、一言で、それに対立する反対の左翼といふ言葉に随分一切の事実の死を意味し、左翼といへば、これに反する右翼全面の死を願ふ意味を持つ」がそれにあたる。

- (17) 横光の戦後になっても対抗勢力やそこにいる人々を排していこうとする力学への注目は卓見だといえる。しかし、芹澤光興が「ある日すべてが終ってしまった」という心理的断絶ゆえに、それはひたすら純化されていく。否、総て



の可能性が崩壊してしまったからこそ、人は自らの夢を夢として純化せねばならぬのではあるまいか」（『夢からの「微笑」』前掲）と述べたように、戦中期の事象を往々にして純化・美化し過ぎる危険性も孕んでいる。例えば、栖方の純粹無垢で美しい微笑といった表象のされ方が、戦時下に発表された横光の「特攻隊」（『文芸』二卷三号、一九四五年三月）の一節「幼児の唇に初めて泛んで消える微笑のごとき無垢、類ひ稀なる名華の微笑であらうか」と連続性を有しているという仁平政人の指摘（『横断する〈希望〉』横光利一「微笑」における〈戦中／戦後〉）『横光利一研究』五号、二〇〇七年三月）は重要になってくるだろう。戦中という時代を切断せず、しかし純化・美化し過ぎることなく戦中戦後という時代を正当に見据えていく、「微笑」とは異なる形での「明哲」さもまた必要なのである。

## 終章 横光利一の足跡を辿り終えて

### 一 飛ぶための羽根を探し求めて

全六章にわたって、横光利一の欧州体験と帰国後の日本表象の考察を行ってきた。本論文の最後に各論の考察結果を踏まえ、一貫したテーマや横光の思想の変遷について素描していく。

まずは、横光の欧州体験や「旅愁」で提出された土への着目が、徐々に空へと向かっていく点である。たしかに、第四章にて詳述してきたように、横光や矢代達は、石の都市パリと土の日本という対立構図を描くことで日本と欧州との差異を、また日本人を植物的存在だとみなすことで郷里と自分の足との調和を描出しようとした。しかし、戦争が進むにつれ、そうした土への関心が徐々に空へと向かっていく。例えば、「旅愁」内にて、カソリックに滅ぼされた矢代家の歴史を千鶴子に伝えるべきかどうか悩んだ際、矢代はふと遠方を見上げ、「千鶴子のカソリックも母の仏教もともに彼から意味を失ひ、溶け混じた空なるものに見える」（「旅愁（第四篇）」『文学界』一〇卷一二号、一九四三年一二月）と思う。矢代家の歴史や仏教、千鶴子のカソリックという境遇が混じり合っていく可能性が、空という表現によって示されているのである。たしかに、土に対するこだわりがある以上、その土地（トポス）が異なっている人や文化などは相容れないことになってしまう。しかし、そうした「断層」を越えるモチーフとして空が見出されていくのである。その最たる例が、「旅愁」第五篇、矢代の自宅

での場面にある。

前から矢代の家の茶の間と風呂場の角に柱があつて、そこに一分ばかりの小さな穴があいてゐた。その穴から白蟻が噴きでて来た。(中略)そして、全体が光線の射す廂の方へじりじり移動しつつ、直接日光をうけた柱の角までくると、そこからそれぞれ、空へむかつて飛びたつた。小粒で数万の大群ながらも、初めから秩序整然としてゐて、誰か号令するもののあるやうな風韻ある動きで間もなく、あたりには一足の姿も見えなくなった。(中略)ここでも何ごとか旅立ちがなされてゐたのだつた。／彼は蟻の立つた柱を叩いてみた。中に空洞のあるらしい乾いた音を聞きながら、彼は自分と千鶴子との結婚も、かうして巢立つてゆかうとしてゐる旅立ちに似てゐると思つた。(「旅愁(第五篇)」『文芸春秋』二三卷一号、一九四五年一月)

家の土台の柱を食べていた白蟻が「空へむかつて飛びたつた」様を矢代は目撃し、「自分と千鶴子との結婚も、かうして巢立つてゆかうとしてゐる旅立ちに似てゐると思つた」とある。「旅愁」での中心的なテーマである矢代と千鶴子の結婚や、家(歴史)の問題、東洋と西洋の対決と調和といった要素が空という表象によつて、昇華されていくのである。

このような空のモチーフは、戦後発表された「微笑」(『人間』三卷一号、一九四八年一月)にも受け継がれていく。栖方が訪れようとする際、梶は「彼らの悩み、——それもみな数学者のさなぎが羽根を伸ばすに必要な、何か食ひ散らす葉の一枚となつてゐた自分の標札を思ふと、さなぎの顔の悩みを見たかつた」とある。「旅愁」では白蟻だったが、「微笑」においては、栖方を「さなぎ」に例え、彼らが自分の家の標札を「食ひ散らす」ことによつて「羽根を伸ばし」、飛翔していこう

とするイメージが読み取れる。そして、「微笑」最終部では、次のように書かれていく。

それにしても、何より美しかった栖方のあの初春のやうな微笑を思ひ出すと、見上げてゐる空から落ちて来るのを待つ心が自ら定つて来るのが、梶には不思議なことだった。それはいまの世の人たれもが待ち望む一つの明哲判断に似た希望であつた。それにも拘らず、冷笑するがごとく世界はますます二つに分れて押しあふ排中律のさ中にあつて漂ひゆくばかりである。梶は、廻転してゐる扇風機の羽根を指差しぱツと明るく笑つた栖方が、今もまだ人人に云ひつづけてゐるやうに思はれる。／「ほら、羽根から視線を脱した瞬間、廻つてゐることが分るでせう。僕もいま飛び出したばかりですよ。ほら。」

生前栖方が扇風機の「羽根」を掴まえる際に発した台詞を梶が思い出したところで物語は閉じられている。ここでの「僕もいま飛び出した」という発言には、当初「さなぎ」だった栖方が「羽根」を獲得し、空に飛び立っていったという意味が込められているのである。このようにみていけば、土からの脱却の先に空が想定され、「旅愁」では白蟻が、「微笑」では栖方が、それぞれ家の柱や標札を養分に取り、「羽根」を獲得し、空へ飛び立っていくのである。

ここで想起せざるを得ないのが、横光の代表的な俳句「蟻台上に飢ゑて月高し」（「蟻」『書方草紙』白水社、一九三二年一月）である。この句について、中田雅敏は次のように解説している。

小さな蟻が台上に攀じ登って飢えを訴えながら月を仰ぎ見ているその姿こそ横光自身の姿であり、横光の野心と食欲な

までの執着心とを見ることが出来る。けし粒ほどの小さな蟻が、ときもしない天空の月を眺めて飢餓を訴えるところに、おのれの芸術と文学の完成とを求めて頑くかなまでに孤軍奮闘している横光の姿が見えて来る。（『臺上の蟻』『横光利一 文学と俳句』勉誠社、一九九七年一〇月、一八三―一八四頁）

ここでの「蟻」が横光自身を指し示すとすれば、「旅愁」と「微笑」でみてきた空への志向がさらに意義深いものにみえてくるだろう。人間は空が飛べない以上、その土地に根を下ろさざるを得ない。しかし、戦争の勃発により様々な対立構造が生み出されていく中、横光はそうした争いを乗り越えていくために、空を飛ぶ「羽根」を探し求めていくのである。土から空へ、ここに横光の晩年の境地をみる事が出来る。

## 二一〇〇年目の「旅愁」論のために

最期に、全六章の分析を通して明らかになったこと、特に各章における共通性を概括しつつ、欧州体験と帰国後の日本表象に関する作品群の可能性・問題性を指摘し本論文を閉じたい。

各章での考察結果を踏まえわかってきた点は、横光はあくまでも自身の身体に接した要素を抛り所にして日本（語）帰に迫ろうとしたこと、そして二項対立を意識しつつもそこから零れ落ち、また対立そのものを無化させていく要素への注目にある。

例えば、第一章では、外国で俳句を詠む困難さを通して、言語は無色透明で普遍的なものではなく、多分に歴史性や伝統

が組み込まれているという点。第二章では、観光者でも定住者にもなることができなかった横光自身の境遇が、人民戦線運動の最中、零れ落ちそうになる外国人達に目を向けるきっかけとなった点。第三章では、西洋でありつつも東洋的な歴史を持つハンガリーという国を取り上げ、そこに西洋と東洋の紐帯の可能性を見出そうとした点。第四章では、オリンピックの観戦を通じて、身体は言語同様無色透明なものではなく、属している環境から多分に影響を受けているという点。第五章での矢代の古神道の発話の実践は、心身並びに現在と過去を統一しようとする狙いがあった点。第六章では、他方を排する形で保持される定理〈排中律〉を越えるものとして、栖方の微笑を位置付けようとした点、などがそれにあたる。

具体的な身体や言語といった観点から、文学活動を発展させていく横光の創作姿勢は、新感覚派と称された頃から一貫したものだといえる。渡欧前年、横光は藤澤桓夫に欧州体験を経て「新感覚派がもう一度、僕には来るのです」（藤澤桓夫宛書簡 一九三五年一月九日消印）と書いていたことは偶然ではないだろう。横光はヨーロッパを旅することで、身体や言語の問題について、再考を迫られることになったのである。しかし、第五章にて論じたように、そのような試みは、自身のこれまで培ってきた身体や言語が西洋由来のものに過ぎないのではないかという気づきを与えた。そうした西洋意識の脱色化を図った作品こそが、「旅愁」だったのである。

しかし、こうした横光の思想や作品群に問題があるとすれば、自身の個別的な身体や言語への探求が、国民国家の強化へと接続されていくことへの無自覚さにあったといえる。例えば、第五章の注（10）で記したように、儀礼的な矢代の「イウエ」の発話は、「起源への同一化」への欲望とも解釈できるし、西川長夫が『国民国家論の射程 あるいは「国民」という怪物について〔増補版〕』（柏書房、二〇一二年三月）の中で提言した国民化の五項目（空間の国民化・時間の国民化・習俗の国民化・身体の国民化・言語と思考の国民化）に、「旅愁」は少なからず抵触してくることだろう。もう一点挙げるとすれ

ば、二項対立から零れ落ちるものや、それを相対化する可能性に注目していたものの、横光自身の身体・言語観においては、そうした要素を是認しなかったことである。かつて、横光が新感覚派時代に評価されてきたのは、翻訳文体によって培ってきた、混合・雑種的な要素にあったのではなかったのか。だが横光は、そのような混在した言語・身体を良しとせず、「純粹」・「正規」性へと向かっていくのである。そこには、日本的なものが求められていく戦時下という時代状況や、文壇の代表者としての立場も少なからず影響を与えていたのかもしれない。

しかし、序章で述べたように、日本の「近代」を背負い、また日本文学の代表者となった横光の欧州体験と帰国後の作品群は、現在の我々においても様々な視座を与えてくれるだろう。特に身体や言語を介した日本（語）回帰への隘路や、二項対立を超えるものへの注目は、今なお古びていない課題であろう。

本論文では、横光の足跡を一步一步辿り、時に立ち止まりながらそこに残された言葉や意味について検討してきた。そこで提出された右記のような問題系は、決して「冷笑」し切り捨てることができない、我々自身の今日的な問題として残存し続けているのである。横光は亡くなる直前、「今の日本には、ワシの『旅愁』を判ってくれる人が一人もいない。しかし百年後の人は判ってくれると思うよ」（横光佑典「父の残した言葉」『横光利一の世界Ⅱ』豊の国宇佐市塾、二〇〇三年三月）と家族に漏らしていたという。横光がその胸中を吐露してから七〇年以上が経過したが、残された課題は未だ多い。一〇〇年目の「旅愁」論に向けて、本論文がその道標となることを願いつつ、擱筆としたい。

補足資料 1 「欧州紀行」・「旅愁」書誌情報

一 「欧州紀行」

単行本『欧州紀行』（創元社、1937年4月）							
「欧州紀行」							
スミス行	イタリア行1、2	ハンガリア行	手紙2	手紙1	失望の巴里	巴里まで	家人への手紙一
「欧州の旅四——スミス行」『東京日日新聞』八月一日	「欧州の旅二〇三——イタリア行」『東京日日新聞』八月八・九日	「欧州の旅一——ハンガリア行」『東京日日新聞』八月七日	四月二日付 千代子夫人宛書簡	四月四日付 千代子夫人宛書簡	「失望の巴里（第二信）」『文芸春秋』六月一日	「巴里まで（第一信）」『文芸春秋』五月一日	二月二十九日付 千代子夫人宛書簡
物語内時間（一九三六年）	六月下旬～七月初め	六月下旬～七月初め	四月二日	四月四日	三月一〇日～四月六日	二月二四日～三月一〇日	二月二二日



※黒田大河「作品としての『欧州紀行』」

『旅愁』への助走（『横光利一とその時代 モダニズム・メディア・戦争』前掲）での表を参照し論者が作成

単行本『欧州紀行』（創元社、1937年4月）								
「厨房日記」	「欧州紀行」							
	人間の研究	パリから帰って	オリンピック開会式	オリンピック記	半球日記	雨の南欧	花散る巴里	ドーハを超えて
『改造』一九三七年一月一日	「人間の研究」『東京日日新聞』一九三七年一月一〇日～一四日	「パリから帰って」『東京日日新聞』九月三〇日～一〇月二日	「オリム <sup>マイ</sup> ピック入場式を観る」『東京日日新聞』八月二日 「日本選手への鬼門」『東京日日新聞』八月五日 「列国の観衆挙つて」『東京日日新聞』八月七日	「オリンピック村を観る」『東京日日新聞』七月二九日	「半球日記」『改造』一九三七年四月一日	初出未詳（単行本化の際に加筆された部分か）	「花散る巴里―渡欧通信」『文芸春秋』八月一日	「ドーハを超えて―パリ通信」『文芸春秋』七月一日
（小説）	（随筆）	（随筆）	八月一日 八月二日～八月三日 八月四日～八月五日	七月二四日～七月二六日	七月二四日～八月二〇日	六月一日～七月二三日	五月一日～六月二二日	四月七日～五月一三日

【再録本】

- ・『刺羽集』生活社、一九四二年二月（「ハンガリア行」「イタリア行」「スウェーデン行」収録）
- ・『欧州紀行』講談社学芸文庫、二〇〇六年十二月

【全集】

- ・『横光利一集 欧州紀行』創造社、一九四〇年六月
- ・『横光利一全集』第二〇卷、改造社、一九四九年六月
- ・『横光利一全集』第九卷、河出書房、一九五五年九月
- ・『定本横光利一全集』第一三卷、河出書房新社、一九八二年七月（決定稿・底本は初版）

二 「旅愁」

【初出】

矢代の巻（第一篇相当）

・『東京日日新聞』夕刊、一九三七年四月一四日―一九三七年八月六日まで通算六五回掲載

※最終回（六五回目）末尾には「（矢代の巻終）」とある。

・『大阪毎日新聞』夕刊、一九三七年四月一三日―一九三七年七月八日まで通算五四回連載

※『大阪毎日新聞』版は途中で打ち切りとなる。

続篇（第一・二篇相当）

・『文芸春秋』一九三九年五月―一九四〇年四月まで一二回連載

第三篇

・『文芸春秋』一九四二年一月および一九四二年五月―一九四二年二月まで九回連載

第四篇

・『文芸春秋』一九四三年一月―一九四三年三月、および一九四三年七月―一九四三年八月まで五回連載

・『文学界』一九四三年九月―一九四四年二月まで六回連載

第五篇

・『文芸春秋』一九四四年六月・一九四四年一〇月・一九四五年一月の三回連載

梅瓶

・『人間』 一九四六年四月

【初版・再録本】

●戦前版テキスト

・『旅愁』 第一篇、改造社、一九四〇年六月（「第一篇」 初版）

↓『東京日日新聞』（一九三七年四月一四日—一九三七年八月六日（全六五回））＋『文芸春秋』（一九三九年五月—

一九三九年七月（「続篇」 全一二回の内の三回分）

・『旅愁』 第二篇、改造社、一九四〇年七月（「第二篇」 初版）

↓『文芸春秋』（一九三九年八月—一九四〇年四月（「続篇」 全一二回の内の九回分））

・『旅愁』 第三篇、改造社、一九四三年二月（「第三篇」 初版）

●戦後版テキスト（GHQ／SCAPの検閲＋横光利一の自主検閲あり）

・『旅愁』 第一篇、改造社、一九四六年一月

・『旅愁』 第二篇、改造社、一九四六年二月

・『旅愁』 第三篇、改造社、一九四六年六月

- ・『旅愁』第四篇、改造社、一九四六年七月（「第四篇」初版）

●横光利一死後の『旅愁』再録本

- ・『旅愁 全』改造社、一九五〇年十一月
- ・『横光利一集』上巻、新潮社、一九五一年八月
- ・『昭和文学全集 横光利一集』角川書店、一九五二年二月
- ・『旅愁』前篇、新潮社、一九五八年一〇月
- ・『旅愁』後篇、新潮社、一九五八年十一月
- ・『旅愁』上巻、新潮文庫、一九六〇年七月
- ・『旅愁』中巻、新潮文庫、一九六〇年八月
- ・『旅愁』下巻、新潮文庫、一九六〇年一〇月
- ・『世界名作全集 旅愁』平凡社、一九六一年四月
- ・『昭和文学全集 横光利一』角川書店、一九六二年一月
- ・『縮冊日本文学全集 現代小説篇』日本週報社、一九六四年四月（※旅愁（抄））
- ・『旅愁』上巻、旺文社文庫、一九六六年五月
- ・『旅愁』下巻、旺文社文庫、一九六六年六月
- ・『豪華版日本文学全集 横光利一集』河出書房社、一九六七年一〇月

- ・『グリーン版日本文学全集 横光利一 旅愁(全)』河出書房新社、一九六八年四月
- ・『旅愁』上巻、新潮文庫、一九六七年十二月
- ・『旅愁』下巻、新潮文庫、一九六七年十二月
- ・『旅愁』上巻、講談社文芸文庫、一九九八年一月
- ・『旅愁』下巻、講談社文芸文庫、一九九八年十二月
- ・『旅愁』上巻、岩波文庫、二〇一六年八月
- ・『旅愁』下巻、岩波文庫、二〇一六年九月

【全集】

●改造社版全集

- ・『横光利一全集』第一六巻、改造社、一九四八年四月
- ・『横光利一全集』第一七巻、改造社、一九四八年五月
- ・『横光利一全集』第一八巻、改造社、一九四八年六月（第五篇「梅瓶」初版）

●創元社版全集

- ・『横光利一作品集』第七巻、創元社、一九五一年九月
- ・『横光利一作品集』第八巻、創元社、一九五一年九月

●河出書房版全集

- ・『横光利一全集』第八卷、河出書房、一九五五年十二月
- ・『横光利一全集』第一〇卷、河出書房、一九五六年一月

●河出書房新社版全集（決定稿）

- ・『定本横光利一全集』第八卷、河出書房新社、一九八二年二月  
↓第一・二・三篇収録（底本は初版…戦前版テキスト）
- ・『定本横光利一全集』第九卷、河出書房新社、一九八二年三月  
↓第四・五篇・「梅瓶」収録（底本は初出本文）

## 補足資料 2 渡欧年譜

日付 (1936 年)	場所	出来事
2 月 15 日	東京	銀座のニューグランドで渡欧歓送会。
2 月 16 日	東京	高濱虚子が東京で、箱根丸に乗船。
2 月 17 日	東京	日本ペンクラブによる渡欧送別会。
2 月 18 日	東京 神戸	夕方、東京日日新聞社主催の送別会兼『家族会議』の講演会を行う。午後 9 時半、鉄道にて東京発から神戸へ。
2 月 19 日	神戸 大阪	大阪に宿泊する（土佐堀の京屋）。
2 月 20 日	神戸	日本郵船箱根丸で神戸港から出港。高濱虚子、宮崎一定らと同船となる。機関長には、虚子の弟子の上ノ畑純一がいた。



## 補足資料2 渡欧年譜

2月21日	瀬戸内海上	
2月22日	門司	門司を通過。妻に「これから出す手紙は保存しておいてほしい」「船中の心理の移動、自然の変化と自分の気持ちを引きくらべてみたい」と記す（「家人への手紙 一」）。
2月23日	門司	
2月24日	上海	午後9時半、上海着。今鷹瓊太郎宅の階下にある内山書店で山本実彦、魯迅、内山完造と出会う。
2月25日	東シナ海	
2月26日	台湾沖	船中にて2.26事件を知る（※初出時では2月29日に記されているが、高濱虚子・宮崎一定らによれば、27・8日にその報が船内に届いている）。
2月27日	台湾沖	
2月28日	台湾	朝8時、香港着。自動車で島を一周の後、街を散策。チャイナメールのイギリス人記者（2名）の取材を受ける。
2月29日	台湾	朝7時、香港出航。
3月1日	印度支那沖	
3月2日	印度支那沖	赤道付近。かつて佐藤次郎・シャリアピン（ロシアのバス歌手）も箱根丸に乗っていたことを記す。日本へ電報を打つ。
3月3日	印度支那沖	第1回洋上句会。「古里の便りは無事と衣更」「カムランの島浅黄なる衣更」「衣更はるかに椰子の傾ける」の三句が高濱虚子の選に入る。夜から風邪をひく。
3月4日	シンガポール	朝8時、シンガポール着。ジョホール王宮、ゴム園などを訪ねる。シンガポール市郊外の玉川園で昼食。夜、高濱虚子と、シンガ

## 補足資料2 渡欧年譜

		ポールにいる虚子の門人 20 人と句会。「水牛の車入りけり仏桑花」「鰐怒る上には紅の花鬘」の二句が虚子の選に入る。
3 月 5 日	シンガポール マラッカ海峡	正午、シンガポール出港、マラッカ海峡に入る。船内にて、マラッカ海峡で投身自殺をした佐藤次郎の話題が出る。
3 月 6 日	ペナン	午後 4 時、ペナン入港。これまでの寄港地の中で最も気に入った所であると記す。マレー人に麻袋で作った夏服を褒められる。
3 月 7 日	印度洋 ベンガル湾	インド洋にて、広田弘毅内閣誕生の報を聞く。ベンガル湾に入る。地上と海上での感覚の違いについて考察する。
3 月 8 日	ベンガル湾	天ぷらを食べたことで胃痛が起きる。
3 月 9 日	ベンガル湾	午後 4 時、第 3 回洋上句会。胃痛のせいでよい句が出来ず虚子の選に入ったのは「京に似しペナンは月の真下にて」一句のみ。妻宛てに手紙を書く。
3 月 10 日	コロンボ	紅海の暑さに困る。午後 4 時コロンボ着。コロンボの夕暮が美しいと記す。インド人が横光の麻袋の夏服に対し興味を持つ様子が描かれる。
3 月 11 日	コロンボ アラビア海	正午、コロンボ出港。赤道付近の国と日本との思想の違いを考察する。
3 月 12 日	アラビア海	熱帯季語について考えを巡らせる。
3 月 13 日	アラビア海	船内という空間における人々の関係性や国籍が違う子供たちとの交流について記す。
3 月 14 日	アラビア海	アラビア海。洋上第四回句会。

## 補足資料2 渡欧年譜

3月15日	アラビア海	海が荒れる。マラッカ海峡では船客の頭はロマンティックになっていたが、今はリアリスティックに戻ってきたと記す。
3月16日	アデン湾	午後9時すぎ、アフリカの東端、サマリランドの一角を見る。日向豊作に3月5日頃執筆の手紙を出す。夜にはブリッジへ登り星を見る。
3月17日	アデン	横光の誕生日（満38歳）。アデン着。現地人からジャスミンの花を貰う。博物館を見学。アラビヤの歴史に思いを寄せる。夕方アデン出航。
3月18日	紅海	自然（太陽と空）と自意識の関係等について記す。
3月19日	紅海	祖国が近づいてきたため外人たちが嬉しそうな様子を記す。海外に対する様々な人の認識について記す。
3月20日	紅海	紅海の最終日。日本へ帰る桑名丸とすれ違う。
3月21日	エジプト	午後3時、スエズ運河着。下船して、カイロへ行き、ピラミッド、スフィンクス、博物館など見学。
3月22日	スエズ 地中海	
3月23日	地中海	
3月24日	地中海	クレタ島付近を通る。英語の得意な人が人気だったが、フランスが近づくにつれフランス語の得意な人が注目を浴び始める。
3月25日	メッシナ海峡	イタリアの先端、メッシナ海峡通過、エトナ火山は雲の中に隠れて見えなかった。夜の9時、ストロンボリ島の噴火を見る。
3月26日	ティレニア海	夕暮れ、コルシカ島とサルデーニャ島の間を通過していく。
3月27日	マルセイユ	マルセイユ入港・上陸。船内の年長者が税金を取られる。マルセイユの街を廻るが、片足が硬直して動かなくなる。群衆が笑わな

補足資料2 渡欧年譜

		い様子を記す。
3月28日	マルセイユ パリ	マルセイユを出発、鉄道でパリへ。夕方6時パリ着。城戸又一と夜宿場に近い酒場へ行きビールを飲む。その様子を目撃した東日の特派員が驚く。
3月29日	パリ	午後2時から、高濱虚子らとセーヌ川沿いの観光名所を見て廻る。
3月30日	パリ	
3月31日	パリ	
4月1日	パリ	『文学界』に「横光利一渡欧歓送会」が掲載される。
4月2日	パリ	
4月3日	パリ	
4月4日	パリ	一週間で「見るべき所は皆見てしまった」と記す。同日付の妻への手紙（「手紙1」）にも同様の記述が見られる。
4月5日	パリ	
4月6日	パリ	頭の中が混乱している状態と、人間の資本が金だということを記す。
4月7日	パリ	パリに対する印象は毎日のように変化する。ドストエフスキーのパリ滞在を想起する。パリはリリズムがないと記す。
4月8日	パリ	ホテルを変更するため、リュクサンブール公園近くのホテルを訪ねるが、借りずに終わる。リュクサンブール公園の沢山ある文学者の像のうち、モンテーニュ像が好きだと記す。
4月9日	パリ	

補足資料2 渡欧年譜

4月10日	パリ	
4月11日	パリ	
4月12日	パリ	ホテルをセレクト・ラスパリュホテルに変更。
4月13日	パリ	エッフェル塔に登る。岡本太郎と夕食。
4月14日	パリ	14日夜から15日にかけて、妻宛てに手紙を書く。
4月15日	パリ	正金銀行に行つて200円を850フランに換える。
4月16日	パリ	
4月17日	パリ	
4月18日	パリ	
4月19日	パリ	蚤の市へ行く。
4月20日	パリ	
4月21日	パリ	総選挙間近とタクシーのストライキの様子を記す。パリの都市空間に関する考察を行う。またフランスと中国が似ていると記す。
4月22日	パリ	妻へ手紙を書く（「手紙2」）。タクシーのストライキの様子、ピントが合つてきて写生できるようになつてきたことなどを記す。
4月23日	パリ	サンジェルマンへ行く（途中、「椿姫」がアルマンと住んだとされるブーヅヴァルを通る）。フランソワ一世の宮廷とイギリス庭園を訪問。
4月24日	パリ	

## 補足資料2 渡欧年譜

4月25日	パリ	
4月26日	パリ	総選挙第1回投票。左翼が絶対勝つという現地の予想を記す。フランスの右翼・左翼の状況を記す。
4月27日	パリ	選挙は、極右と左翼が競り合っている状況を記す。妻へのプレゼントのため街を廻り、手袋を3つ購入。
4月28日	パリ	午後、岡本太郎らとブローニュの森へ行く。妻へ手紙を出す。ロンドンで講演の予定があることを記す（実際は高濱虚子の講演となった）。
4月29日	パリ	
4月30日	パリ	
5月1日	パリ	午後、初めてモンパルナス墓地に足を踏み入れる。メーデーの様子を記す。『文芸春秋』五月号に「巴里まで（第一信）」が掲載される。
5月2日	パリ	「少し神経衰弱の気味がある」と記す。外国人とパリでの日本人の態度について考察を巡らせる。
5月3日	パリ	総選挙第2回投票。人民戦線派が376議席獲得。
5月4日	パリ ロンドン	9時出発、12時にロンドン着。東京日日新聞社の南條真一に市中と郊外を車で案内してもらう。トキワ・ホテルの別館に宿泊する。
5月5日	ロンドン	ペンクラブに招待され出席する。高濱虚子が講演。
5月6日	ロンドン	市中を一人で散策する。宿であるトキワ別館の庭の美しさを高く評価する。昼から夜にかけて、宿客である細菌学の博士と話をする。

補足資料2 渡欧年譜

5月7日	ロンドン	宿にいと外出する気が起きず、スコットランド行きを断念する。
5月8日	ロンドン	宿の庭と家人の「素朴さ」に魅了され、パリへ帰るのを延期する。妻へ手紙を書く。中村嘉一・静子宛の手紙にアメリカ行きを断念したことを記す。斎藤弘次にも手紙を書く。
5月9日	ロンドン パリ	12時半、ロンドン発、3時パリ着。「初めて家へ帰つたやうな気持ちになる」と記す。6月になれば再度イギリスに行きたいと記す(実現はしなかった)。
5月10日	パリ	ロンシャン競馬場へ競馬を見に行く。帰途、シャンゼリゼーのロンパンで休む。
5月11日	パリ	ローゼンベルクヘマチスの展覧会を見に行く。マチスを大天才と評価する。
5月12日	パリ	再度、ローゼンベルクヘマチスの展覧会を見に行く。日本には文学も絵画も「本格」がないと思う。
5月13日	パリ	ローゼンベルクヘマチスの展覧会の前まで来る。リュウ・ラ・ボエッシイからサントノレ間の通り、オーグスト・コント通り、ロンパン・ゼ・サンゼリゼー、コンコルド広場に美しさを見出す。佐分真の自殺を知る。先日自殺した牧野信一のことを思い出し、好きなオーギュスト・コント通りを通るたび「二人の冥福を祈ろうと思ふ」と記す。
5月14日	パリ	
5月15日	パリ	
5月16日	パリ	17日付の妻宛ての手紙の前半を書く。
5月17日	パリ	妻への手紙の続きを書く。「スペインへ行くかもしれぬ」と記す。
5月18日	パリ	岡本太郎らとヴァンセンヌの森へ行く。パリと自然との関係に考察を巡らせる。

## 補足資料2 渡欧年譜

5月19日	パリ	立体活動写真を見に行く。夜10時ごろ、岡本太郎らとブローニュの森へ行き、ボートで湖を一周する。
5月20日	パリ ルーアン	バスでルーアンへ行き、一泊。ルーアンの景色や現地人の真面目さを評価する。
5月21日	ルーアン パリ	ルーアンから車でパリへ帰る。パリの人の金銭に対する考え方について記す。
5月22日	パリ	水原秋桜子の句集『葛飾』が届く。外国で俳句をつくる際の困難さについて記す。
5月23日	パリ	
5月24日	パリ	妻に手紙を書く。60万人のデモが発生。
5月25日	パリ	
5月26日	パリ	フランス人は笑うことが少ないと記す。政府による芸術への支援の必要性を記す。
5月27日	パリ	チュイルリーの画館にて、セザンヌの展覧会を見に行く。
5月28日	パリ	
5月29日	パリ	
5月30日	パリ	『東京日日新聞』に「旅中寸前」が掲載される。
5月30日	パリ	日本の小説を読み、繊細微妙な美しさに感嘆する。妻へ手紙を書く。
6月1日	パリ	妻に手紙を書く。『文芸春秋』に「失望の巴里（第二信）」が掲載される。人は誰も「心に聳を持つてゐる」とし、東洋的なものを



## 補足資料2 渡欧年譜

		希求することを記す。
6月2日	パリ	出発前の吉田健一との会話から銀座の資生堂や軽井沢や日比谷が東洋的な良さであると記す。また久米正雄・林房雄が東洋的な作家であり、奈良や京都は「電池の切れた日本」だと記す。
6月3日	パリ	パリは「特別の国」だと記す。「先日から工場二百に罷業が起こっている」とあり、新聞もストライキだと記す。
6月4日	パリ	パリでは人間は通用せず金だけが通用すると記す。レオン・ブルム政府誕生。
6月5日	パリ	妻へ手紙を書く。文芸春秋社より原稿料が届く。淡徳三郎の「日仏通信」を詠み、東洋・西洋とでは捉え方が異なることに気付く。
6月6日	パリ	罷業が拡大する中、カルチュラタンを歩く。夜レストランで運転手たちが政治の話ばかりをしている場面を目撃する。シャンゼリゼ一带の静粛な様子を記す。
6月7日	パリ	モンパルナス墓地を会場にレオン・ブルムが集会している様子を目撃する。 ブルム、マティニョン協定に署名。
6月8日	パリ	新聞は出始めたが、汽車の食堂や百貨店ははまだ罷業中の状況を記す。
6月9日	パリ	スペインかイタリアへ旅行に出ようと思うが、パリの罷業を見てからにしようと思ひ留まる。
6月10日	パリ	罷業は拡大しているのに、周囲はそれを忘れてしまっているという様子を記す。
6月11日	パリ	モンパルナス一带のレストランが罷業しているため、白系ロシア人の店で食事をする。午後、シャンゼリゼからカルチュラタン方面を歩いたがホテルもカフェも罷業だった。ルクサンプルク公園のベンチに座っていると、老婆に腰かけ賃をせがまれる。妻へ手

補足資料2 渡欧年譜

		紙を書く。
6月12日	パリ	夜、岡本太郎に誘われ、モンマルトルにあるトリスタン・ツァラの家を訪問。
6月13日	パリ	妻へ手紙を書く。食事が出来ることになったと記す。
6月14日	パリ	妻へ手紙を書く。岡本太郎から海苔を送られてくる。
6月15日	パリ	
6月16日	パリ	
6月17日	パリ ストラスブルグ	午後1時40分パリ発、午後7時、ストラスブルグ着。ドイツとフランスの風土が入り乱れていると記す。ホテル・メゾン・ルージュ宿泊。妻へこの小旅行についての手紙を書く。
6月18日	スタラスブルグ ミュウヘン	午後9時15分、ミュウヘン到着。ホテル・パーク宿泊。夜中腹痛に襲われる。
6月19日	ミュウヘン チロル ミッテンワルド インスブルック	ミュウヘンの街を散策。ミュウヘン出発。チロル→ミッテンワルド→インスブルック着。
6月20日	インスブルック	午後、山に登る。山上の光景を見る。
6月21日	ウィーン	夜10時半、鉄道にてウィーン着。クリイドホテル泊。

## 補足資料2 渡欧年譜

6月22日	ウィーン ブダペスト	ウィーンから鉄道にてブダペストへ出発。午後6時ブダペスト着。ハンガリーの歴史・地政学的状況について考える。
6月23日	ブダペスト	
6月24日	ブダペスト	夕月の中、ダニューブの川岸でロマの演奏を聴く。
6月25日	ブダペスト	カフェ・ジャパンへの言及。ブダペストは感情・リリシズムが横溢していると評価する。郊外（ローマ町）へ行き遺跡を見て廻る。日本人だからとハンガリー人から油差しを貰う
6月26日	ブダペスト ベニス	ブダペストから空路にてミュウヘン経由でイタリア、ベニス着。ローヤル・ダニエルホテル泊。妻への手紙を書く。
6月27日	ベニス	サンマルコの前で朝食。午後から島巡り。
6月28日	ベニス フローレンス	7時にフローレンス（フェレンツ）着。日の暮れる間にホテルの周囲を歩く。午後七時、タクシーや馬車で、市内を観光。
6月29日	フローレンス	フローレンスの街を散策。イタリア・ルネッサンスと現在のパリ文化を比較する。夜、馬車で市内を廻る。
6月30日	フローレンス ミラノ	フローレンス出発前に、博物館を見学。午後5時、ミラノ着。予約していたホテル・レジナの切符の期間が過ぎており、ホテル・マルノへ変更。
7月1日	ミラノ ローゼンヌ	ミラノを出発。鉄道にてスイスに入る。夜八時半、ローゼンヌ着。『文芸春秋』に「ドーハを超えて 巴里通信」が掲載される。

補足資料2 渡欧年譜

7月2日	ローゼンヌ ジュネーブ	レマン湖を半周して、午後5時ジュネーブ着。ホテル・ヴェレビュ泊。時計を買うため、すぐ街を散策。
7月3日	ジュネーブ パリ	ジュネーブを発ち、夜11時パリ着。パリの都市の幾何学性について考察する。
7月4日	パリ	
7月5日	パリ	
7月6日	パリ	
7月7日	パリ	
7月8日	パリ	山田キクと面会。
7月9日	パリ	妻への手紙に今夜の講演について報告。夜、万国知的協力委員会（ラソシアシオン・ポルザ）に参加。「我等と日本」と題して講演（山田キク訳）。アインシュタインやヴァレリーなどが出席していた。
7月10日	パリ	
7月11日	パリ	
7月12日	パリ	
7月13日	パリ	右翼が警官に殴られている場面を見る。塩谷成策・大久保正雄から誘われ帝大教授矢部貞治と共にオートウイユへ向かう。サンクルーの森を散歩する。夜、大久保の部屋で雑談。上の部屋の松平男爵夫婦、鶴岡氏も加わる。深夜三時、松平氏の車でホテルまで

## 補足資料2 渡欧年譜

		送ってもらう。
7月14日	パリ	塩谷成策や矢部貞治らと共に、ナシオン広場まで巴里祭の様子を見に行く。夜シャンゼリゼーへ行くが警官隊が警護しているばかりなので、モンパルナスへ引き返す。
7月15日	パリ	『文芸春秋』に掲載された「失望の巴里（第二信）」を借りて読む。
7月16日	パリ	妻に手紙を書く。
7月17日	パリ	巴里祭後の閑散とした様子を記す。シャンゼリゼ周辺を歩く。
7月18日	パリ	水上瀧太郎の「相撲雑記」（『中央公論』1936年6月）を読んでいる最中に、樋口氏から水上の死去したこと知り驚く。しかし午後、岡本太郎から南部修太郎の間違いだと知らされる。夜、山田キクの招待に出席。
7月19日	パリ	日本へ帰る準備をする。
7月20日	パリ	「失望の巴里」が日本で話題になっていることを知り「この題は私のつけた題ではない」と執筆の意図を記す。
7月21日	パリ	パリの男女の様子から、金銭と心理の問題とフランスの植民地の構造を考察する。
7月22日	パリ	スペイン内戦の報をきく。
7月23日	パリ	ベルリンへ発つ準備のため、飛行機の切符を買う。夜、西條八十とホテル・ぼたん屋で会おう。
7月24日	パリ ケルン ベルリン	岡本太郎・嵯峨善兵・井上清らに見送られ、午前11時パリ出発、午後2時ケルン着。午後4時ベルリン着。

補足資料2 渡欧年譜

7月25日	ベルリン	ホテルが満員のため、リーツェンブルガー・ストラッセ33番地に宿泊。 隣室は城戸又一夫婦。女主人はキエフの白系露人（ユダヤ人）の女医。
7月26日	ベルリン	デペリッツのオリンピック村を視察する。吉岡・孫・南・メトカーフ（ベルリン・オリンピック三段跳び銅メダル）、リーフェンシユタールを目撃。ツォー駅付近でウィンドー・ショッピングを行う。
7月27日	ベルリン	掃除の行き届いたベルリンの様子から「ドイツではファッショ以外には赦されぬのであらう」と記す。
7月28日	ベルリン	ウンター・デル・リンデン街にある横浜正金銀行へ行く。その際老婆に銀行の場所を教えてもらう。
7月29日	ベルリン	次回のオリンピックが日本と決定する。困惑した日本人たちの様子を記す。 『東京日日新聞』に「花赤く旗翻るゝ伯林祭、オリンピック村を観る」が掲載される。
7月30日	ベルリン	次回オリンピックが東京に決定する。困惑した現地日本人の様子を記す。
7月31日	ベルリン	嵯峨善兵がパリから到着。夜、ツォーのカフェに座っているとボーイが日の丸の旗を卓上に置く。
8月1日	ベルリン	オリンピック開会式を視察。その後、城戸又一・北澤清・本田親男とヴィクトリヤのカフェへ。『文芸春秋』に「花散るパリ 渡欧通信」が掲載される。
8月2日	ベルリン	日本選手の調子が悪いので文章を書く気が起きないとこぼす。『東京日日新聞』に「オリンピック入場式を観る」が掲載される。
8月3日	ベルリン	買い物をした後、店主から「ハイル・ヒットラー」と挨拶をうける。帝王と国民との関係性について考察する。
8月4日	ベルリン	女主人の姪に競技場を案内する。西欧諸国と日本との運動に関する考えの違いを記す。
8月5日	ベルリン	支那料理店へ夕食。東洋の歴史について考察する。『東京日日新聞』に「日本選手への鬼門」が掲載される。

## 補足資料2 渡欧年譜

8月6日	ベルリン	帰国手段をアメリカ経由かソビエト経由かで迷う。
8月7日	ベルリン	「レインコートを持って出ようかどうかを考へるのが最大の私の関心事になつて来た」と記す。『東京日日新聞』に「列国の観衆挙つて、日本応援の集中火一劇的の此の一戦を観る」と、「欧州の旅（1） ハンガリア行」が掲載される。
8月8日	ベルリン	ソーセージを食べるだけで心が満足すると記す。村社講平を目撃する。『東京日日新聞』に「欧州の旅（2） イタリア行（1）」が掲載される。
8月9日	ベルリン	マラソンの映画を持って帰ってくれないかと依頼され、帰国を決意。ホテル・アドロンで送別会。会后、脇村という人物とチャガーデン通りを歩く。『東京日日新聞』に「欧州の旅（3） イタリア行（2）」が掲載される。
8月10日	ベルリン	帰国準備のため、城戸夫婦と共に買い物。ヨーロッパで見たものをどのように表象していくかということを悩む。『東京日日新聞』に「欧州の旅（4） スキス行」が掲載される。
8月11日	ベルリン ポーランド	夜11時、ベルリン、ツォー駅出発。ソ連へ。大山という人物と出会う。
8月12日	ポーランド ソビエト連邦	ドイツからポーランドを経由して午後5時半、ソ連の国境に入る。午後6時、ネゴレエで乗り換え。夜9時、食堂でアンドレ・ジッドを目撃。
8月13日	ソビエト連邦	食堂で再度ジッドを見かける。午前11時、モスクワ着。特派員森氏の案内で、クレムリンの赤の広場ほか市街を歩く。ホテル。メトロポリスでまたジッドをみかける。ホテルのレストランで昼食後、GPU（ソ連の秘密警察）の建物などを見る。午後3時、モスクワ出発。

補足資料2 渡欧年譜

8月14日	ソビエト連邦	ウラル山脈通過。
8月15日	ソビエト連邦	
8月16日	ソビエト連邦	ソ連の平原が続く光景に思いを寄せる。
8月17日	ソビエト連邦	ロシアの国土や鉄道という空間について考察する。
8月18日	ソビエト連邦	バイカル湖付近を通過。旅をすることと、万国の論理という問題を考える。
8月19日	ソビエト連邦	夜一二時頃、国境付近に到着。荷物の検査があり、旅券が戻される。
8月20日	ソビエト連邦 満州	ソ連を出国。午前3時、満州国着。大阪毎日新聞の記者にマラソンのフィルムを手渡す。特高課の刑事に案内され、宿で休憩後、 午前10時ハルピンに向かう。
8月21日	満州 朝鮮半島	
8月22日	満州 朝鮮半島	
8月23日	満州 朝鮮半島	
8月24日	満州 朝鮮半島	



## 補足資料2 渡欧年譜

8月25日	下関	午後7時半、下関到着。山陽ホテルで報道陣の質問をうける。午後八時半、「富士」にて姉しずこのいる神戸に向かう。『読売新聞』に「文化統制問題批判」が掲載される。
8月26日	神戸	午前6時神戸到着。阪急電車で梅田に行き、大阪毎日新聞社の歓迎昼食会に出席。その後、藤澤恒夫と会談（「対談 横光利一と藤澤恒夫 一問一答」『モダン日本』1936年11月）。中村嘉一宅で宿泊か？
8月27日	神戸	
8月28日	神戸	
8月29日	神戸	
8月30日	神戸	
8月31日	神戸 東京	午後9時東京駅着。出迎えていた佐々木茂索らと寿司を食べに銀座に出る。
9月1日	東京	午後6時、日比谷音楽堂にて東京日日新聞社主催の「横光利一氏観戦（オリムピック）」談とオリンピック・トーキーが上映される。そこで横光は「ベルリン大会を観て」と題した講演を行う。『文芸春秋』に「南の南欧―渡欧通信」、『文学界』に「同人雑記 スイス便り（川端康成宛）」がそれぞれ掲載される。

## 補足資料2 渡欧年譜

### ○渡欧年譜作成に関する参考文献

- ・高濱虚子『渡仏日記』改造社、1936年8月
- ・「オリムピックを機に日本の文化は十年飛躍しよう／今にして思ふ日本女性の美」『東京日日新聞』朝刊、1936年8月26日
- ・寺崎浩「横光氏を迎へる」『文芸』4巻10号、1936年10月
- ・藤澤桓夫「大阪日記 横光さんを迎へる」『文芸』4巻10号、1936年10月
- ・無署名「文学の神様、帰る」『文芸通信』4巻10号、1936年10月
- ・工藤恆治『横光利一とやまがた』東北出版企画、1978年7月
- ・『定本 横光利一全集』16巻、河出書房新社、1987年12月
- ・井上謙『横光利一 評伝と研究』おうふう、1994年11月
- ・井上謙・掛野剛史・井上明芳編、『横光利一 歐洲との出会い―『歐洲紀行』から『旅愁』へ』おうふう、2009年7月

初出・原題一覧

第一章 「航路を詠む・起源を詠む」——横光利一と洋上句会——『『跨境 日本語文学研究』一〇号、二〇二〇年六月  
ルート ルーツ

第二章 「隆起する「欧州紀行」——横光利一のパリ体験——『『昭和文学研究』七五集、二〇一七年九月

第三章 「書き変わる日本と東欧——横光利一のブダペスト体験——」『『日本近代文学』一〇〇集、二〇一九年五月

第四章 「横光利一とベルリン・オリンピック」『『横光利一研究』一六号、二〇一八年三月

第五章  
(未発表)

第六章 「それでも最期は微笑を浮かべて——横光利一「微笑」論——」『『国文学論叢』六六輯、二〇二二年二月

本論文に所収するにあたり、大幅な加筆修正を行った。